

# 大 桜 遺 跡

平成11・12年度県営ほ場整備事業米沢地区  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001年

茅野市教育委員会

OZAKURA SITE

# 大 桜 遺 跡

平成11・12年度県営ほ場整備事業米沢地区

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001年

茅野市教育委員会

## はじめに

茅野市は縄文時代の遺跡が数多く残された地域で、「縄文の里」として全国に知られています。

尖石遺跡、上ノ段遺跡、駒形遺跡は、学術的価値の高い縄文時代の遺跡として、国の指定を受けています。また、棚畠遺跡から出土した「土偶」は、当地域の土偶の特徴と造形美を合わせ持ち、当時の精神文化を考えるために貴重な学術資料であることから、平成7年に国宝に指定されました。

ここ十数年来、「縄文の里」には様々な開発の波が押し寄せ、50余りの遺跡で記録保存を前提とする緊急発掘調査が行われてきました。ここに報告する大桜遺跡は、県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査です。

発掘調査は平成11・12年度に茅野市教育委員会が行いました。限られた面積の調査でしたが、縄文時代早期から平安時代までの遺構と遺物が発見されました。人々が同じ場所を好み、長期間にわたって生活していたことは、いかにこの場所が住み良い条件を備えていたのかを物語っています。

発掘調査の成果は本書にまとめられています。しかしながら、予想をはるかに上回る成果が得られたために、すべてを報告することができませんでした。不十分な内容ではありますが、本書が多くの人々に活用され、地域文化の向上に役立てば幸いです。

最後になりましたが、大桜遺跡の発掘調査は長野県教育委員会、長野県諏訪地方事務所、地元北大塩区をはじめ、事業に関わった多くの皆様のご理解とご尽力により無事終了することができました。ここに厚くお礼を申し上げる次第であります。

平成13年3月

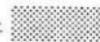
茅野市教育委員会

教育長 両角 源美

## 例　　言

1. 本書は長野県茅野市米沢5799-2番地他に所在する、大桜遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は茅野市教育委員会が実施した。調査期間は平成11年7月23日から平成12年1月13日、平成12年6月26日から9月6日、出土品の整理及び報告書の作成は平成12年1月から3月、平成12年9月から平成13年3月まで行った。
3. 調査組織は第1章第3節に記載している。
4. 本書の執筆は小池岳史が担当した。平安時代の土器の実測・トレースは柳川英司が行った。
5. 本報告に係る出土品と諸記録は、茅野市教育委員会が収集・保管している。
6. 発掘調査から報告書作成に至る中で、小林公明氏、小松隆史氏、五味一郎氏、長崎元廣氏、樋口誠司氏、宮板清氏、武藤雄六氏、諏訪考古学研究会からご教示を賜った。記してお礼を申し上げたい。
7. 本書の挿図は以下のとおりに作成した。
  - (1) 遺構及び遺物の実測図の縮尺は各図中に示した。
  - (2) 遺構実測図の水系高は海拔高(m)である。
  - (3) 遺構図版中の土坑深度は、基準を設けて計測した。また、住居址の縁から半分以上外側にある土坑は、検出面から計測した。
  - (4) 指示のない網掛けは以下のとおりである。

焼　土



結　土



搅　乱



# 目 次

序 文  
例 言  
凡 例

茅野市教育委員会教育長 向角 源美

第Ⅰ章 調査経緯	1
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 発掘調査の方法と経過	1
1. 平成11年度	1
2. 平成12年度	2
第3節 調査組織	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	3
第Ⅲ章 遺跡の基本土層	5
第Ⅳ章 検出された遺構と遺物の概要	5
第1節 検出された遺構の概要	5
1. 繩文時代	5
2. 平安時代	6
第2節 検出された遺物の概要	6
1. 繩文時代	6
2. 平安時代	6
第Ⅴ章 検出された遺構と遺物	19
第1節 繩文時代	19
1. 住居址	19
2. 土 坑	54
3. 埋設土器	61
4. 焼土址	64
5. 列石・配石	67
6. 黒曜石集積	67
7. 黒（燧）色土層面検出の遺構	67
第2節 平安時代	71
1. 住居址	71
2. 焼土址	77
第VI章 ま と め	79

# 第Ⅰ章 調査経緯

## 第1節 発掘調査に至る経過

平成10年3月17・18日、茅野市教育委員会は遺跡の範囲と内容を把握する目的で、は場整備事業対象範囲の試掘を行う。事業計画によると遺跡指定範囲のほぼ全域が発掘調査の対象であるが、平成11・12年度に発掘調査した遺跡北西端の水田3筆は、諸事情により試掘することができなかつた。

重機を用いて17トレンチ（366m<sup>2</sup>）を試掘した結果、事業対象範囲のほぼ全域から遺構が検出された。時代と時期は縄文時代早期から中期、弥生時代後期、平安時代、中世である。

試掘の結果を見る限り、遺構と遺物の量は決して多くない。しかし、遺構は事業対象範囲のほぼ全域に分布し、南側で検出された平安時代の住居址は黒色土層中に床面がつくられているほか、遺跡は道路・河川・人家に囲まれ廃土（表土）置き場を確保することが難しいなどの点から、発掘調査は難渋することが予想された。

文化財課では試掘調査の結果に基づき、調査対象面積を13,000m<sup>2</sup>以上とする発掘調査計画書を作成した。しかし、は場整備事業計画と調整を図ることができず、開発側は試掘調査範囲の全域をは場整備事業の対象範囲から除外し、未掘範囲の3筆を事業対象範囲に計画変更した。3筆のうち1筆は耕作土のみを剥ぎ取るため、発掘調査の対象にならないこととなつた（第2図の18～20トレンチを入れた1筆）。

計画変更を受けて文化財課は、①発掘調査は市教育委員会の直営とする、②調査は平成11年度に行う、③調査面積は1,900m<sup>2</sup>以上とする、④発掘調査費の総額は23,108,000円（農政負担88%、農家負担12%）とする発掘計画書を提出し開発側と合意に至る。

平成11年4月15日に長野県源訪地方事務所長香坂守義と茅野市長矢崎和広との間で「埋蔵文化財発掘調査委託」を締結し、発掘調査に着手した。

## 第2節 発掘調査の方法と経過

### 1. 平成11年度

発掘調査は平成11年7月23日に開始した。表土を剥ぎ取る作業は重機により行う。掘り下げる面は遺構が確認できる暗褐色土層からにぶい黄褐色土層（ローム漸移層）とする予定であった。しかし、作業を進めるうちに、地点毎に掘り下げ面を変えねばならないこととなつた。調査対象の2筆の水田は標高の高い側を削り、そこから出た土で低い側を埋める近・現代の造成によってつくられていた。ローム層まで削平された場所と、遺物を多量に含む黒（褐）色土層の残存する場所が混在していたためである。

遺構の検出、および掘り下げ作業は、7月23日から行った。調査区の東側では縄文時代中・後期の生活面？とも考えられる面が一部に残存し、中央部から南西部にかけて縄文時代後期の敷石住居址が良好な状態で検出された。また、明黄褐色土層まで削平された地点でも、足の踏み場がない程の多くの土坑が検出されていった。

11月、開発側に調査の難航を伝える。今後の発掘調査とは場整備事業の進め方についての協議を現地で行い、翌年度の9月上旬までに発掘調査を終了させることで合意に至る。今年度の発掘調査の目標は、今年中に調査区の南側（約1,300m<sup>2</sup>）を掘り上げることとした。

遺構検出作業と併行し、公共座標による基準杭の設置を業者委託により行う。調査区は南西隅を基準に直線内を2m四方に区切り、X軸を数字、Y軸をアルファベットとしてA-1、-2と呼称した。

図面はS=1:20を基本とした。平面図は業者委託による航空写真測量と遺構実測、調査補助員と作業員による平板測量で作図し、断面図は調査補助員と作業員が作図した。

現場での発掘調査は、平成12年1月13日まで行った。目標とした約1,300m<sup>2</sup>はほぼ掘り上げられたが、航空写真測量で作図した平面図の校正と、各住居址の印字の断面図は作図できず、翌年度の調査に繰り越された。

整理作業は1月から3月まで行った。遺物の注記と、図面の整理が主な作業となった。

調査面積の縮小により発掘調査費が減額となり、2月7日に変更委託契約を締結する。発掘調査費の総額は14,500,000円であった。

## 2. 平成12年度

平成12年4月17日に長野県源訪地方事務所長久保田勝士と茅野市長矢崎和広との間で「埋蔵文化財発掘調査委託」を締結する。発掘調査費の総額は7,800,000円である。

発掘調査は6月26日に開始した。昨年度に手が付けられなかった北側約600m<sup>2</sup>の遺構検出および掘り下げ作業を行い、各遺構の図面の作図は昨年度に作図した平面図の校正と併行して行うこととした。なお、平面図は航空写真測量と平板測量で作図した。

調査が終了に近づいた9月2日に、現場見学会を開催した。雨が断続して降る中での見学となったが、地元北大塙区や隣接区を中心に約80名の見学者が参加した。現場での発掘調査は9月6日に終了した。

9月25日に、調査区南側の水田の表土剥ぎ作業が行われることとなり、立ち合いを実施した（第2図の18～20トレンチ）。併せて、進入路が新設される箇所の立ち合いも実施する（21トレンチ）。20トレンチでは绳文時代の住居址が確認された。

遺物・図面の整理作業と報告書の作成は、9月から翌年3月まで行った。

平成13年1月23日に変更委託契約を締結する。発掘調査費の総額は7,000,000円であった。

## 第3節 調査組織

調査主体者 両角源美（教育長）

事務局 宮坂泰文（教育次長）

文化財課 矢崎秀一（課長） 萩原幸雄（係長） 守矢昌文 小林深志 大谷勝己 功刀 司

小池岳史 百瀬一郎 小林健治 柳川英司 大月三千代

調査担当者 小池岳史 柳川英司

調査補助員 堀内 潭 牛山矩子 太田友子

発掘調査・整理作業協力者 萩原澄雄 牛山和男 牛山晴雄 内田友一 木戸克子 小池泰幸 小池花織

小飼満智子 小平 寛 小松純子 五味計佐雄 酒井みさを 相馬利宏 大勝弘子

立岩貴江子 田中 進 田実雅子 野沢みさ子 横口 豊 横口美智代 平出雄一

福田幸宗 藤森三千恵 増木三訓 丸岡能彦 三井幸治 宮坂 功 三輪辰秋

柳沢 宏 柳沢 優 吉田幸男 吉田 実 吉田フサ子

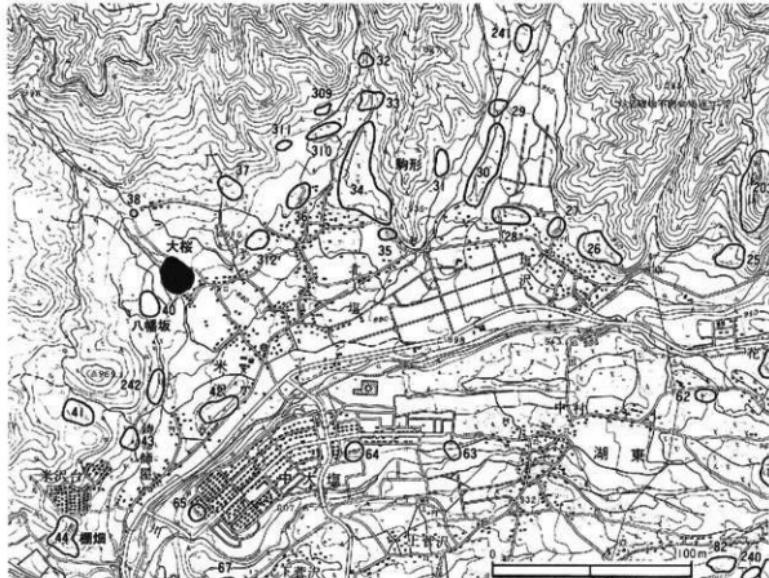
## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

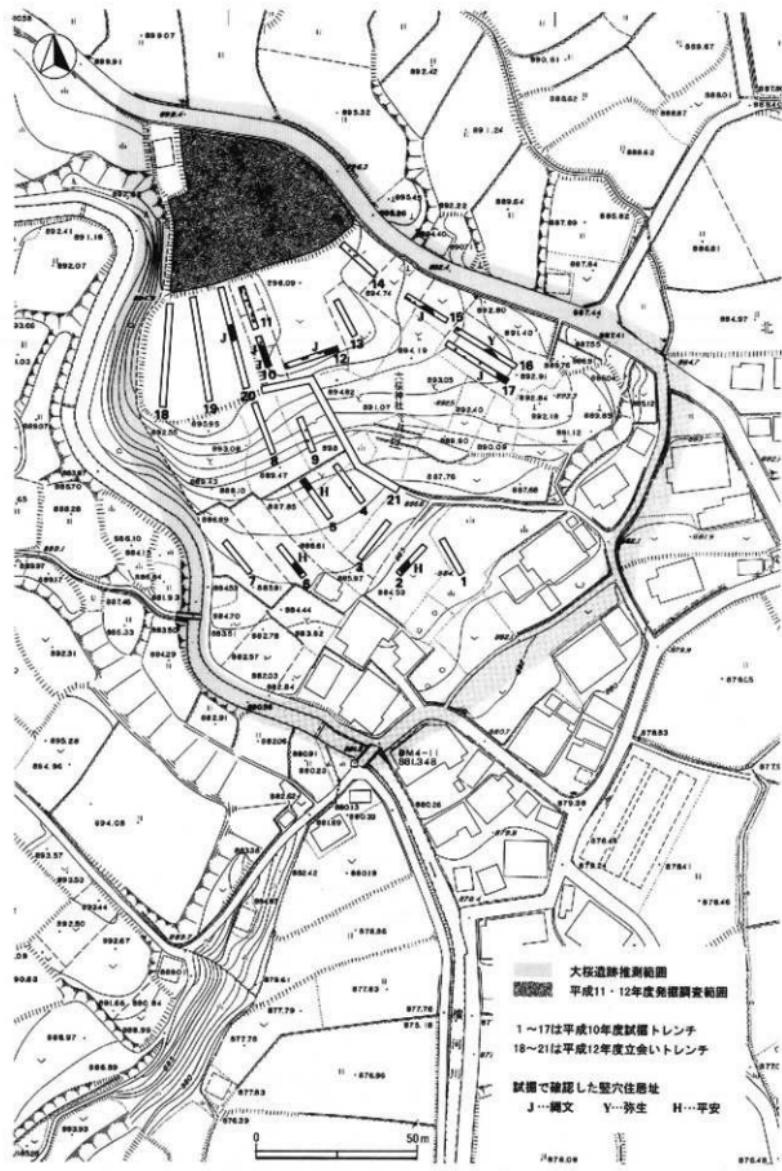
大桜遺跡は長野県茅野市米沢地区に所在する。JR中央東線茅野駅の北東、直線距離にして約5kmである。遺跡が位置する霧ヶ峰南麓と、それに続く永明寺山麓には、八ヶ岳山麓と並んで縄文時代やそれ以降の遺跡が数多く分布している。国史跡の駒形遺跡、国宝「土偶」が出土した棚畠遺跡などと共に、米沢地区を代表する遺跡である。

遺跡は霧ヶ峰湿原「池のくるみ」を水源とする横河川左岸の台地状の扇状地に立地する。調査地点の標高は約895.5~897.5mである。横河川沿いに、諏訪・霧ヶ峰方面へ通じる古道「市峠」があり、遺跡はその登り口にある。眺めの良い場所で、南東方向には八ヶ岳の山並みを望むことができるほか、遺跡を北に上れば遠くに南アルプスや富士山を望むことができる。

「大桜」の遺跡名は、扇状地先端部に祀られている「大桜神社」に由来する。大正13年刊行の『諏訪史』第一巻には、土器・石鏃・石錐・石匙・磨製石斧・石棒などが田石寅朗氏により採集された記述がある。古くから、縄文時代の遺物が拾えた遺跡として知られていたことが窺える。

周辺の遺跡として、本遺跡と横河川を挟んだ対岸には八幡坂遺跡（遺跡台帳登録番号No40、縄文時代早期～後期、中世）があり、本遺跡から直線距離にして約1,000m東に駒形遺跡（遺跡台帳登録番号No34、先土器時代、縄文時代早期～後期）、棚畠遺跡（遺跡台帳登録番号No44、先土器時代、縄文時代早期～晩期、平安時代、中世、近世）は約1,500m南西にある。





第2図 大桜道跡推測範囲と発掘調査区 (1/1,500)

### 第III章 遺跡の基本土層

基本土層は調査区南側壁の中間地点で作図した。この地点は、調査区となった平坦面を東西に2分する浅い谷の基点に当たる。他の地点に比べてローム層までの深さがあり、水田造成の堆土にも覆われていたため、黒色土層から黒褐色土層の残りが極めて良い。黒色土層から黒褐色土層には、場所により拳大から30cmほどの自然隙が大量に入る。ローム層にも大小の隙が含まれており、二次堆積を示している。

1	基本土層
2	1 黒色土10YR2/1 耕作土(水田)
3	2 黒色土10YR1.7/1 + 褐褐色土10YR3/3+ローム層 基上 ローム層 2m~5m少
4	3 黒色土7.5YR2/1 旧耕作土 灰化物 2m少
5	4 黑色土10YR1.7/1 (7.5YR1.7/1) ローム粒子少 灰化物 2m少
6	5 黑色土7.5YR2/1 ~ 黑褐色土7.5YR2/2 ローム粒子多 2m~1cm少
7	6 褐褐色土10YR3/3~3/4 ローム粒子多 ローム層 2m~1cm少
8	7 黑色土10YR4/4 ローム粒子多 ローム層 2m~2cm多
	8 明褐色土2.5YR6/6~7/6 ローム層 2m~10cm少

第3回 遺跡の基本土層 (1/20)

### 第IV章 検出された遺構と遺物の概要

#### 第1節 検出された遺構の概要

##### 1. 繩文時代

検出された縄文時代の遺構には、住居址、土坑、埋設土器、焼土址、列石、配石、黒曜石集積がある。

住居址は28軒である。時期の内訳は中期14軒、後期9軒、不明5軒である。炉石や炉体土器がない焼土の中で、ローム層を掘り込み粘土を伴わないものを縄文時代の住居址の炉とした。

土坑は2276基に番号を付した。整理作業時に48基が欠番となったため、実数は2228基である。土坑番号は住居址の柱穴にも付している。住居址の壁が削られ柱穴の位置が判然としないものや、住居の度重なる建て替えで柱穴を特定できないものが存在するためである。土坑とした「穴」には、柱穴・墓坑・貯蔵穴と考えられるものがある。柱穴は住居址の柱穴、方形柱穴列の柱穴のほか、いわゆる「ピット群」と呼ばれる柱穴と想定される径30~40cm程の小穴がある。方形柱穴列は1基も確認できていない。遺構の時期からみて、方形柱穴列が存在した可能性は高いが、柱穴とみられる穴が密集し、調査区域外へかかるものもあることなどから、組み合わせる柱穴を見出すことができなかった。墓坑と考えられる土坑は約90基ある。副葬品とみられる垂飾が出土したもの、被葬者の顔に鉢を伏せた「甕被葬」があるものは容易に墓坑と見なされるが、このような遺物の出土は稀である。多くは平面形(横円形・隅丸長方形)と深さから推測している。貯蔵穴と考えられる土坑は15基ほどある。断面形が袋状または筒状で底径が1m以上のものを貯蔵穴と考えた。しかし、断面形が筒形で底径1m以下のものがないとは言えない。このような小ぶりな貯蔵穴があるとすれば、大きな柱穴(方形柱穴列の柱穴)との識別を形状で行うことは難しい。識別の一つに覆土を比較する方法があるが、ごく一部の土坑を除き半截していないため、現状で小ぶりな貯蔵穴を抽出することは難しいと思われる。

埋設土器は14基に番号を付した。住居址の埋甕および埋甕炉と考えられない土器で、口縁部または底部などのいずれかの部位が全周し、併せて掘方で確認できたものを埋設土器とした。第24号住居址に伴う伏甕とした第13号埋設土器や、検出状態と遺存状態から埋設土器とする根拠が乏しいものを欠番としたため、実数は9基である。

焼土址は10箇所に番号を付した。黒色土層および黒褐色土層で検出され、住居址の炉と考えられないものを焼土址とした。土坑の覆土に入る焼土塊の集中や、住居址の床面に残された焼土に番号を付したものがあり、現場および整理作業時に欠番としている。実数は5箇所である。

列石・配石は、黒色土層および黒褐色土層中から大小の自然礫とともに検出された。今回、番号を付したものはない。遺構が自然礫と混在し、水田造成や搅乱により部分的に乱された状態で検出されたため、本来の遺構の範囲および単位が推測できなかったことによる。少ないながら、明らかに礫が列状に据えられたものの、複数の礫が1箇所に据えられ範囲が明確なものなどがある。これらの遺構は、列石・ター15配石・チー13配石などと呼称し、図版中に表示している（第32・42・43図）。

黒曜石集積は1箇所である。

## 2. 平安時代

検出された平安時代の遺構には、住居址と焼土址がある。

住居址は6軒である。時期はいずれも9世紀後半である。

焼土址は1箇所である。第26号住居址の覆土中から検出されたものである。

# 第2節 検出された遺物の概要

## 1. 繩文時代

出土した遺物は土器、石器、土製品、石製装身具である。

土器は早期末葉から後期中葉までの時期が出土している。整理箱に換算して約30箱である。早期末葉から中期中葉の土器で器形が窺えるものは、土坑から出土した前期前半黒浜式の深鉢（胴部下半から底部）と中期中葉井戸尻式の深鉢（口縁部から胴部上半）である。中期後半以降は住居址の構築に伴い、土器の出土量が急増する。器形の窺える土器は約60個体である。

石器の大半は中期後半から後期中葉のものである。整理箱に換算して約10箱である。器種は表2に示したものが出土しているが、その総数は未整理のために把握できていない。なお黒曜石の総重量は10,584gである。

土製品は土偶と土製円盤が出土している。土偶は2点で、住居址と土坑から出土している。土製円盤は数量を把握していない。

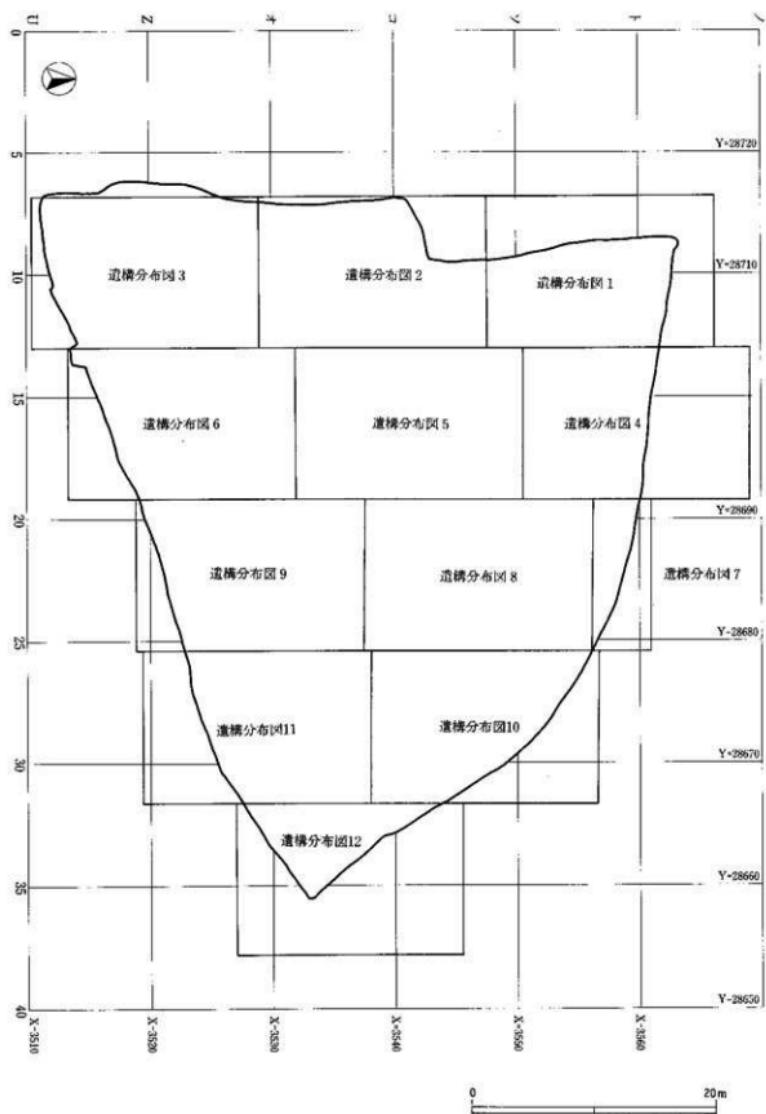
石製装身具は7点が出土している。1点は住居址の覆土から出土し、他は墓坑とみられる土坑から出土した。内訳は硬玉製2点、曹長岩製1点、琥珀製3点、不明1点である。

## 2. 平安時代

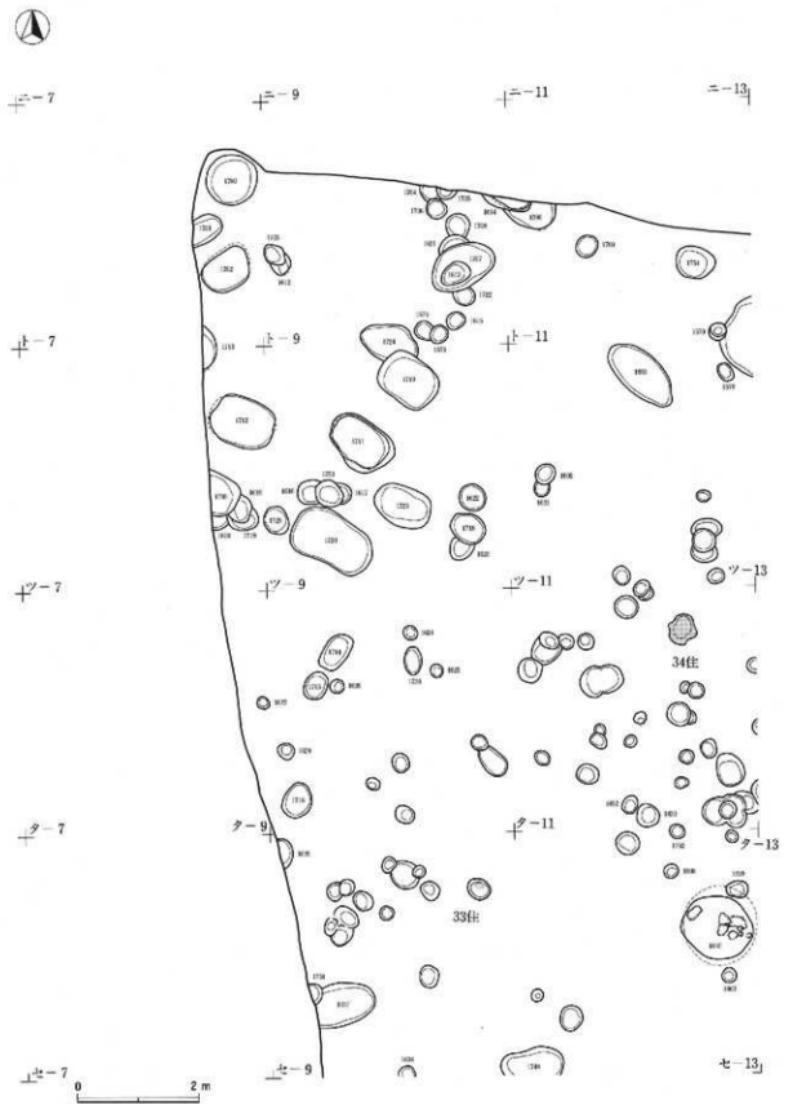
出土した遺物は土器と鉄製品である。

土器は上部器（壺・黒色上器・黒色上器高台付壺・甕）、須恵器（壺・甕・瓶）が出土している。整理箱に換算して約2箱である。

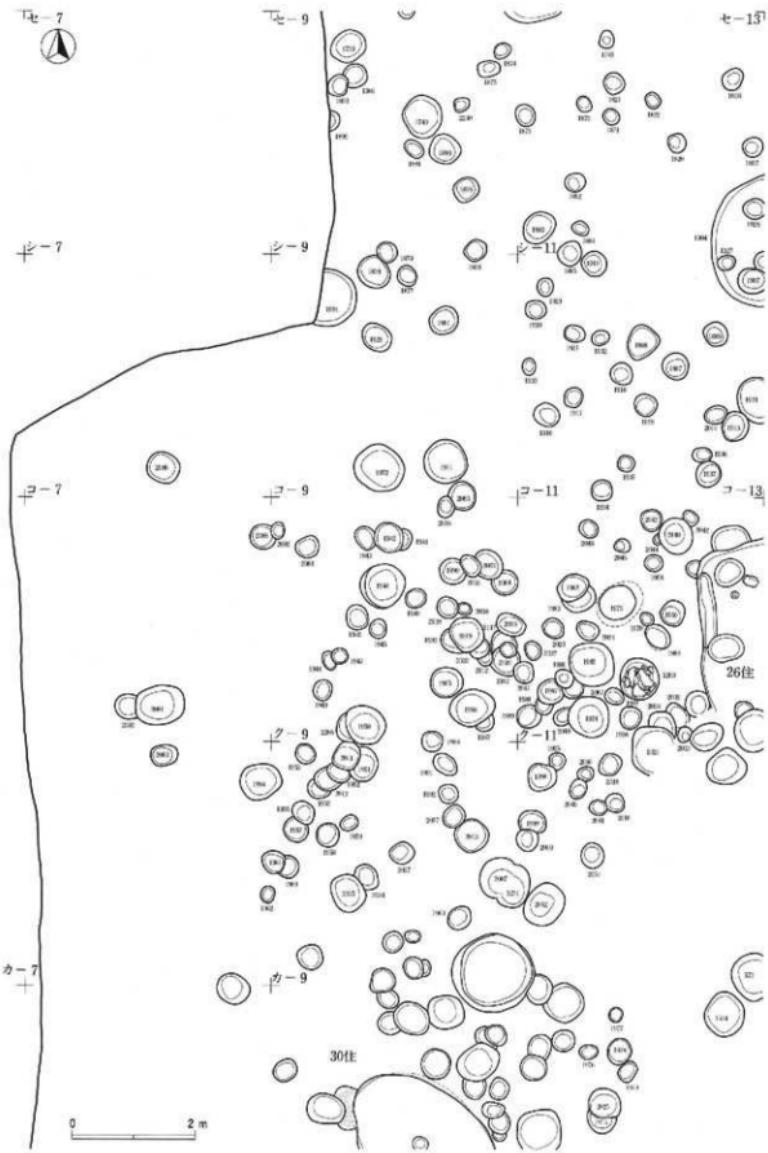
鉄製品は鉄製紡錘車が1点出土している。



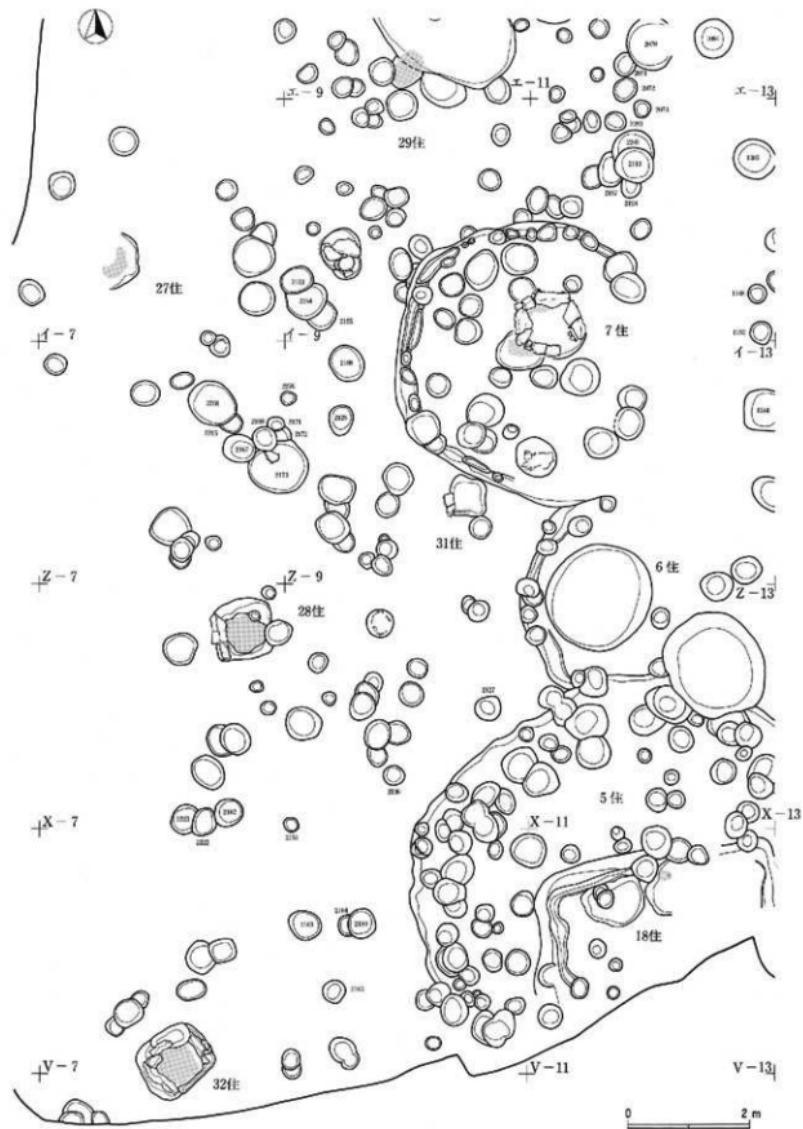
第4図 遺構分布図配囲図 (1/400)



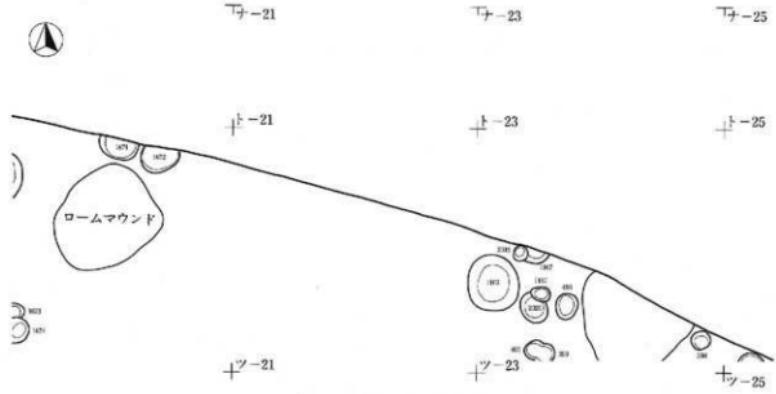
第5図 遺構分布図1 (1/80)



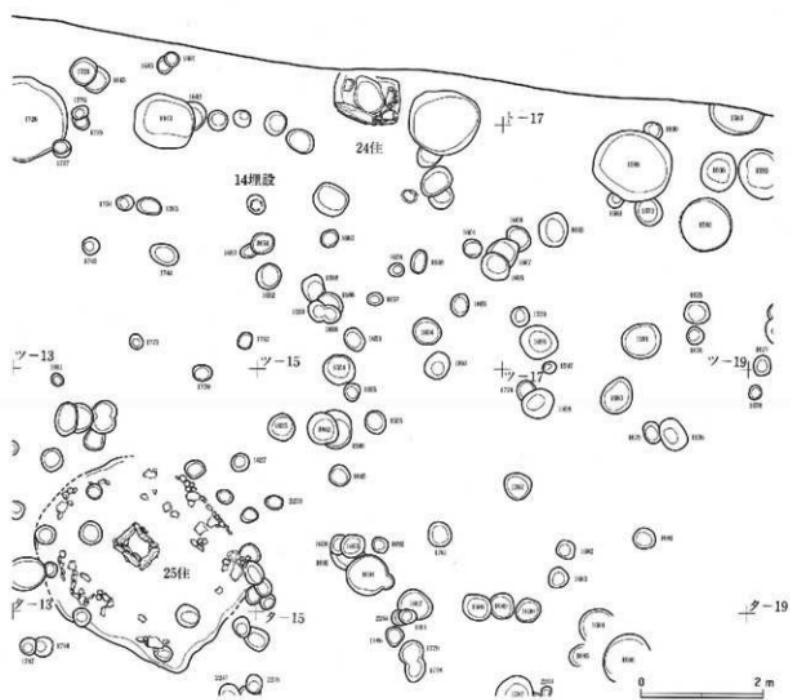
### 第6回 遺構分布図2 (1/80)



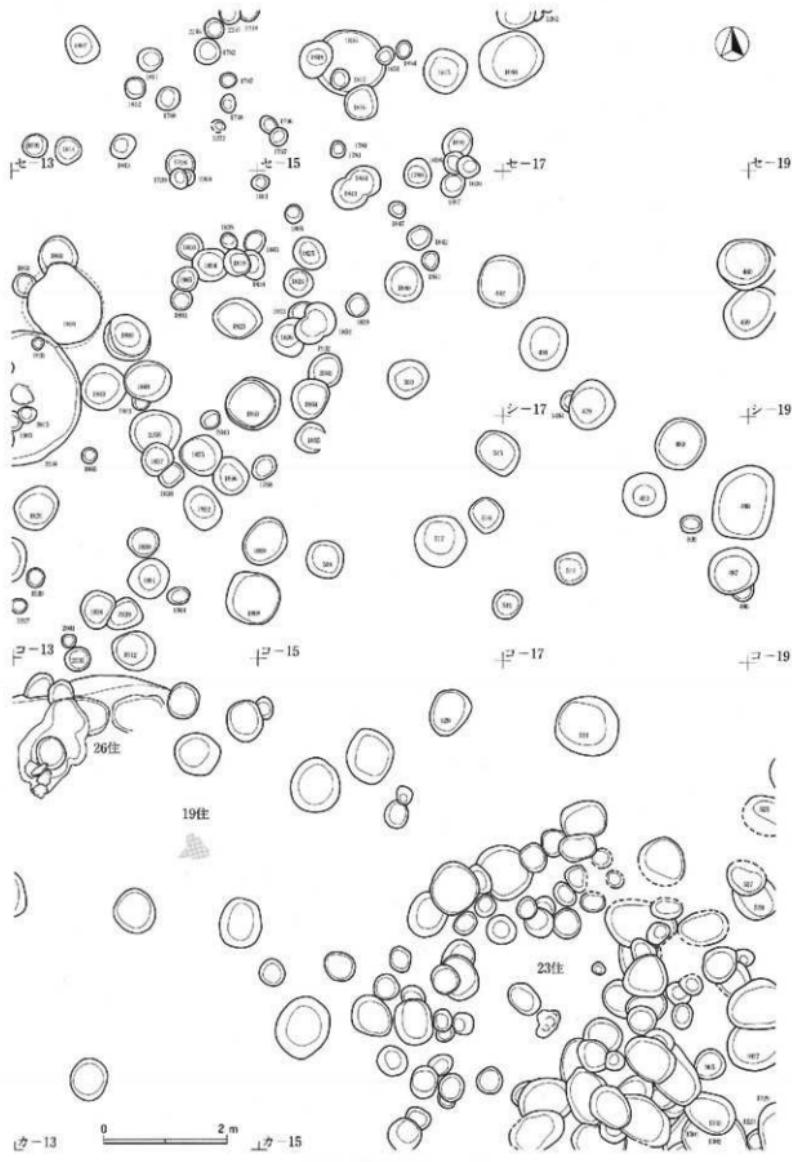
第7図 濃度分布図3 (1/80)



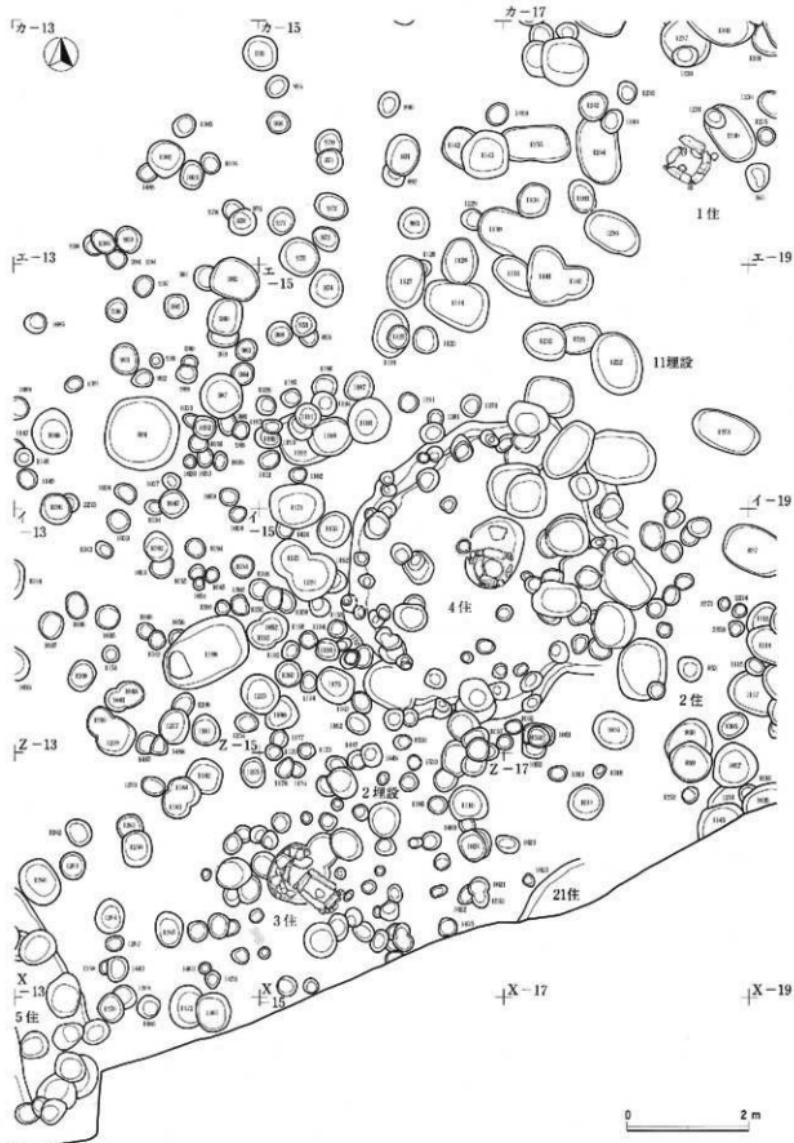
第8図 遺構分布図7 (1/80)



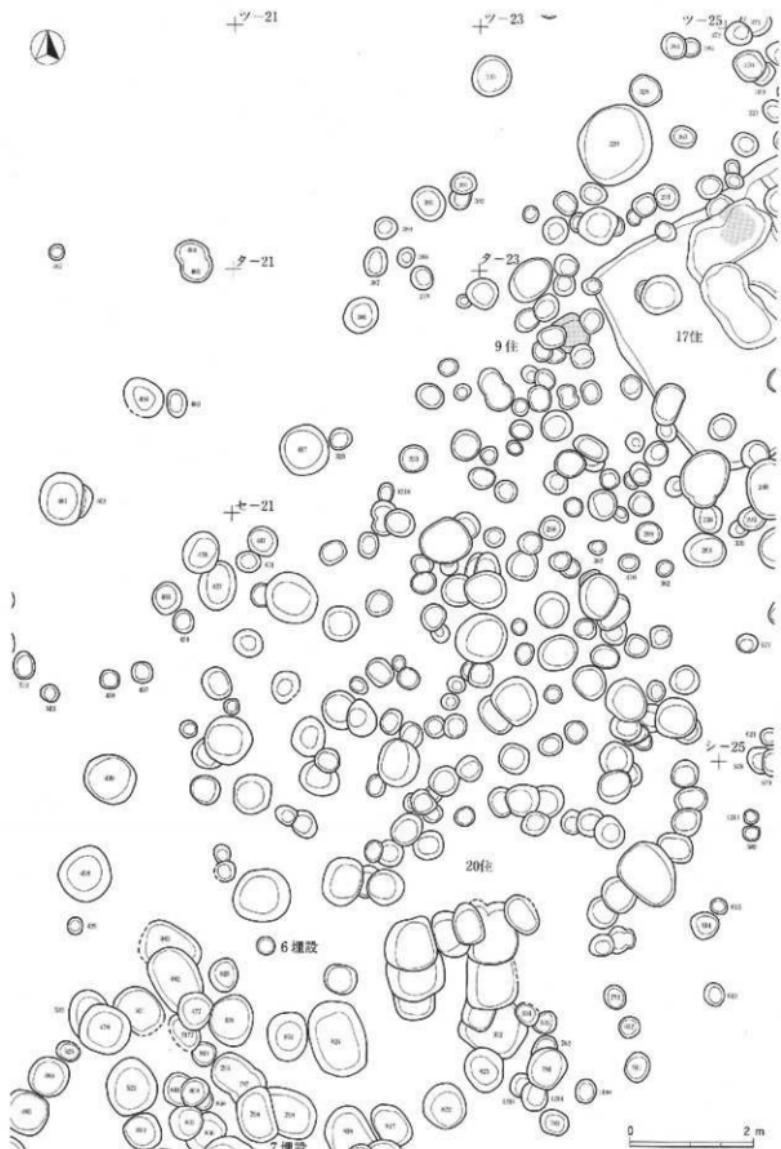
第9図 遺構分布図4 (1/80)



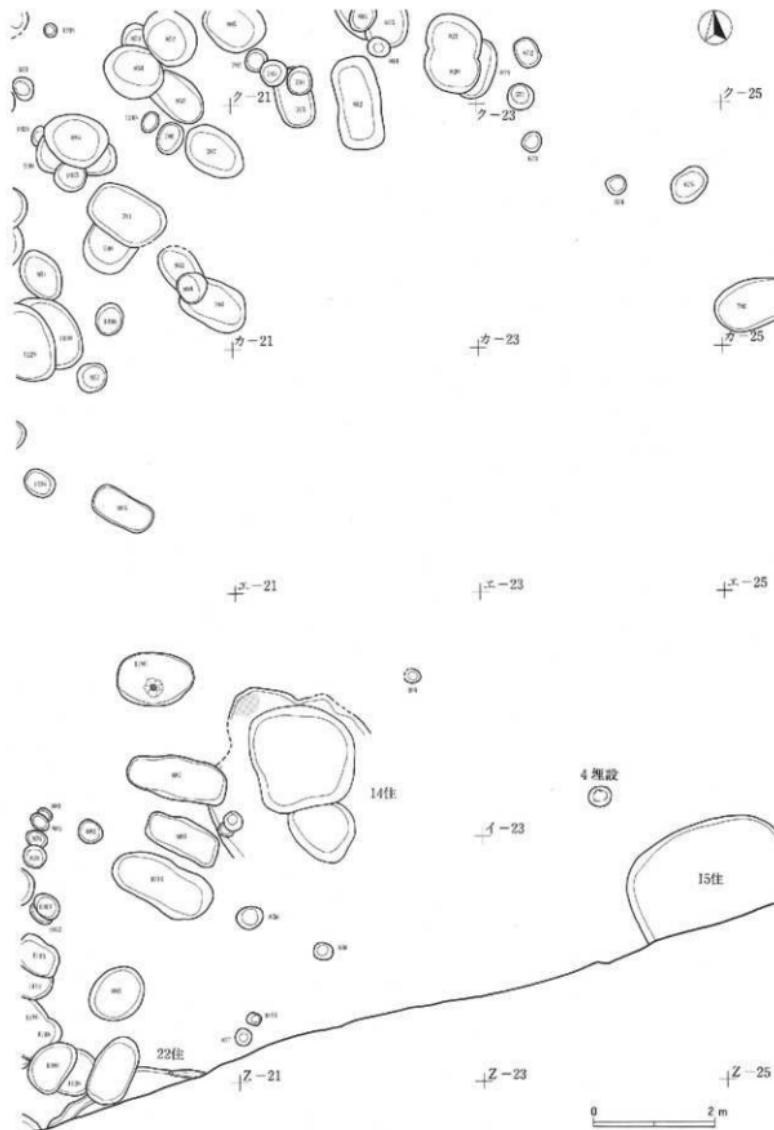
第10図 遺構分布図 5 (1/80)



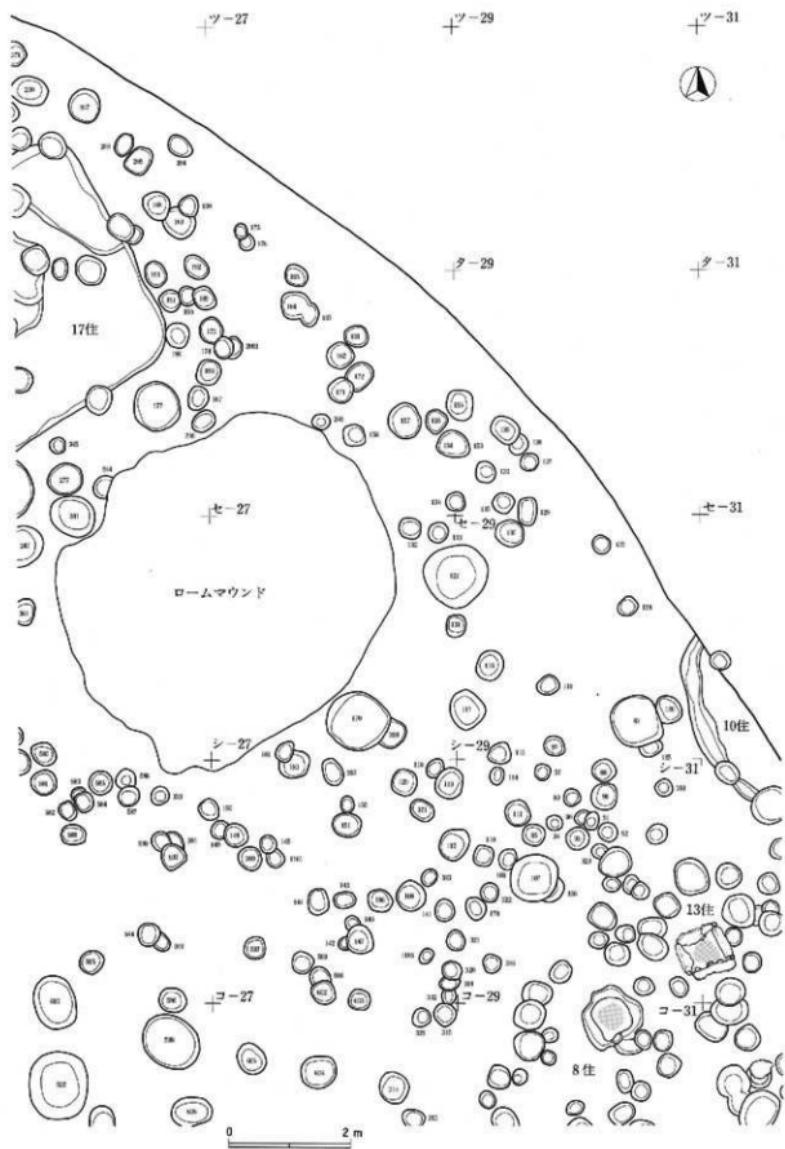
第11図 滅情分布図 6 (1/80)



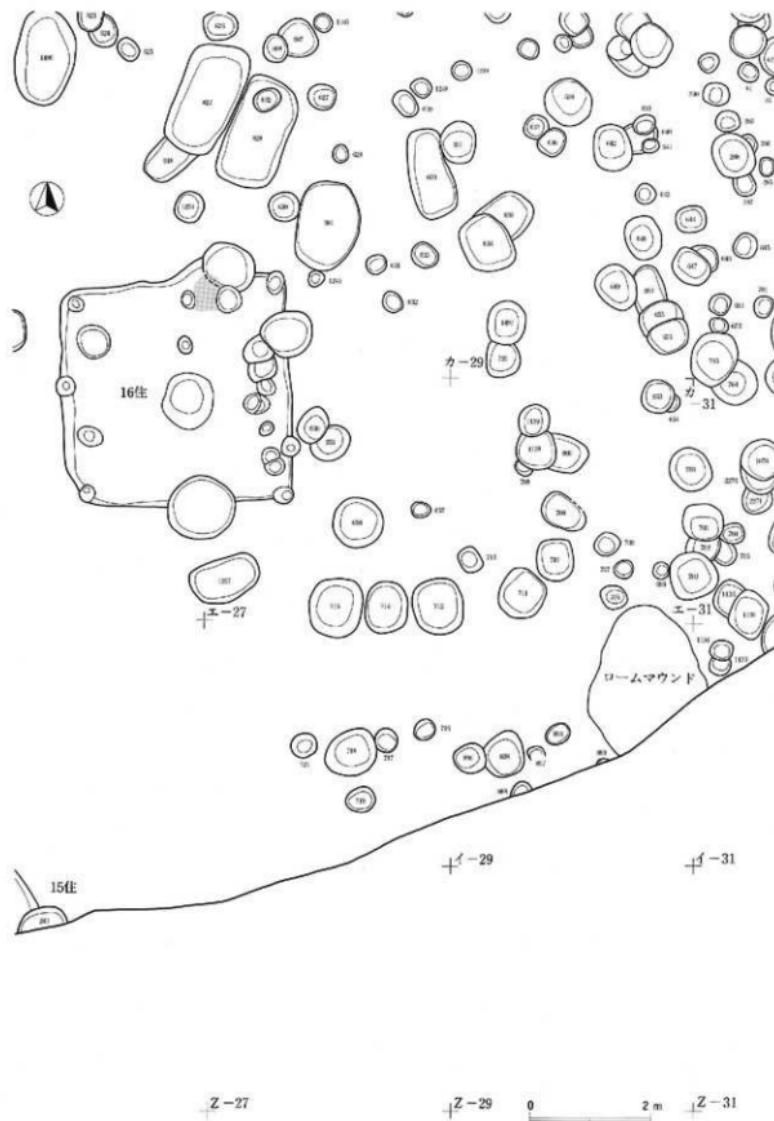
第12図 造構分布図 8 (1/80)



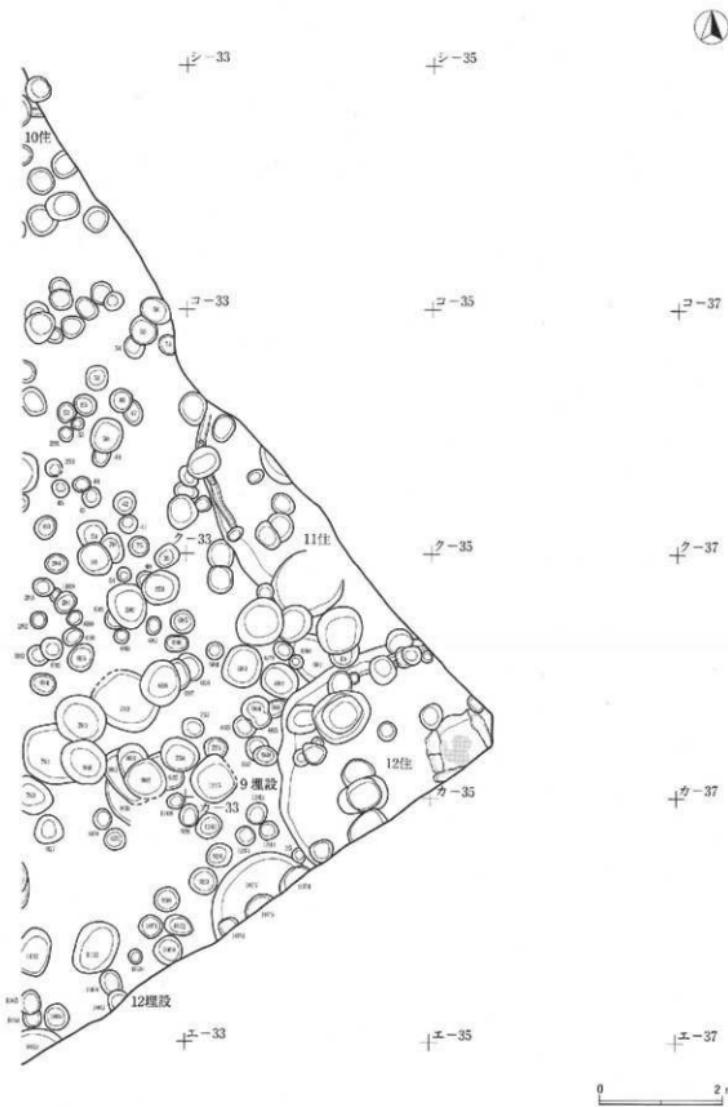
第13図 遺構分布図 9 (1/80)



第14図 造構分布図10 (1/80)



第15図 造構分布図11 (1/80)



第16図 遺構分布図12 (1/80)

## 第V章 検出された遺構と遺物

### 第1節 繩文時代

#### 1. 住居址

第1号住居址（第17図）

遺構 エー-18グリッドを中心とする。北側は第23号住居址の出入口部と僅かに重複すると思われる。住居址内から検出された墓坑とみられる土坑は、住居址の構築時期からみて古い時期の遺構と考えている。礫の検出面は主体部が暗褐色土層から褐色土層で、出入口部は黒褐色土層である。

本址は副軸方向に発達した出入口部（張出部）に、大きな板状の礫を敷いた敷石住居址である。礫の残存状態からみて、炉の周囲には礫が敷かれていなかったと考える。また、炉の東と北東から敷石とともに板状の礫が検出されたが、土坑（墓坑）の上面に位置するものがあるため、本址の敷石とは言い切れない。炉の設置レベルからみて、浅いながらも竪穴構造をもつ住居址と考えられるが、礫の検出を優先した調査のために地山への掘り込みは確認できていない。

住居に伴う礫の範囲は、一辺約6~6.5mの隅丸方形を呈す。なお、出入口部の敷石を張出部とみるならば、主軸部の主軸長は約4.5mとなる。主軸方向はN-60°Wを示す。

出入口部の敷石は、礫の並びからみて主軸を基軸に礫が敷かれたと考えられる。主軸上に位置する礫の隙間に小さな小石が詰められる。出入口部の南側には、水田造成時または耕作時に大きな円礫を埋めた擾乱がある。この場所には出入口部から北東に延びる敷石（配石）と同様のものが、主軸を挟み対称に敷かれていた可能性が高い。また出入口部の敷石と北にある列石との間に、大きな円礫を埋めた擾乱がある。列石は出入口部の敷石に向かい一直線に据えられるため、擾乱地点に列石、または列石につながる敷石が存在したものと推測される。本址は列石を伴っていた可能性がある。

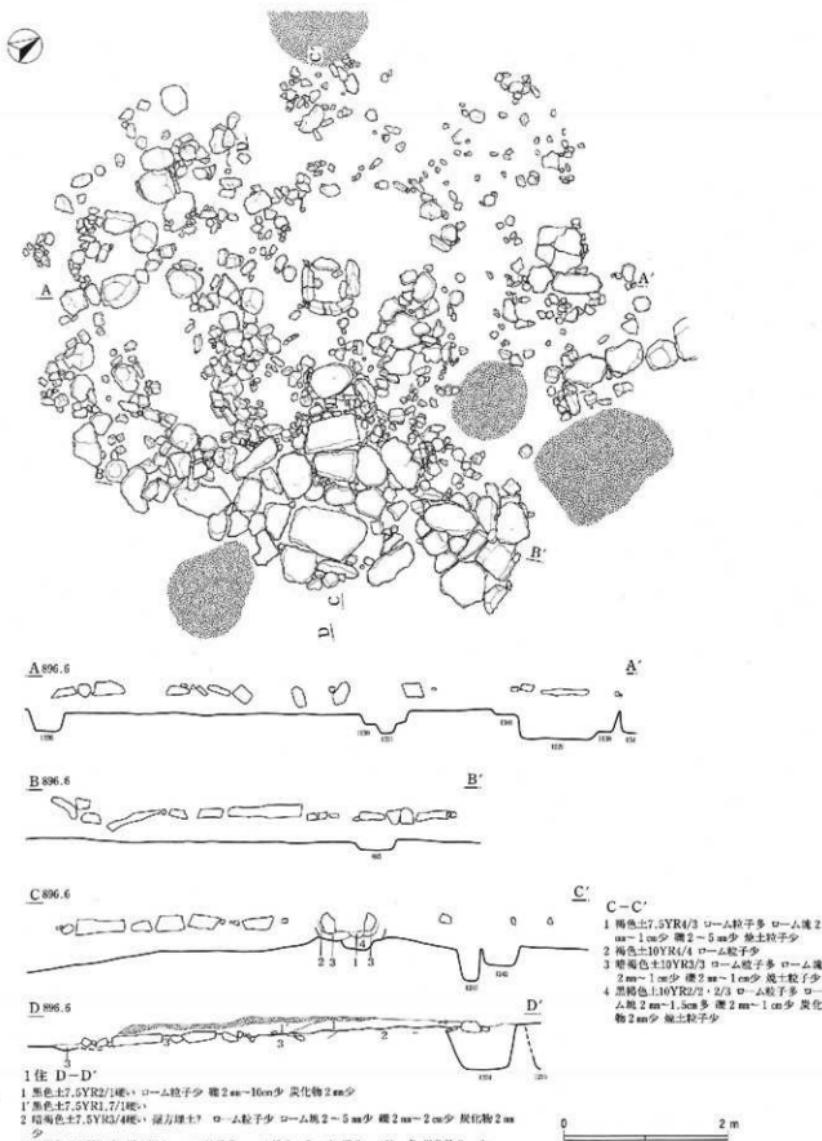
主体部に遺存する礫で注意すべきは、出入口部の敷石から南・西へと並ぶ大きな礫（外側の礫）と、炉の周りをめぐる直径3mほどの大小の礫（内側の礫）である。ともに僅かなりとも動いた状態と想像されるが、外側の礫は壁に間わる礫、周堤礫、住居廃絶後の配石などが考えられ、内側の礫は壁に間わる礫か住居廃絶後の配石（集石）のどちらかと考えられる。内側の礫に関して言えば、板状や柱状の角礫が多く、礫が石圓炉に向かい傾く傾向がある。礫の間に土は所々とて硬く締まることが確認された。また、礫に混じり土器片や磨製石斧は出土したが、焼土や骨片は確認されていない。以上から内側の礫は、壁体に間わる礫が炉に向かい崩落したのではないかと考えている。外側の礫は内側の礫の解釈を受け、周堤礫と考えておく。

柱穴は判然としない。礫下から柱穴状の土坑が検出されたが、規模と位置に規則性が見出せない。

炉は石圓炉である。炉内に焼土層ではなく、焼土粒子が散在する程度である。断面形は段掘りともみえるため、炉内に上器が埋設されていた可能性がある。

住居址の覆土はD-D'に示したとおり分層された。1・1'層は覆土、3層は掘方埋土と考えられる。2層は1・1'層と色調差が明瞭である。層境が硬く締まっていたことから、2層の上面を床面と考えている。

遺物 重機による表土剥ぎ作業において、黒色土層および黒褐色土層から大小多量の礫が検出された。この時点では住居址と認識できなかったが、何らかの遺構であると考えて2m四方のグリッドを4分割し、1m四方ごと手で掘り下げる作業に切り替えた。遺物を遺構に戻す上で有効と考えたためである。さらに状況



第17図 第1号住居址 (1/60)

に応じて、「黒色土層内礫レベル」・「敷石レベル」などで取り上げ、後で上下関係が検証できるよう心がけた。基本的に敷石住居址の調査は、この方法を用いている。第1・2号住居址では多くの土器を住居址に戻すことができたと思われる。

覆土および床面付近から、多くの土器が出土した。型式判定できた土器の主体は加曾利B1式からB2式で、堀之内2式の終末といわれる「石神類型」の土器はほとんど含まれていない。加曾利B1式は3単位把手付唇消縄文深鉢、平縁の鉢・深鉢、内面文のある浅鉢などである。平縁の鉢・深鉢では横帯文の間隔が空き、無文帯に区切文がみられるものがある。加曾利B2式は3単位把手付唇消縄文深鉢で、少なくとも3個体分の土器片がある。把手は立体的ではなく、横帯文は弧線で、單位文は対弧文である。内面文は1~2条程度の沈線となる。ソロバン玉状の深鉢は見当たらない。

時期 出土した上器からみて、加曾利B1式後半から2式前半の間に構築された住居址と考えられる。

#### 第2号住居址（第18図）

遺構 アー18グリッドを中心とする。奥壁は第4号住居址の出入口部の敷石上につくられている。住居址内から検出された墓坑とみられる多くの土坑は、炉や出入口部の敷石下にある。土坑は住居址より古い時期の遺構と考えられる。礫の検出面は黒褐色土層から暗褐色土層である。

本址は出入口部（張出部）に大きな板状の礫を敷き、炉を中心に壁体に間わる礫をめぐらした敷石住居址である。礫に囲まれた平面形は、出入口部の敷石が僅かに張り出すものの、奥壁が張る隅丸五角形といえる。主軸方向はN-90°-Wである。

平面規模や壁高等などの仕居プランをみると注目すべきは、第4号住居址の出入口部に積石された壁である。第4号住居址との重複部ではその覆土が壁となるため軟弱であり、大きな礫を積み上げて強固な壁をつくる必要があったと考える。壁の高さは40cmほどで、一抱えほどもある板状と柱状の礫を2、3段積み上げている。柱状の礫は長辺が壁に沿うように積んでいる。炉の周間をめぐる大きな礫に奥壁のごとく2、3段積石された礫は見当たらないため、奥壁以外の壁は地山を掘り込みつくられていたと考えられる。つまり、平面規模は礫の範囲より一回り大きいこととなる。礫から平面規模を求めるならば、主軸長と副軸長は6m前後となるが、実際の副軸長は7m以上と考えられる。また、掘り込みで生じた壁の高さは、奥壁の積石からみて40cm以上と考えられる。

敷石は出入口部から炉までの主軸線上に限り敷かれていたと考えられる。第1号住居址と同じく主軸を基軸に礫が散かれ、礫の並びも類似する。しかし、2本の立石を伴う点で異なっている。立石は角のとれた柱状の安山岩で、立石間の間隔は約30cmである。

炉は石圓壠臺炉ではほぼ完存する。板状と柱状の礫で四辺を囲い、外側に小礫を添えている。北辺に添えられた礫は出入口部から延びる敷石に連結する。炉体土器は器壁の薄い深鉢で、胴部中位から底部である。正位に埋設されている。焼土は土器内の下層（2層）に限り確認された（C-C'）。炉の半截では炉石の下から板状の礫が検出された。炉のつくり替えもあったのだろうか。

柱穴は判然としない。礫下から柱穴状の土坑が検出されたが、規模と位置に規則性が見出せない。

遺物 炉体土器は筒形の深鉢で、いわゆる石神類型の精製深鉢である。残存する高さは約14cm、残存部での最大径は約20cm、底径は10.5cmである。胴部中位を沈線2条で横位区画し、区画内に櫛状工具で横位に条線を重ねる。胎土は緻密で、雲母を多量に含む。外面の整形は丁寧なミガキである。底部に網代痕がある。また、掘方の理七から深鉢の底部が出土した。残存する高さは約6cm、残存部での最大径は約13cm、底径は11cmで、約1/2が残存する。外面の整形はヘラケズリとみられる。底部に網代痕がある。

本址では整理箱1箱分の土器片が出た。型式判定のできる土器は、堀之内2式終末から加曾利B1式である。床面付近から覆土の上層にかけて、石神類型の土器と加曾利B1式の土器が混在し出土した。加曾利B1式では3単位把手付磨消繩文深鉢、平縁の深鉢、内面文が発達した浅鉢などがある。

時期 炉体土器と覆土出土の土器からみて、堀之内2式終末から加曾利B1式前半の間に構築された住居址と考えられる。

#### 第3号住居址（第19図）

遺構 X-15グリッドを中心とする。南東部は調査区域外にあり完掘できていない。また、調査区断面に沿って土手をつくる際の搅乱があり、存在したであろう敷石は抜き取られている。検出面は黒褐色土層から暗褐色土層である。

本址は縁石と2基の石組みを敷設した敷石住居址である。縁石と掘方の輪郭から平面形を円形と考えるならば、平面規模は直径約3.2mとなる。出入口部の敷石と対ビット（出入口部の柱穴）が判然としないため、主軸は特定できない。

残存する壁の高さは縁石から約10cmを測る。微妙な色調差での検出であり、縁石との間隔はもう少し広い可能性がある。

縁石は約1/2が残存していた。縁石に明瞭な被熱の痕跡はみられないが、西壁側では縁石の内側から焼土と炭化材が検出された。焼土は縁石レベルで、その上に炭化材がのっている。なお、炭化材に接して磨製石斧が1点出土した。南壁側では床面に厚さ5cmほどの焼土が検出された。

炉は右側埋立炉で完存とみられる。4枚の板状の櫛を「ロ」の字に組んでいる。炉体上器は胴部下半から底部で、正位に埋設される。底部に接して焼上が確認された。

炉の長軸線上には炉石に接する石組みがある。板状の磚を炉石の短辺（北辺）につけ、その周りを柱状の小砾で「ロ」の字に組む。石組みの南北約30cmには、ほぼ同じ規模と構造の石組みがある。炉との位置関係や形状からみて、2基の石組みは住居に伴う何らかの施設と考えられる。炉に接する石組み内の土は、床面となる掘方埋土に類似した土であるが、縮まりが弱いことで分層している。

本址に伴う柱穴の抽出は、無数の柱穴状の土坑があるため難しい。奥壁寄りで言えば第1464・1467号土坑などが考えられる。

住居址の覆土はC-C'に示したとおり分層された。4~6層は色調と含有物の違いで分層したが、いずれも掘方の埋土と考えている。したがって、床面は4層の上面である。掘方埋土の厚さは15~20cmである。なお、住居址はローム層を掘り込んでいない。

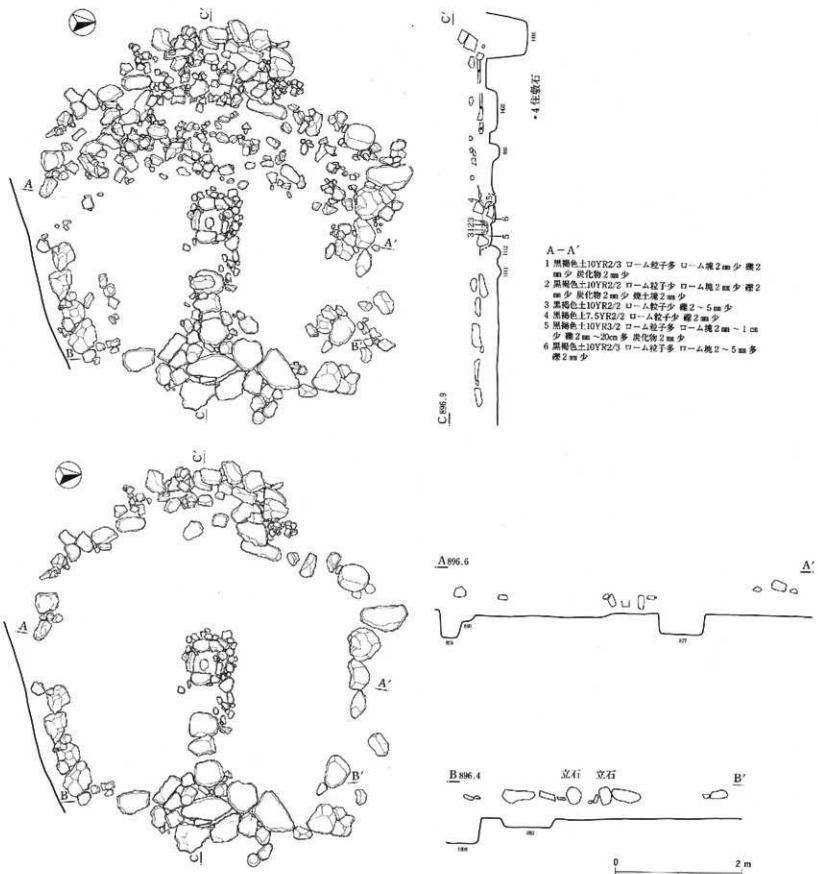
遺物 炉体土器は深鉢の胴部下半から底部である。胴部下半から底部に向かい外反する形状であることから朝顔形の深鉢と考えられる。残存する高さは約7cm、残存部での最大径は約13cm、底径は10cmで、約1/2が残存する。外面の整形はヨコナデである。内面には被熱によるあばた状の剥落痕が何ヵ所もみられる。底部に木葉痕がある。

覆土出土として取り上げた土器は50点ほどある。そのうちの約20点は器壁が僅く丁寧にミガキがなされた土器である。型式判定できた土器の主体は堀之内2式で、終末とみられる土器が6点ある。

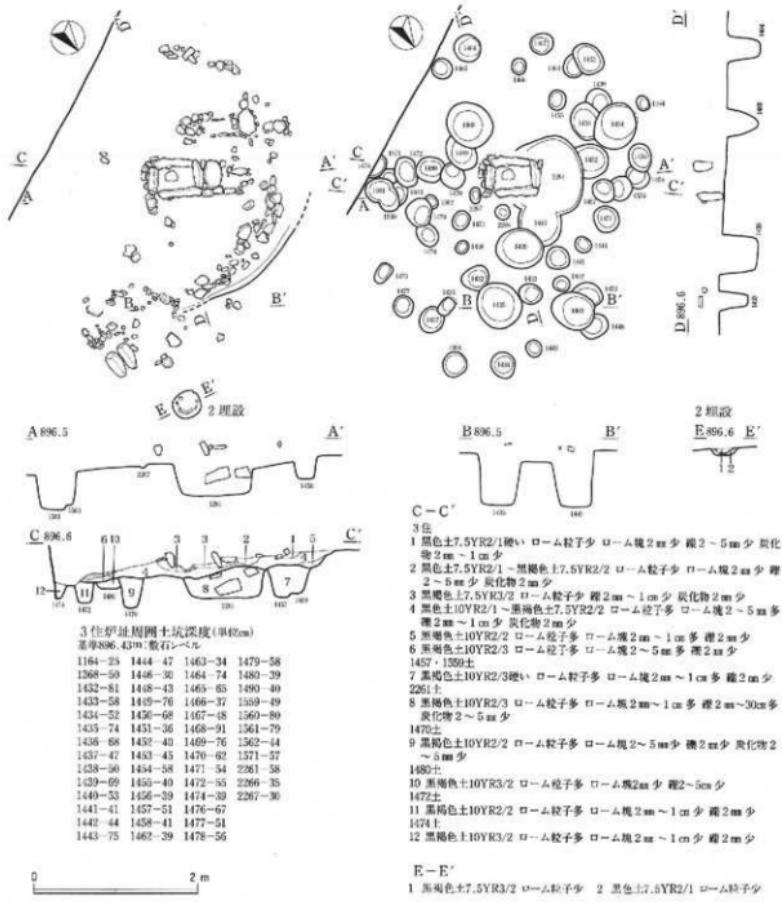
時期 炉体土器と覆土出土の土器からみて、堀之内2式の住居址と考えられる。

#### 第4号住居址（第20図）

遺構 ア・イ-16・17グリッドを中心とする。張出部（出入口部）は第2号住居址の奥壁と重複する。住居址内から墓坑とみられる土坑が幾つか検出されている。縁石や張出部の敷石と重なるものが多く、大半は



第18回 第2号住居址（1/60）



第19図 第3号住居址、第2号焼設土器 (1/60)

住居址より古い土坑と考えられる。

本址は部分的に繩が敷かれた柄鏡形の敷石住居址である。ローム層への掘り込みが深く、第2号住居址との重複部を除き壁(掘方)が検出された。平面形は梢円形で、主体部の主軸長は約4m、副軸長は約5mを測る。この主体部に主軸方向1m以上、副軸方向約2.5mの張出しがつく。柱穴と炉の数からみて、最低1回の建て替えがあったと考えられる。新住居址の主軸方向はN-74°-W、古住居址の主軸方向はN-78°-Wである。

残存する壁の高さは、主体部で縁石から40~60cm、張出部で約30cmを測る。主体部の壁には緩やかな角度

で床面に至るところと、段掘された部分がある。本址は建て替えに伴う床面と炉のつくり替えが想定されるため、段掘りされた部分は床面のつくり替えに伴う痕跡とも考えられる。断面形状に問わらず、外側ほど覆土（6層）が硬く締まり、ローム粒子・塊と炭化物の含有量が多い。この土は地山の崩落による自然堆積というより、人為的に埋め戻された土と考えられる。ここでは墳体に関わる上と考えておく。

主体部の敷石は柱穴の内側に沿って円形にめぐる綠石と、綠石と灰を結ぶように直線状に敷かれた敷石からなる。直線状の敷石は、炉を基点に主軸と副軸方向に敷かれていた可能性もある。張出部の敷石は2枚の大ぶりな板状の礫を主軸線上に敷き、その周りに卵大から拳大の礫を敷設する。

床面は炉の数と遺存状態からみて、つくり替えが想定される。新しい床面は古い床面を一段掘り下げ、そこに貼床してつくられたと考えられる。新しい床面は5層の上面と考える。

柱穴とみられる土坑は、綠石の周辺から多數検出された。対ビット以外の主柱穴は綠石に接するか、外側にあるものと考え、位置と規模を考慮して抽出した。主柱穴は新古とともに7基と考えられた。新住居址の上柱穴を対ビットの南から時計まわりに列挙すると、P 1：第1424号土坑、P 2：第1407号上坑、P 3：第1397号土坑または第1399号土坑、P 4：第1389号土坑、P 5：第1383号土坑、P 6：第1374号上坑、P 7：第1419号土坑である。同様に古い主柱穴は、P 1：第1416号土坑、P 2：第1410号土坑または第1411号上坑、P 3：第1397号土坑、P 4：第1389号土坑、P 5：第1385号土坑、P 6：第1377号土坑、P 7：第1420号上坑である。

炉は2基あり重複する。新しい炉は石圓壇甕炉で、墓坑と考えられる第2260号土坑内につくられる（炉A）。炉体土器は2個体あり、正位に埋設された完形の深鉢（炉A-1）内に、深鉢の底部（炉A-2）が正位で入れ子される。深鉢の胴部下半に接する土は厚さ10~15cmでレンズ状に焼けている。古い炉は深鉢の底部で、正位に埋設される（炉B）。残存状態からみて、新しい床面をつくる際に、壊されている可能性が高い。土器の周囲が良く焼けている。

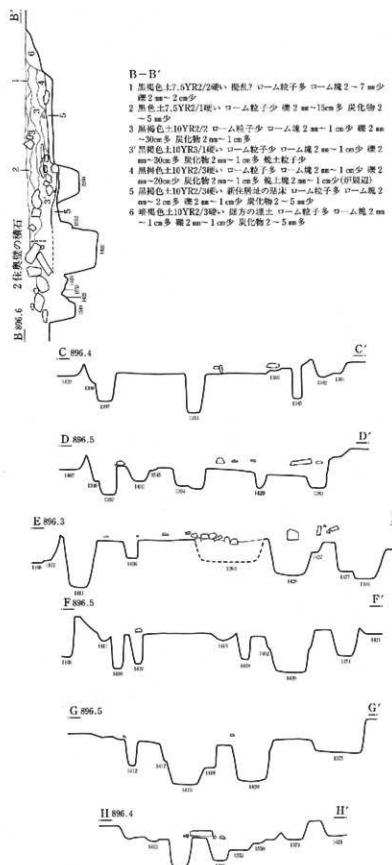
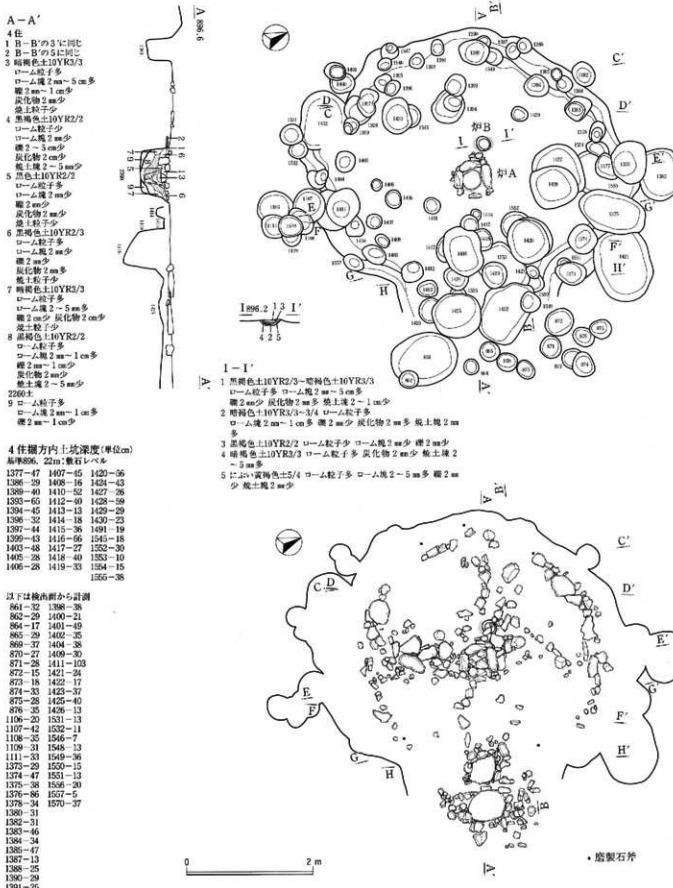
住居址の覆土はB-B'に示したとおり分層された。2層は自然堆積とみるが、3・3'層は卵大から30cmほどの礫を多量に含む黒褐色土で、礫を投げ込み埋め戻した層と考えられる。礫は住居範囲全域に分布するが、中心に近いほど大きさを増す傾向がある。

遺物 炉体土器A-1はほぼ完存の深鉢で、高さは30cm、口径は29cm、底径は13cmである。器形は底部から直線的に開き口縁部に至る。口縁部端が内折し、内面に浅い螺旋がめぐる。底部に網代痕？がある。炉体土器A-2は深鉢の胴部中位から底部である。残存する高さは約12cm、残存部での最大径は約24cm、底径は9.5cmである。胴部が僅かに張る深鉢である。外面の整形はヘラミガキされる。内面には被熱によるあばた状の剥落痕が何ヵ所もみられる。底部に網代痕がある。炉体土器Bは深鉢の底部である。残存する高さは約5cm、残存部での最大径は16cm、底径は16cmである。胴部下半から底部に向かい外反する形状で、朝顔形の深鉢と考えられる。外面の整形はヘラミガキされる。底部に網代痕がある。

礫とともに多量の土器が出士した。この中に器形が窺える土器が数点ある。胴部中位から底部が残存する小型の朝顔形深鉢はその一つである。残存する高さは約7cm、残存部での最大径は8cm、底径は5.5cmである。胴部中位より上に三角形または菱形の横位文様帶がある。型式判定できた土器の主体は壠之内2式で、石神類型の土器は出土していない。

綠石および綠石の存在が想定される線上と、綠石の外側から5点の磨製石斧が出土した。出土レベルは綠石とほぼ同じレベルである。

時期 炉体土器と覆土出土の土器からみて、壠之内2式の住居址と考えられる。



第20図 第4号住居址 (1/60)

#### 第5号住居址（第21図）

遺構 W-10・11、X-11・12グリッドを中心とする。本址の南側は調査区域外にあり、全体の約3/4が削壠された。南側は第18号住居址に壊され、北側の一部は第6号住居址と重複する。

本址は柱穴から内側に礫が敷かれた敷石住居址と考えられるが、第18号住居址による削平と築境に当たり敷石の多くは抜き取られている。

平面形は埠（掘方）と柱穴の配列からみて円形と考えられる。平面規模は東西7.1m、南北は7m以下と推測される。出入口部の敷石および対ビットが判然とせず、主軸方向は特定できない。

住居址はローム層を掘り込んでいる。残存する壁の高さは敷石上数～10cmを測る。

敷石は大きな板状の礫（平石）と小さな礫からなり、壁に近いほど礫が小さくなる傾向がある。敷石の上から焼土や炭化材は検出されていない。

敷石の敷設面は11層の上面と考えられる（D-D'）。その面は地形に沿い北から南へ緩傾斜する。

炉は第18号住居址により削平されている。

柱穴は壁から1m内側に密集している。柱穴には直径50～70cmほどで深さ70～110cmほどの大きなものと、直径30cm前後で深さ30～50cmほどの小さなものがある。大きなものは主柱穴（第1318号土坑・第1331号土坑ほか）、小さなものは支柱穴（第1287号土坑・第1329号土坑ほか）とみられ、主柱穴と支柱穴を交互に組み合わせていると考えられる。主柱穴の間隔は真円で90～130cmである。第1331号土坑と第1332号土坑の主柱穴、第1329号土坑と第1330号土坑の支柱穴は僅かに重複し、住居址の建て替えに伴う同心円状の拡張または縮小を示している。敷石との位置関係からは拡張と思われる。

住居址の覆土はD-D'に示したとおり分層された。敷石敷設面以下まで搅乱が及ぶことが確認できる。11層は掘方埋土と考える層で、厚さは10～15cmである。

遺物 器形が窓える上器の出土はない。型式判定できた土器の多くは、称名寺式から堀之内1式の後半である。器盤が薄く丁寧にミガキがなされるもの、朝顔形の深鉢とみられるものは数点である。

時期 出上した土器の最も新しい時期をとれば堀之内1式後半となるが、重複する第6号住居址の土器を本址の土器として取り上げている可能性もある。ここでは称名寺式から堀之内1式後半の間に構築された住居址としておく。

#### 第6号住居址（第21図）

遺構 Y-Z-11グリッドほかに位置する。住居址のほぼ中央と東側に直径約180cmの土坑が重複する。また、南側は第5号住居址、西側は第31号住居址、北側は第7号住居址と重複する。いずれも本址より古い遺構である。

本址は床全面に礫を敷いた敷石住居址とみられる。住居址の東側約2/3は水田造成により敷石敷設面以下まで削平される。幸うして数基の柱穴が残存し、その配列から住居プランの推測が可能である。平面形は円形で、平面規模は直径3.5mほどである。第1290号土坑を対ビットの右側（北側）と考え、炉と第1326号土坑を結ぶ線を主軸と想定している。その方向はN-85°-Eを示す。

住居址はローム層を掘り込んでいる。残存する壁の高さは敷石上5～10cmを測る。

敷石には平石（板状節理の安山岩）が多用され、隙間に小礫を詰めている。また、壁に平石を立てかけている。平石がこの状態で検出されたのは本址だけである。

柱穴とみられる土坑の多くは壁に接して検出された。本址の主柱穴と考えられるものを対ビットから時計まわりに列挙すると、P1：第1290号土坑、P2：第1292号土坑、P3：第1320号土坑または第1321号土坑、

P 4 : 第1327号土坑、P 5 : 第1326号土坑、P 6 : 第1325号土坑、P 7 : 第1323号土坑、P 8 : 第1507号土坑である。柱穴に規模の差はない。対ピットの左側（南側）は第1288号土坑に掘り込まれていたとみるが、検出できていない。また、主軸を挟み第1292号土坑と対になる柱穴が存在したと考えるが、搅乱により削平されたとみられる。

炉は第1322号土坑内につくられる。検出状態は埋甕炉であるが、右囲されていた可能性がある。炉体土器は口縁部を欠損した深鉢で、正位に埋設される。

住居址の覆土はD-D'に示したとおり分層された。掘方埴土は固化されていないが、数cmの掘方埴土が確認されている。

遺物 炉体土器は胴部上半から底部である。残存する高さは15cm、残存部での最大径は16cm、底径は8cmである。器形は頸部のくびれが弱く、胴部の張りも弱い深鉢と考えられる。文様は下端が開放し、数条の沈線で描かれる。残存部に縄文はない。底部に網代痕がある。

覆土出土の土器片は少量である。型式判定できた土器は堀之内1式の後半が多く、堀之内2式とみられるものは1点である。

時期 炉体土器からみて、堀之内1式後半の住居址と考えられる。

#### 第7号住居址（第22図）

遺構 ア・イー-10・11グリッドに位置する。住居址の東側約1/4は水田造成により削平されている。南側は第6号住居址と第31号住居址が重複する。

本址では新・古2基の炉が検出された。周溝が部分的に2条めぐり、柱穴もつくり替えられている。そのことから住居の規模を変える建て替えがあったと考えられる。平面形は出入口部が張り出す隅丸五角形である。主軸長は4.7m、副軸長は5mと推測される。主軸方向はN-4°-Eを示す。

住居址はローム層を掘り込んでいる。残存する壁の高さは25cm前後である。

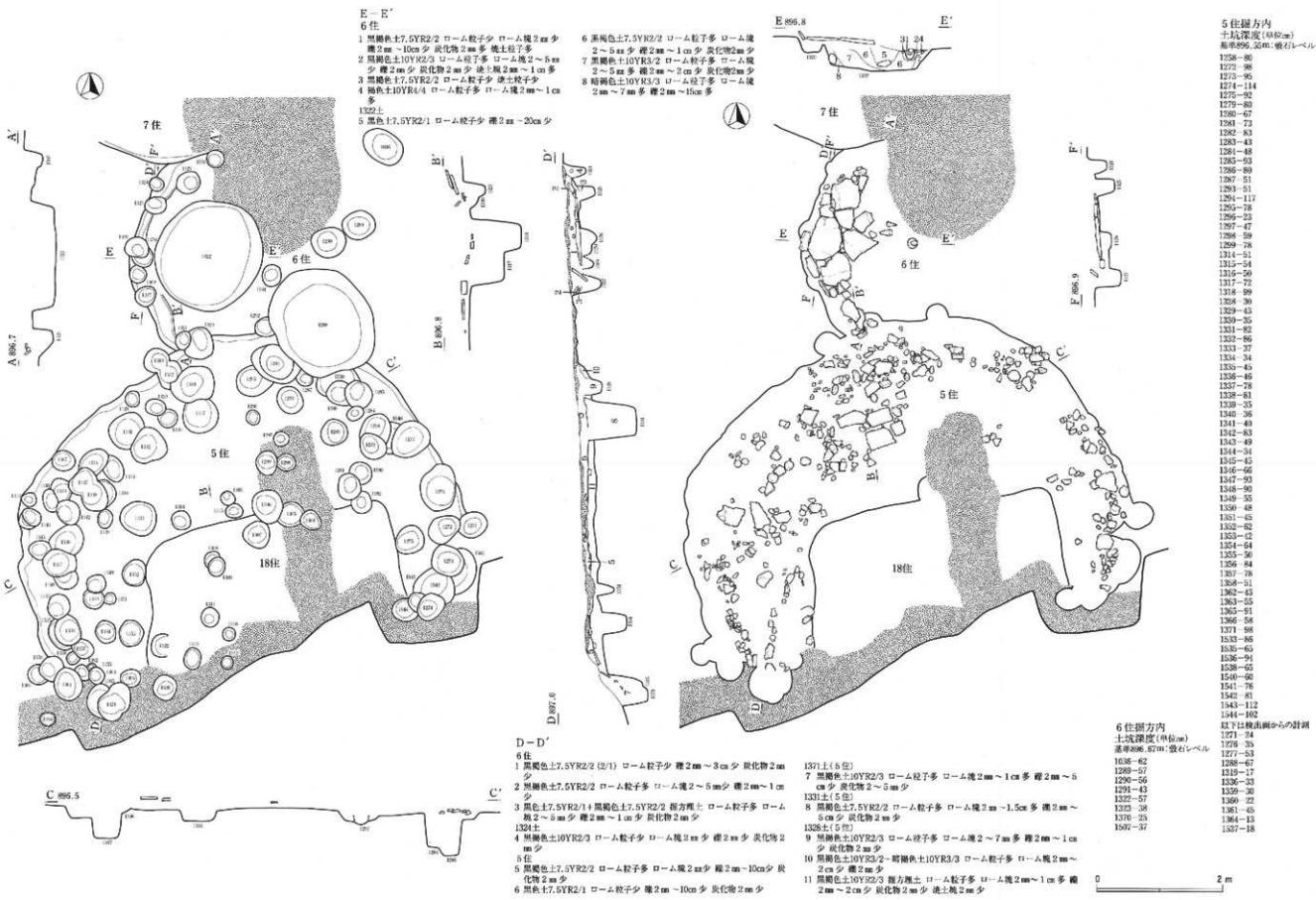
壁下には小穴を伴う周溝がめぐる。東壁では一部2条の周溝が確認され、内側が貼床されていた。

床面の西側は礫を含まないローム層であるが、東側は礫を多量に含んでいる。特に新しい炉の東側から出入口部にかけて顯著であり、検出された床面は本来の床面より低い可能性が高い。硬化した面は確認されていない。

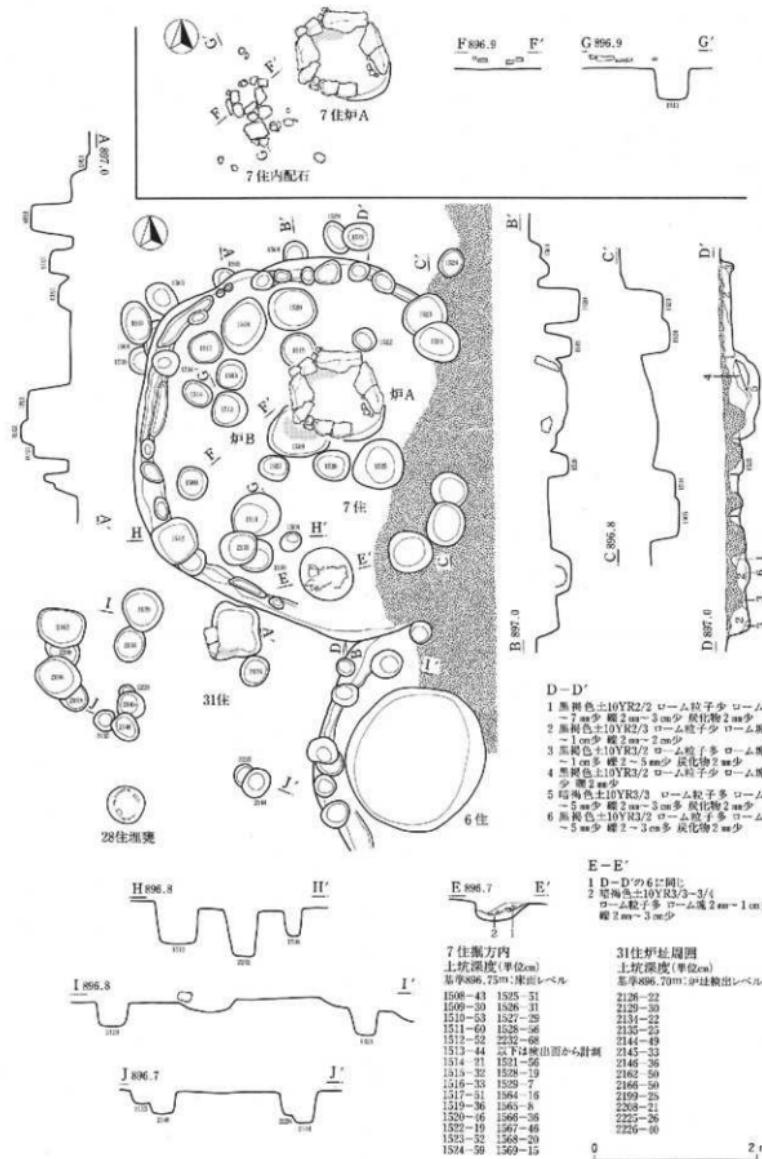
住居址内から20基あまりの柱穴状の土坑が検出された。位置からみて主柱穴は4基か5基と考えられる。先に記したとおり、本址は規模を変える建て替えが考えられるため、主柱穴には新と古が存在すると考える。新しい主柱穴を横位の深鉢の西から時計まわりに列挙すると、P 1 : 第1511号土坑または第2232号土坑、P 2 : 第1518号土坑、P 3 ? : 第1520号土坑、P 4 : 第1523号土坑、P 5 : 第1504号土坑または第1505号土坑である。古い主柱穴は、P 1 : 第1510号土坑、P 2 : 第1513号土坑または第1517号土坑、P 3 : 第1519号土坑、P 4 : 第1524号土坑、P 5 : 第1506号土坑である。

炉は2基あり重複する。古い炉は新しい炉に貼床されていた。新しい炉は石窯炉で、古い炉の北東にある（炉A）。完存状態で検出されるはずであったが、重機による表土剥ぎ作業時に南東コーナーの炉石を引っかけ抜いている。焼土は北西コーナーに僅か残存する。厚さは数cmである。古い炉も石窯炉と考えられる（炉B）。炉石は抜かれているが、焼土の残りは新しい炉より良い。厚さは約5cmである。

出入口部から横位の深鉢が一括出土した。土器を半截した結果、土器よりも回り大きな掘方を伴い、埋められていることが明らかとなった。出入口部に土器が横位に埋められる例は、当市において初見と思われる。復元された状態は、口縁部の約3/4と胴部の約1/2が残存し、底部が欠損する。口縁部の残存率からみる



第21図 第5・6号住居址 (1/60)



第22図 第7・31号住居址 (1/60)

と、埋設時には口縁部と胸部が全周していたと思われる。本址の東側に床面を乱す擾乱が入ることからも、欠損の原因は擾乱による可能性が高い。ただし、底部は割れ方からみて抜かれたものと考えられる。口縁部と胸部が全周していたならば、検出された床面上に一部露出することとなる。

炉の西側から、櫛を「コ」の字形に組んだ配石が検出された。配石の接地面は床面上7、8cmである。床面より高い位置にあるため本址より新しい住居址（敷石住居址）の炉とも考えたが、炉石に被熱痕はなく焼土も検出されなかった。周辺の状況からみても別住居址の炉とは考えにくく、本址に伴う配石であると考えたい。配されたタイミングが問題となるが、配石下にある黒褐色土を貼床と考えれば、住居との同時存在が成立立つ。そして横位の深鉢も床面より上には露出することはないと思われる。ここでは黒褐色土の貼床があったと推測する。

住居址の覆土はD-D'に示したとおり分層された。断面において、先に推測した黒褐色土上の貼床層は確認できていない。

遺物 横位で出土した深鉢はX字状把手付深鉢である。残存する高さは約40cm、口径は約36cmである。地文は繩文である。胸部文様は半截竹管による平行沈線と蛇行隆帯で縦位に区画される。

覆土出土の土器片は曾利II式が主体で、井戸尻III式から曾利I式の土器片が混在する。

時期 横位で出土した土器からみて、曾利II式の住居址と考えられる。

#### 第8号住居址（第23図）

遺構 ケー30グリッドを中心とする。東側は第13号住居址と重複する。調査区の東側に位置し、黑色土層の残りが良い地点に構築されている。

本址は炉が検出され所在が判明した住居址である。壁・床・周溝などは検出されていないが、炉の周間にある土坑の中から主柱穴と考えられるものを抽出した。これが妥当であるならば、平面形は円形で、平面規模は4.5m前後となる。また出入口部を第298号土坑と第310号土坑の間とみると、主軸方向はN-31°-Wを示す。

主柱穴は6基とみられる。出入口部の南西にある土坑から時計回りに列挙すると、P1：第297号土坑、P2：第301・302・303号土坑、P3：第122・123・183号土坑、P4：第101・102号土坑、P5：第71・72・81号土坑、P6：第310号土坑である。柱穴によっては数回の建て替えが想定される。

炉は段掘りされ、低い面が焼けている。礎は出土していないが、掘方の形状と焼土の位置からみて、石圓炉であったと考えられる。焼土の厚さは3、4cmである。

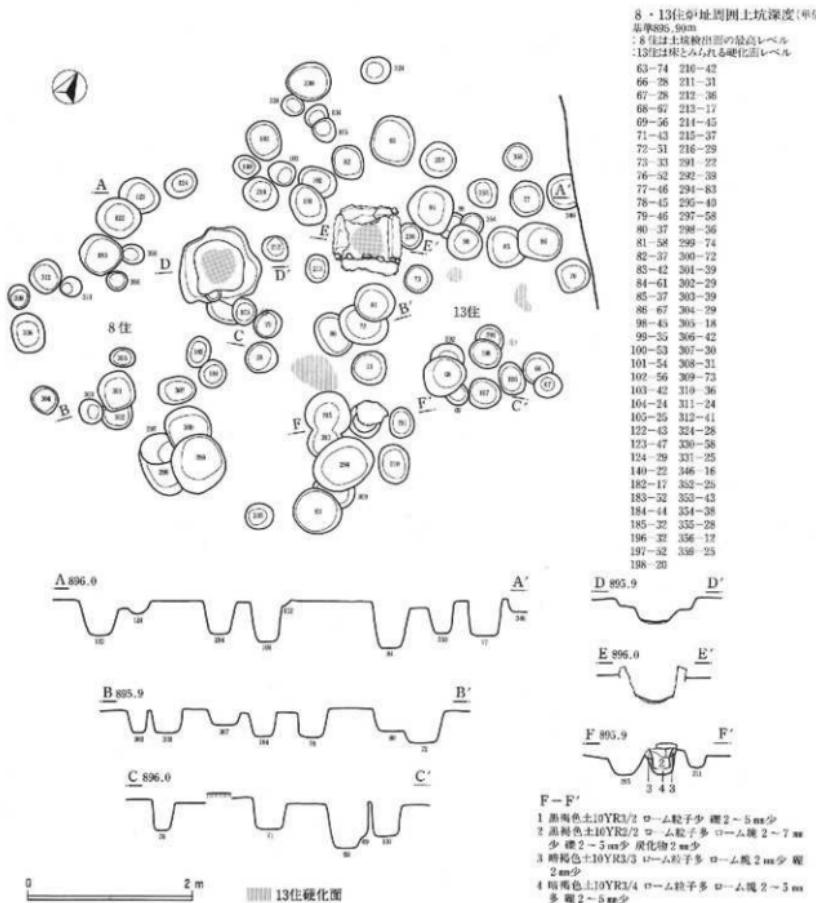
遺物 遺物の出土量は極めて少ない。第13号住居址や多くの土坑が重複するためと思われる。型式判定できた土器は、曾利II式から壠之内式である。該当するグリッドで他の遺構と重複しない地点から、曾利II式からIII式とみられる口縁部が出土した。範目文土器と呼ばれるもので半截竹管による平行沈線を斜位に施している。

時期 想定される住居址形態と覆土出土の上器からみて、曾利II式からIII式の住居址と推測される。

#### 第9号住居址（第24図）

遺構 ソー23グリッドを中心とする。東側は第17号住居址と重複する。

本址は炉が検出され所在が判明した住居址である。床面付近まで水田造成による削平が及び、壁・床・周溝は検出できていない。炉の周間に密集する土坑の中から、主柱穴と考えられるものを抽出した。これが妥当であるならば、平面形は円形で、平面規模は4.5m前後となる。また出入口部を第235号土坑と第260号土坑の間とみると、主軸方向はN-32°-Wを示す。

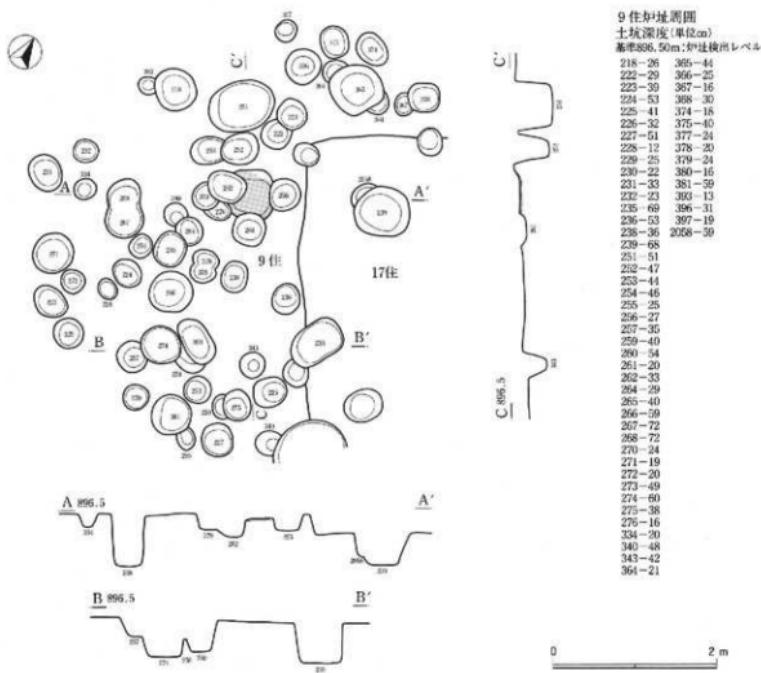


第23図 第8・13号住居址 (1/60)

主柱穴は5基とみられる。出入口部の南西にある土坑から時計まわりに列挙すると、P 1：第260号土坑、P 2：第267・268号土坑、P 3：第251号土坑、P 4：第239・2058号土坑、P 5：第235号土坑である。P 1・P 3・P 4の平面形は梢円形で、長軸が住居の壁には平行するものと思われる。この点から、2基の柱穴の重複としたP 2とP 4は、1基の柱穴とするのが妥当かもしれない。

炉は複数の土坑に切られた状態で検出された。炉内に礫は遺存しない。炉底は数cmの厚さで焼けている。

遺物 覆土がほとんど残存せず、出土した遺物は少量である。該当グリッドから中期後半曾利I式から後



第24図 第9号住居址 (1/60)

期初頭の土器片が出土している。

時期 想定される住居址形態と出土した土器からみて、曾利 I 式以降の中期後半の住居址と推測される。

### 第10号住居址（第25図）

遺構 シー-31グリッドほかに位置する。住居址の大半は調査区域外にある。調査区の東側に位置し、黒色土層の残りが良い地点に構築されている。

検出された壁の輪郭からみて、平面形は円形と考えられる。平面規模は直径4.5m前後と推測される。

住居址はローム層を掘り込んでいる。残存する壁の高さは20cm前後である。壁下に幅広で深さのある周溝がめぐる。床面には地山裸が露出する。

検出された主柱穴は2基である。南から時計まわりに、P1：第4号土坑、P2：第3号土坑である。P1とP2の間隔と住居址の平面規模からみて、主柱穴は4基か5基と考えられる。

**遺物** 本址では器形が窺える土器の出土はなく、少量の土器片が覆土から得られたに過ぎない。型式判定できた土器の多くは曾利Ⅱ式である。半截竹管による平行沈線を斜位に施した口縁部（龍目文土器）、地文が繩文で粘土紐を貼付した胴部、地文をヘラ状工具による沈線とし蛇行降帶を縱位に貼付した胴部の破片などが出土している。

覆土の上層から頭部と頸部が残存する土偶が出土した。出土レベルは床面上約20cmである。頭部から頸部までの長さは約9cm、頭部の最大幅は約7cm、頭部の最大厚さは約6cmである。目はつり上がり、口は三角形の刻文で表現される。後頭部に約1.5cmの穴があり、その周囲を三角形と爪形の押引きがめぐる。穴を挟み側頭部には三角形の刻文があり、周囲を爪形の押引きがめぐる。頸部の断面形は板状である。正面は三角形と爪形の押引きが施文され、背面は三角形の押引きのみが施文される。頸部の割れ口は平滑で、研磨されたとみられる。中期中葉新道式の土偶と考えられる。

時期 覆土出土の土器からみて、曾利Ⅱ式の住居址と考えられる。

#### 第11号住居址（第25図）

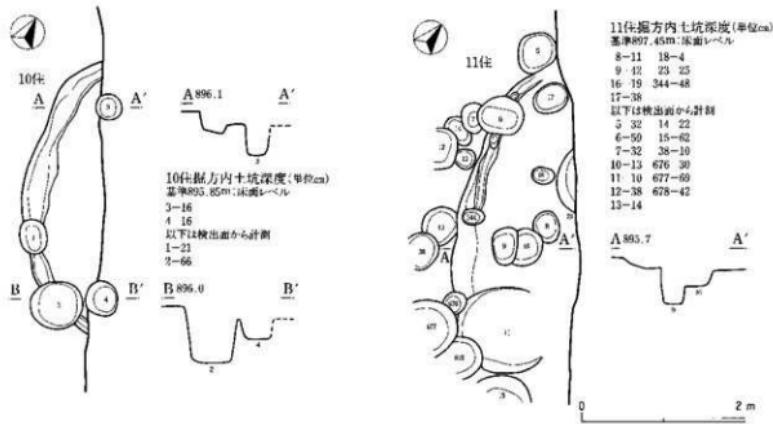
構造 クー-33グリッドほかに位置する。住居址の約3/4は調査区域外にある。調査区の東側に位置し、黒色土層の残りが良い地点に構築されている。南側は第12号住居址と僅かに重複する可能性がある。

検出された壁の輪郭からみて、平面形は円形・隅丸方形・隅丸五角形のどれかと考えられる。平面規模は一辺5m前後と推測される。

住居址はローム層を掘り込んでいる。壁の南側は土坑の重複により残存していない。残存する壁の高さは25cm前後を測る。壁下には部分的に周溝がめぐる。床面に地山跡は露出していないが、起伏がある。硬い面は確認されていない。

検出された主柱穴は2基である。南から時計まわりに、P1：第9号土坑、P2：第17号土坑である。P1とP2の間隔と住居址の平面規模からみて、主柱穴は6基以上とみられる。

遺物 器形が窺える土器は2個体ある。1つは深鉢の口縁部から胴部下半で約1/4が残存する。残存する高さは22cm、口径は約26cmである。地文は条線文である。口縁部文様は横位の低隆帯1条で表現され、胴部は縱位の低隆帯2条で区画される。区画内に縱位の蛇行沈線が施文される。もう1つは胴部下半から底部が残存する深鉢である。残存する高さは9cm、残存部での最大径は約11cm、底径は6cmである。刻みがある隆帯で縱位に5分割し、区画内に沈線2条で渦巻き状の文様が施文される。



第25図 第10・11号住居址 (1/60)

土器片の中には、地文が条線文で、低隆帯の横S字状渦巻文がある深鉢の胴部破片がある。

時期 出土した土器からみて、曾利IV式の住居址と考えられる。

### 第12号住居址（第26図）

遺構 カー34・35グリッドはほかに位置する。住居址の約3/4は調査区域外にある。調査区の東隅に位置し、黒色土の残りが良い地点に構築されている。北側は第11号住居址と僅かに重複する可能性がある。第5・6号焼上址は本址の上層から検出された。

検出された壁の輪郭からみて、平面形は隅丸五角形と考えられる。炉の南方が出入り口部と考えられるため、主軸方向はN-10°-Wとみる。主軸長は5m前後、副軸長は6m前後と推測される。

ローム漸移層で検出し掘り下げたこと、住居址はローム層を掘り込んでいることから、高さのある壁が検出された。残存する壁の高さは25~40cmである。

周溝は奥壁下で部分的に検出され、小土坑を伴っている。西壁に接する小土坑も周溝の一部と考えられる。床面には大小の地山礫が露出している。畠から西壁にかけて硬い面が確認された。

検出された土坑の中で主柱穴と考えられるものは2基ある。炉の西から時計回りに、P1：第28号土坑、P2：第24号土坑である。P1とP2の間隔と炉の位置などからみて、主柱穴は最低6基と考えられる。

炉は石囲炉で奥壁の炉石が抜き取られている。床面から炉底までの深さは約40cmである。炉底は約5cmの厚さで焼けている。

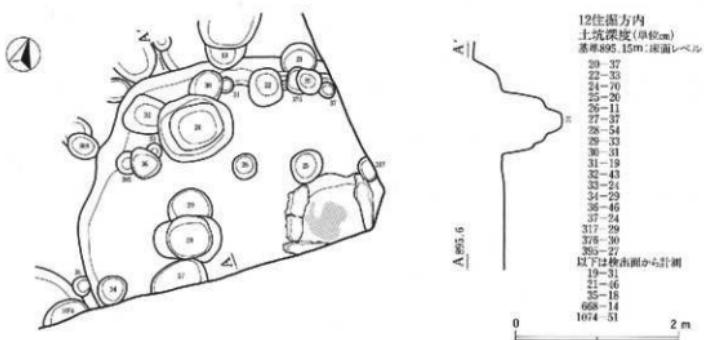
遺物 覆土出土の土器は曾利IV式からV式である。下層からIV式、上層からV式が出土した。IV式の土器は地文が条線文で、口縁部文様は幅広の浅い沈線をめぐらし、縦位に蛇形沈線を施文するものが多い。V式の土器は胸部を縦位に沈線2条で区画し、「ハ」の字文を施文する。「ハ」の字文は太く、整然と施文されている。

覆土から石質不明の垂飾が出土した。約1/2が残存するものとみられる。残存する最大長は2.4cm、最大厚は0.5cmで、0.6cmほどの穴が確認できる。

時期 磁土出土の土器からみて、曾利IV式の住居址と考えられる。

### 第13号住居址（第23図）

遺構 コー30・31グリッドを中心とする。西側は第8号住居址と重複する。調査区の東側に位置し、黒色



第26図 第12号住居址 (1/60)

上の残りが良い地点に構築される。

本址は炉・埋甕・床の一部が検出され所在が判明した住居址である。黒(暗)褐色土層から掘り下げ始めたにも関わらず、壁は検出されなかった。床面はローム漸移層の下位にあり、部分的に光沢のある硬い面が確認された。その範囲に炉と埋甕の位置を重ね、密集する土坑の中から主柱穴とみられるものを抽出した。平面形は隅丸方形か隅丸五角形で、平面規模は主軸長・副軸長とも5m前後と考える。主軸方向はN-24°-Wを示す。

主柱穴は対ビットを入れ7基と考えられる。埋甕の南から時計まわりに列挙すると、P1：第215号土坑、P2：第78・79・103号土坑、P3：第100・214号土坑、P4：第83号土坑、P5：第77・353号土坑、P6：第68・69・197号土坑、P7：第211号土坑である。以上が妥当ならば、出入口部の対ビットとP4以外は、柱の建て替えが地点を変えて行われたことを示している。

炉は石圓炉で完存とみる。炉石には板状の縁を用いるが、出入口部側の炉石は他辺より厚みがあり、小口の平坦面を床面にあわせて据えている。炉底が約5cmの厚さで焼けている。

埋甕は花崗岩の蓋石を伴う。土器は胸部下半を欠く深鉢で、正位に埋設されている。

遺物 埋甕は口縁部から胴部中位である。残存する高さは27cm、口径は30cmである。地文は条線文である。口縁部文様は横位の低隆帯1条で表現され、胴部は低隆帯1条で横S字状の渦巻文が施文される。胴部に穿孔はない。

住居址の覆土から埋甕と同タイプの大形土器片が出土したが、復元には至っていない。

時期 埋甕の時期からみて、晩利IV式の住居址と考えられる。

#### 第19号住居址（第27図）

遺構 クー14グリッドを中心とする。北側は第26号住居址と重複する。住居址の大半は水田造成によりローム層まで削平されている。

本址は炉が検出され所在が判明した住居址である。壁・床・周溝は削平されたとみられ、平面形・規模・主軸方向など住居のプランは不明である。炉の周囲に柱穴状の土坑がめぐるが、組み合わせることはできていない。炉は辛うじて炉底が残存する。数cmの厚さで焼けている。

遺物 遺物は出土していない。

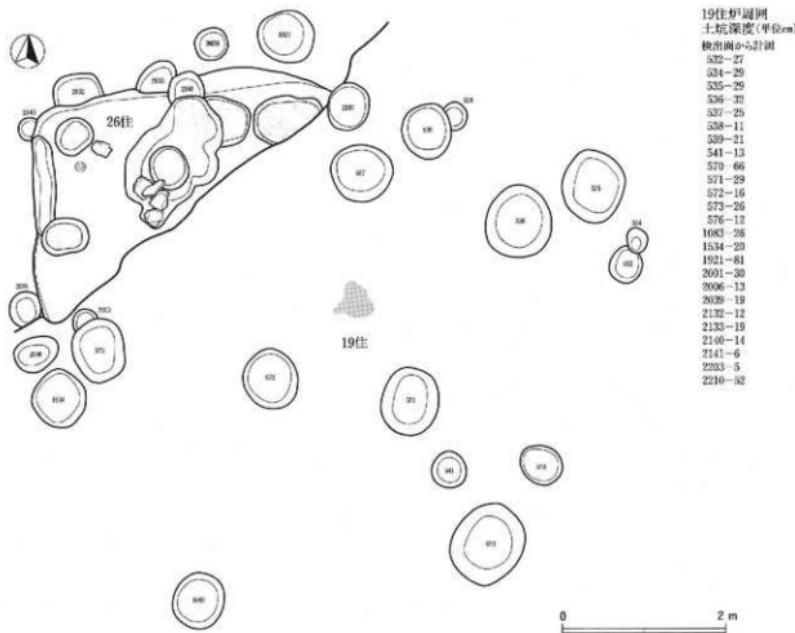
時期 縄文時代の住居址と考えられるが、時期は不明である。

#### 第20号住居址（第28図）

遺構 サー22グリッドを中心とする。

本址は想定される住居址の構築時期と、炉と柱穴の検出面が暗褐色上層であることからみて、竪穴構造の敷石住居址と考えられる。しかし、造成による削平を受けた上に、地山縁を多く含む面での遺構検出であり、壁（掘方）はもとより敷石や床面は検出できていない。敷石の可能性がある縁は、対ビットの両脇に遺存する数枚の板状の縁である。

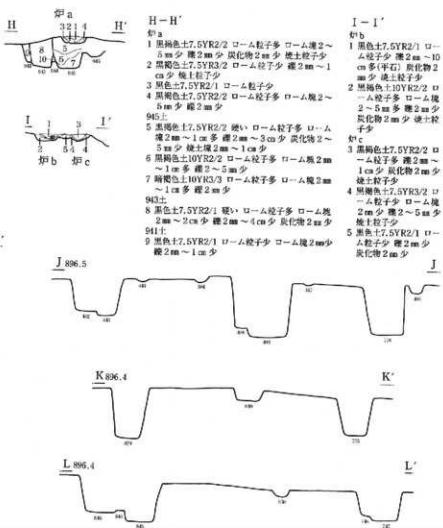
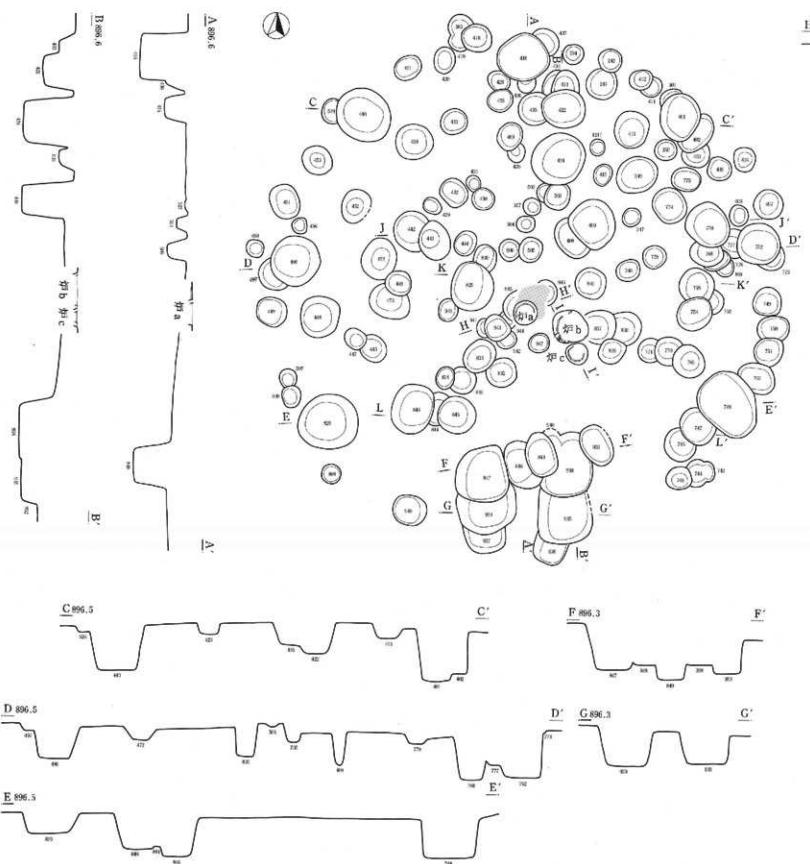
本址を住居址とした根拠は、炉を中心に対ビット・支柱穴・支柱穴と考えられる土坑がめぐるためである。炉体土器の数、対ビットとみられる土坑の組み数、支柱穴の位置などからみて、最低2回の規模を変える建て替えがあったと考えられる。対ビットの数だけで言えば、4回建て替えられた可能性もある。ここでは建て替え回数を2回とし、便宜的に大型・中型・小型住居址として記す。平面形は円形である。平面規模は支柱穴の外側での計測で、大型住居址は主軸長8.6m、副軸長8m、中型住居址は直径約5.5m、小型住居址は直径約4.5mである。各住居址の主軸方向は、東西の動きはあるものの概ね北を向いている。



第27図 第19号住居址 (1/60)

本址の柱穴と考えられるものは50基以上に及ぶ。主柱穴は大型住居址が9基、中型と小型住居址が7基である。大型住居址の対ビットは3組あったと考えられる。東からP1：第938号土坑、P2：第847号土坑、P1'：第935号土坑、P2'：第939号土坑、P1''：第936号土坑、P2''：第937号土坑である。主柱穴と考える土坑を対ビットから時計まわりに列举すると、P3：第826号土坑、P4：第496号土坑、P5：第440号土坑、P6：第416号土坑、P7：第401号土坑または第402号土坑、P8：第752号土坑、P9：第748号土坑である。主柱穴間に数基の支柱穴を伴う。中型住居址と小型住居址の対ビットは組み合わせが難しい。P1：第950号土坑、P2：第940号土坑、P1'：第950号土坑、P2'：第849号土坑、P1''：第940号土坑、P2''：第848号土坑のいいずれかの組み合わせとなろう。対ビットと同様に、中型と小型住居址の主柱穴は同規模のものが同一地点で重複するため抽出が難しい。中型住居址はP3：第844号土坑または第846号土坑、P4：第442号土坑または第443号土坑、P5：第424号土坑、P6：第768号土坑または第778号土坑、P7：第747号土坑または第748号土坑である。小型住居址はP3：第844号土坑または第845号土坑、P4：第829号土坑、P5：第408号土坑または第409号土坑、P6：第754号土坑または第755号土坑、P7：第746号土坑または第747号土坑と考えている。

炉は3基検出された。検出状態はすべて埋戸炉であるが、炉石を伴っていた可能性がある。炉の位置と柱穴配列からみて、大型住居址は炉a、中型・小型住居址は炉bまたは炉cと考えられる。炉に切り合いはない。



20-2号井地図上坑深度(単位cm)基準896.52m; 剥起面出露レベル

234-27	437-47	567-37	831-66
242-48	433-47	568-48	834-88
243-41	434-45	524-29	835-38
244-39	435-44	524-29	836-44
347-31	436-45	744-63	837-36
348-44	437-43	745-77	839-63
349-45	438-44	746-77	840-95
350-57	439-45	747-64	841-75
383-35	440-97	748-190	841-91
402-90	441-73	750-62	847-101
403-37	444-43	751-69	848-93
404-36	445-42	752-77	849-114
405-66	446-53	753-48	853-91
406-37	447-52	751-93	856-72
407-36	448-51	752-54	857-64
408-32	449-53	767-64	858-93
409-17	450-72	768-97	858-95
410-35	451-53	769-83	860-93
412-38	452-45	770-54	941-42
413-35	453-69	771-44	942-31
414-35	454-69	772-44	942-30
416-85	455-55	775-12	941-41
416-46	456-79	775-42	945-51
420-28	473-89	777-73	947-35
421-42	496-102	778-163	948-52
422-30	500-72	779-53	949-35
423-30	501-59	861-65	950-107
424-89	502-27	868-63	1217-34
425-23	504-38	879-98	
436-30	505-46	839-63	
431-28	506-23	832-53	

0 2 m

第28回 第20号井地図 (1/60)

く、貼床の有無も確認できていないため、新旧関係は不明である。炉aと炉bは深鉢の胴部破片を埋設している。炉cは深鉢の胴部下半から底部を正位に埋設する。

遺物 炉体土器は3個体ある。炉aの土器は胴部の張りが強い深鉢で、胴部中位から下半約1/3が残存する。残存する高さは約13cmで、胴部の最大径は30cm以上と推測される。地文は縄文で、幅広で深めの沈線数条で文様を描く。文様下端は開放せずに、横位に連結する。炉bの土器は胴部の張りが弱い深鉢で、最大径は40cm以上と推測される。胴部中位から下半にかけて約1/4が残存する。文様は幅の狭い沈線数状で描き、下端開放の懸垂文である。縄文が充填されている。炉cの土器は深鉢の胴部下半から底部である。形状からみて、朝顔形の深鉢ではないと思われる。残存する高さは10cm、残存部での最大径は20cm、底径は10.5cmである。外面の整形はヘラケズリの後、ナデとみられる。底部に網代痕がある。

時期 炉体土器からみて、堀之内1式後半の住居址と考えられる。

#### 第21号住居址（第29図）

遺構 X-17グリッドほかに位置する。黒色土層の残りが良い地点に構築される。住居址の大半は調査区城外にあり、東側に搅乱が入る。調査区城外で第22号住居址と重複している可能性がある。

住居址はローム層を掘り込んでいる。残存する壁の高さは約15cmを測る。周溝・柱穴などは検出されていない。

覆土は黒褐色土である。

遺物 遺物の出土はない。

時期 壁の輪郭と覆土からみて、縄文時代の住居址と考えられる。時期は不明である。

#### 第22号住居址（第29図）

遺構 Y-19グリッドほかに位置する。黒色土層の残りが良い地点に構築される。住居址の大半は調査区城外にある。墓坑とみられる土坑と重複している。

住居址はローム層を掘り込んでいる。残存する壁の高さは約20cmを測る。壁下には断続する周溝がみられる。柱穴は検出されていない。

覆土は黒褐色土から暗褐色土である。

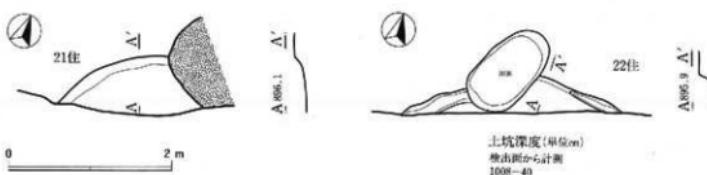
遺物 無文土器が3点出土した。

時期 壁の輪郭と覆土からみて、縄文時代の住居址と考えられる。時期は不明である。

#### 第23号住居址（第30図）

遺構 キー-17グリッドを中心とする。南側は第1号住居址と僅かに重複すると思われる。奥壁側には柱穴状の土坑が密集し、出入入口部側には墓坑とみられる大ぶりな土坑が多重複する。

本址は想定される住居址の構築時期と、炉と柱穴の検出面がローム漸移層であることからみて、竪穴構造



第29図 第21・22号住居址 (1/60)

の敷石住居址と考えられる。しかし、存在したであろう焼（掘方）と敷石は水田造成により取り除かれていた。

住居址とした根拠は第20号住居址と同様である。炉体土器の数、対ピットとみられる土坑の組み数、主柱穴とみられる土坑の位置と数からみて、2回以上の建て替えが考えられる。規模を変える建て替えとみられるが、住居址と考えられる範囲には70基を超す土坑があり、主柱穴の抽出は極めて難しい。便宜的に大型住居址・小型住居址として、推測される柱穴からおおよその平面規模を計測すると、大型住居址は主軸長約5.5m、副軸長約7m、小型住居址は主軸長約4m、副軸長約5mとなる。主軸方向は大型・小型住居址ともN-50°-WからN-60°-Wの範囲におさまる。

主柱穴は大型住居址が9基、小壇住居址が7基と思われる。先に記したとおり主柱穴の抽出は難しく、出土した遺物から柱穴との判断に迷う土坑もある。大型住居址の対ピットはP1：第1200号土坑、P2：第1227号土坑と考えているが、P1から硬玉製の垂飾が1点出土した。平面形が橢円形であるため墓坑と考えることも可能であり、P2も墓坑と言える形状を示す。しかも、土坑の長軸は墓坑と判断される他の土坑と同様に、遺構の希薄な空間の中心方向を向く。小型住居址の対ピットと判断されるP1：第1199号土坑、P2：第1122号土坑に、2基の墓坑が長軸方向と間隔を揃えて偶然に重複したとも考えられる。しかし、垂飾が出土しなければ他の状況からみて躊躇なく対ピットとしたであろう点から、墓坑の可能性を残しつつ、ここでは対ピットとして扱いたい。大型住居址の主柱穴を対ピットの西から時計回りに列挙すると、P3：第617号土坑と重複する土坑、P4：第569号土坑と重複する土坑、P5：第551号土坑と近接する土坑、P6：第555号土坑と重複する土坑、P7：第736号土坑と重複する土坑、P8：第562号土坑、P9：第968号土坑と重複する土坑などである。小壇住居址の主柱穴は、P3：第619号土坑と重複または近接する土坑、P4：第542号土坑と重複または近接する土坑、P5：第548号土坑と重複する土坑、P6：第734号土坑と近接する土坑、P7：第962号土坑と重複または近接する土坑などである。

炉は埋甕炉で3個体の土器が検出された。西から炉a、炉b、炉cとする。検出状態はすべて埋甕炉であるが、炉石を伴っていた可能性がある。炉は同一地点でつくり替えられたとみられ、土器の残存状態からみて東から西へのつくり替えとみられる。ただし炉aと炉bは隙間なく接するため、2個体同時に使われていた可能性を示唆する。3個体とも深鉢の底部を正位に埋設している。

遺物 炉aは深鉢の胴部下半から底部である。残存する高さは6cm、残存部での最大径は12cm、底径は10.5cmである。外面の整形はハラミガキである。底部に網代痕がある。炉bは深鉢の胴部中位から底部である。残存する高さは約10cm、残存部での最大径は17cm、底径は8cmである。胴部最大径に横位の低い隆帯がめぐる。最大径からの立ち上がりからみて深鉢と思われるが、類例を聞かない。炉cは深鉢の胴部下半から底部で約1/4が残存する。残存する高さは4cm、底径は約8cmである。底部に網代痕がある。

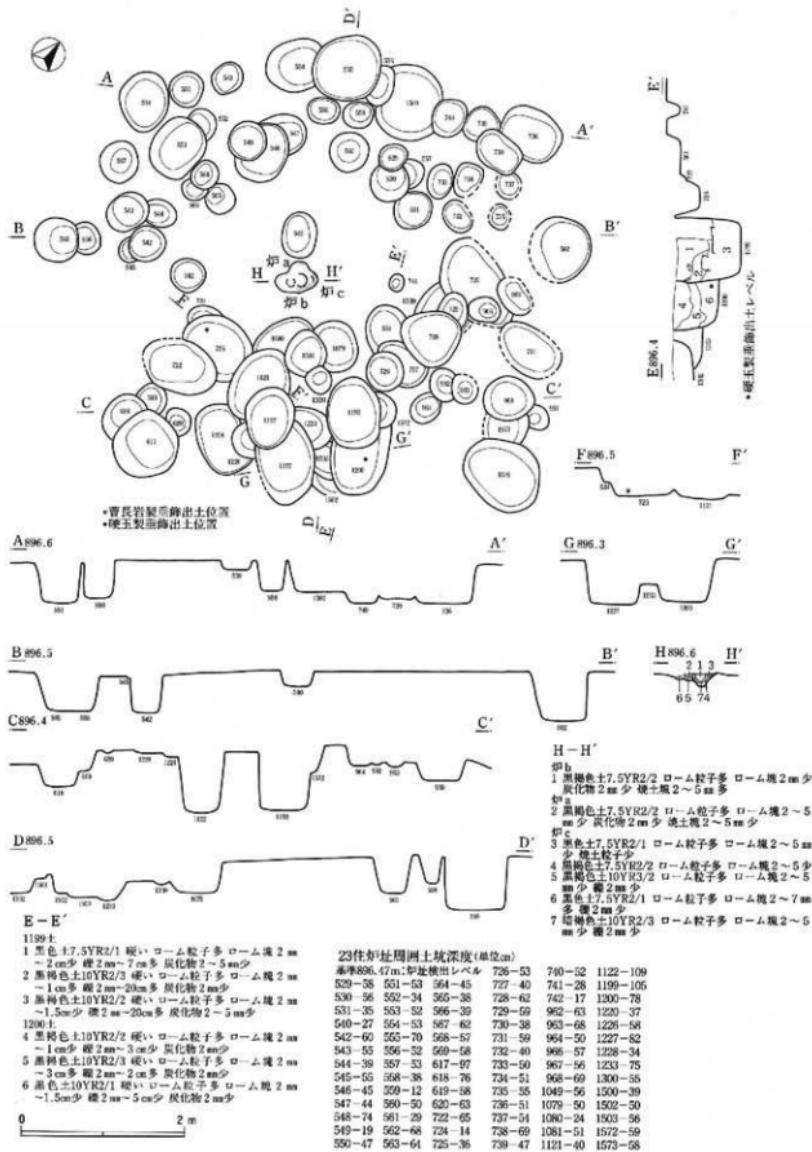
住居址該当グリッドから、刻み隆帯と8の字貼付文がある朝顔形深鉢の口縁部が2点出土している。

時期 堀之内1式後半から2式前半の間に構築された住居址と考えられる。

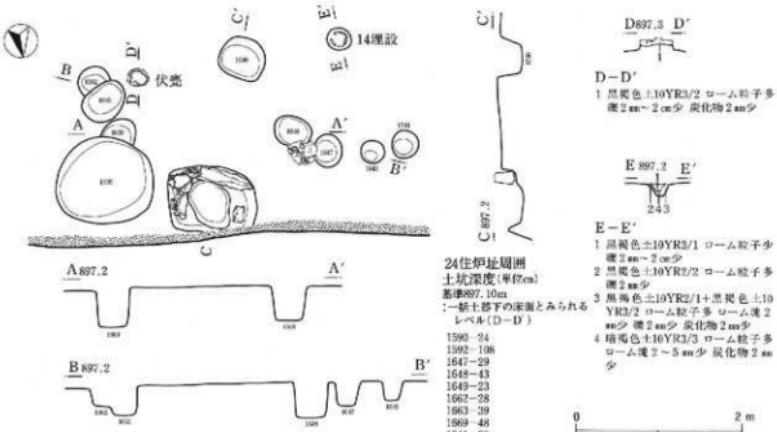
#### 第24号住居址（第31図）

遺構 ト-15グリッドを中心とする。住居址の北半分は調査区域外にある。

住居址プランの大略は、炉と主柱穴と考える土坑から窺える。平面形は円形・隅丸方形・隅丸五角形のどれかと考えられる。主軸は炉石の据え方と主柱穴の配列からみて、炉と第1590号土坑を結ぶ線と考えられる。したがって、出入口部は北側となる。主軸方向はS-17°-Eを示す。主軸長と副軸長は5m前後と推測される。



第30図 第23号住居址、第725・1200号土坑 (1/60)



第31図 第24号住居址、第14号埋設土器 (1/60)

住居址との認識がなく掘り下げたために、壁は検出できていない。住居址の掘り込みはローム層に達するか否かの微妙な面にあり、床面も的確に検出できたとは言い難い。

主柱穴は5基（対ビットを除く）と考えられ、3基が検出された。炉の南東から時計まわりに列挙すると、P 1 : 第1662・1663・1669号土坑、P 2 : 第1590号土坑、P 3 : 第1647・1648・1649号土坑である。P 1とP 3は、地点を変えて柱が建て替えられたことを示している。

炉は石圓炉で北側は道路築造時に破壊されている。南辺と東辺の炉石の外側に、土器の口縁部破片が添えられている。焼土は炉底に確認されたが、その範囲はごく狭い。厚さも1cm程度である。

P 1 の西脇から深鉢の口縁部が逆位で出土した。土器の遺存状態と出土位置からみて、いわゆる伏甕と判断される。

遺物 炉に添えられた土器は深鉢の口縁部である。口縁部文様帶は幅約6cmで肥厚し、低い突起がつく。最大径は約45cmで、約1/3が残存する。

伏甕も肥厚する口縁部文様帶をもつ上器である。口縁部から胴部上半が残存し、残存する高さは9cm、口径は21cmである。口縁部文様帶は幅約3cmで肥厚する。本来4単位の突起がついていたが、すべてを欠損する。伏せる際に打ち欠いたとみられる。胴部上半には斜位の条線文が施されている。

時期 炉に添えられた土器と伏甕からみて、曾利Ⅲ式の住居址と考えられる。

#### 第25号住居址（第32図）

構造 ター13・14グリッドを中心とする。北西側は第34号住居址と僅かに重複している。

遺構検出状態では黒褐色土の落ち込みに礫が散見される程度であったが、掘り下げが進むにつれ拳大から50cm近い礫が次々と姿を現した。礫の大半は掘方底面から10cm以上高い位置にある。また、礫は住居址の全面に分布するが、南側に偏在している。これらの礫を取り除いた結果、柱穴の内側に敷石が検出されたため、本址を敷石住居址と判断した。

平面形は検出された壁（掘方）と柱穴配列からみて、五角形（隅丸五角形）または方形（隅丸方形）とみられる。チ-13またはタ-15の配石とした構造を、本址に伴う敷石の一部と考えれば柄鏡形の敷石住居址となり得るが、位置関係以外に両者を結びつける根拠がない。出入口部が判然としないために主軸は不明である。平面規模は、一辺が7m前後と推測される。

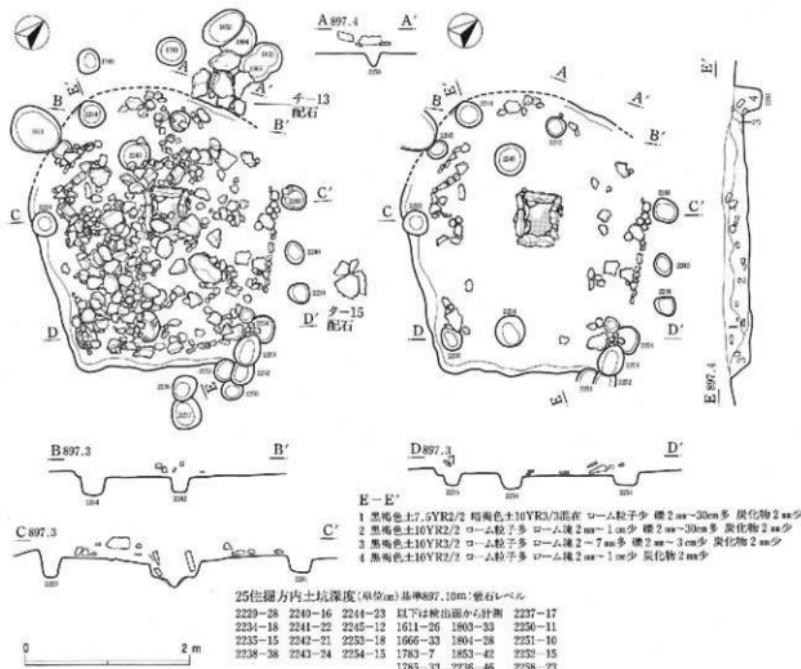
住居址はローム層を掘り込むため、南側と北側で壁が検出された。残存する壁の高さは敷石上5~25cmである。

敷石は柱穴の内側に敷かれている。東壁側では小砾が一直線に敷かれ、その内側に大きな板状の砾が敷かれている。その状態からみて、本来は全面に砾が敷かれていたのではないかと思われる。

住居址内から検出された柱穴状の土坑は10基である。敷石の外側（壁側）にあるものが主柱穴と思われる。

炉は石闘炉で完存とみる。炉石は南辺が花崗岩、他辺は安山岩である。炉石下と掘方間にには小砾が埋めされる。焼土の残りは良好で、厚さは5cmを測る。

住居址の覆土はE-E'に示したとおり分層された。多量の砾を含む層は1層と2層上層である。南（南東）壁に沿う砾の多くは板状で、中央に向かい傾いている。住居址がレンズ状に床地化した段階で砾が遺棄されたことを示している。2層の下層には掘方埋土があったとみられるが確認できなかった。



第32図 第25号住居址(1/60)

**遺物** 覆土から約30点の土器片が出土した。器形が窺えるものは2個体である。1つは口縁部(一部欠損)から胴部下半が残存する4単位の波状口縁深鉢である。残存する高さは18cm、口径は約17cmである。地文は縄文で、沈線で文様を描く。口縁部文様は口縁に沿う1条の沈線で、胴部文様は幅の狭い逆U字状文と藤手状文からなる。もう1つは胴部のくびれが弱い深鉢とみられる。口縁部から胴部上半で、約1/3が残存する。残存する高さは7cm、口径は約30cmである。沈線で文様が描かれる。口縁部文様は細長い格円形文で、胴部は逆U字状に区画し、区画内に間隔びした「ハ」の字文を施す。なお、微隆起線のある土器片は1点である。

**時期** 覆土から出土した土器からみて、曾利V式の住居址と考えられる。

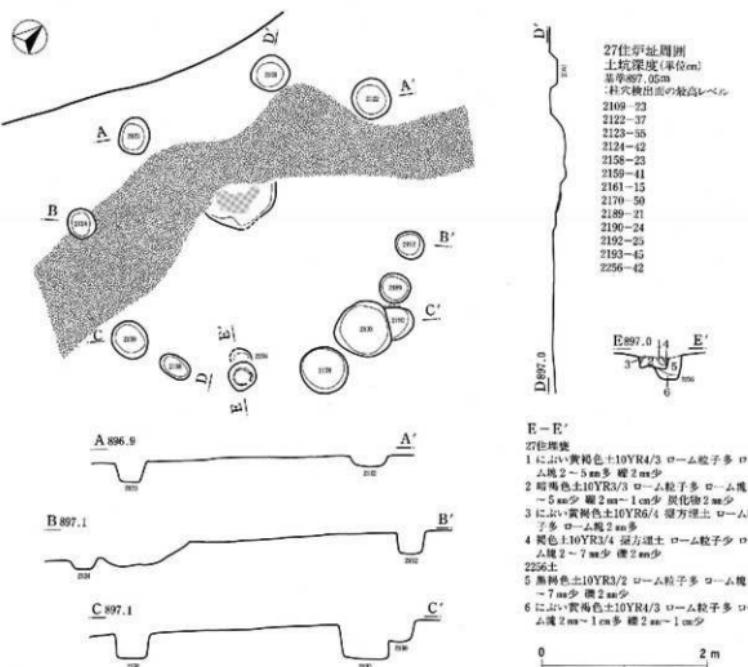
#### 第27号住居址（第33図）

**遺構** イー7グリッドを中心とする。

本址は炉と埋甕、主柱穴と考えられる土坑の配列から、住居址プランを窺うことができる。平面形は円形と考えられる。主軸を炉、埋甕、第2161号土坑を結ぶ線と考えるならば、主軸方向はN-45°-Wを示す。主軸長と副軸長は5m前後と推測される。

住居址はローム層を掘り込んでいるが、水田造成による削平とその後の擾乱が床面下にまで及んでいる。

主柱穴は7基と考えられる。埋甕の西から時計まわりに列挙すると、P1：第2159号土坑、P2：第2124



第33図 第27号住居址 (1/60)

号土坑、P 3 : 第2123号土坑、P 4 : 第2161号土坑、P 5 : 第2122号土坑、P 6 : 第2192号土坑、P 7 : 第2190号土坑である。

炉は掘方のみ検出された。炉底は数cmの厚さで焼けている。

埋甕は深鉢の口縁部から胴部上半である。逆位に埋設されている。土器の割れ口と残存する高さからみて、水田造成の際に削平されたとみられる。

遺物 埋甕は口縁部から胴部上半が残存する深鉢である。残存する高さは約12cm、口径は31cmである。地文は条線文である。口縁部文様は低隆帯1条で描き、楕円形と渦巻を組み合わせている。胴部は低隆帯で縦位に8分割し、区画内に縱位の蛇行沈線を施す。

時期 埋甕の時期からみて、曾利IV式の住居址と考えられる。

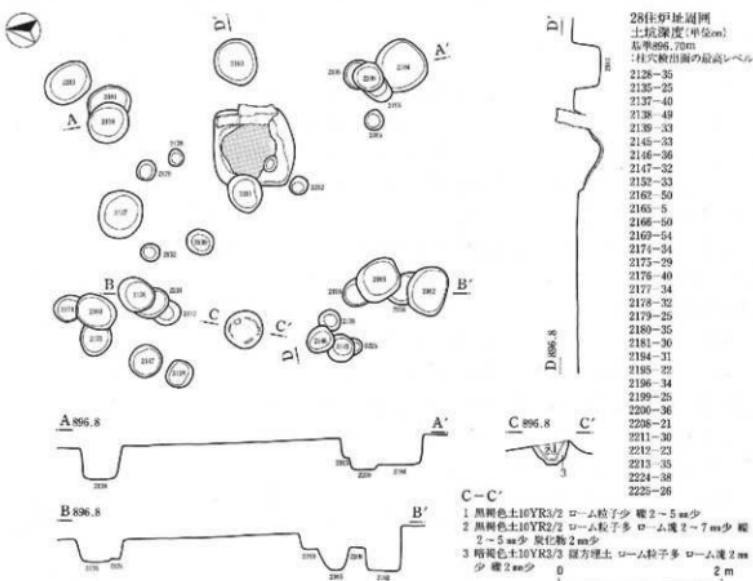
#### 第28号住居址（第34図）

遺構 Y-8グリッドを中心とする。東側は第28号住居址と重複する。

本址は炉と埋甕が残存し、主柱穴とみられる土坑が抽出可能であるため、住居址プランは以下のとおり推測される。平面形は円形・隅丸方形・隅丸五角形のどれかと考えられる。平面規模は主軸長4.5m前後 副軸長4.5~5.5m前後で、主軸方向はS-83°~Wを示す。

住居址はローム層を掘り込んでいるが、床面付近まで水田造成による削平が及んでいる。壁は残存せず、周溝も検出できていない。

床面は的確に検出できたとは言い難い。炉と埋甕の周囲に硬い面が確認された。



第34図 第28号住居址 (1/60)

主柱穴は5基と考えられる。埋甕の南から時計まわりに列挙すると、P 1：第2169・2176号土坑、P 2：第2138・2181・2213号土坑、P 3：第2180号土坑、P 4：第2200・2194・2196号土坑、P 5：第2162・2166号土坑である。以上が妥当ならば、P 3以外は地点を変えて柱が建て替えられたことを示している。建て替え回数は、1回または2回と考えられる。

炉は石圓炉であったと考えられる。奥壁の炉石のみ検出された。炉底全面に焼上が残存し、厚さは約5cmを測る。

埋甕は深鉢の胴部中位以下である。正面に埋設されている。

遺物 埋甕は胴部中位から底部である。残存する高さは約28cm、底径は10.5cmである。地文は条線文で、縦位の蛇行隆帯が12条貼付される。胴部に欠損部があるが、穿孔か否かは不明である。

時期 埋甕の時期からみて、曾利Ⅲ式の住居址と考えられる。

#### 第29号住居址（第35図）

遺構 エー9グリッドを中心とする。第30号住居址と重複する。

本址は第2148号土坑に重複する炉と、同土坑内の貼床を同一の遺構と認め住居址とした。貼床以外、床面とみられる面はなく、壁も検出されていない。また、炉の周囲には柱穴状の土坑が密集するため、住居に伴う柱穴も推測できない状態である。したがって、住居址プランは不明である。

第2148号土坑内の貼床は、ローム塊を大量に含む黒褐色土（D-D'の1層）で、厚さは7cm前後である。ここで構築時の床面について記しておく。貼床の上面レベルは炉の焼土レベルよりやや低いが、土坑内の貼床は沈むことが多く、本址も同様に解釈される。また、本址の構築時期と想定される頃の炉は、床面を掘り窪めてつくられるものが多い。以上から、本来の床面は貼床の上面レベルより10cm以上高い位置にあったと考えられる。

炉の掘方は楕円形で、炉底は3、4cmの厚さで焼けている。

遺物 本址に貼床された第2148号土坑は、埋土に多量の土器が含まれることから埋め戻された土坑と考えられる。土器は各層から満遍なく出土しており、土坑を埋めた土の出所に土器と同じ時期の住居址が存在していたと想像される。土坑の埋め戻しが本址の構築と同時に行われたとすれば、出土した土器の時期以降が本址の構築時期となる。

時期 第2148号土坑の埋め戻しが本址と同時に行われたと仮定して、堀之内1式初頭以降に構築された住居址と推測する。

#### 第30号住居址（第35図）

遺構 オー9グリッドを中心とする。第29号住居址および第2148号土坑と重複する。

第2105号土坑と第2148号土坑に切られる焼土址を炉と認め住居址とした。ローム層まで掘り下げた後に炉が確認されたため、床面と壁は検出されていない。また住居に伴う柱穴も抽出できずにいる。住居址のプランは不明である。

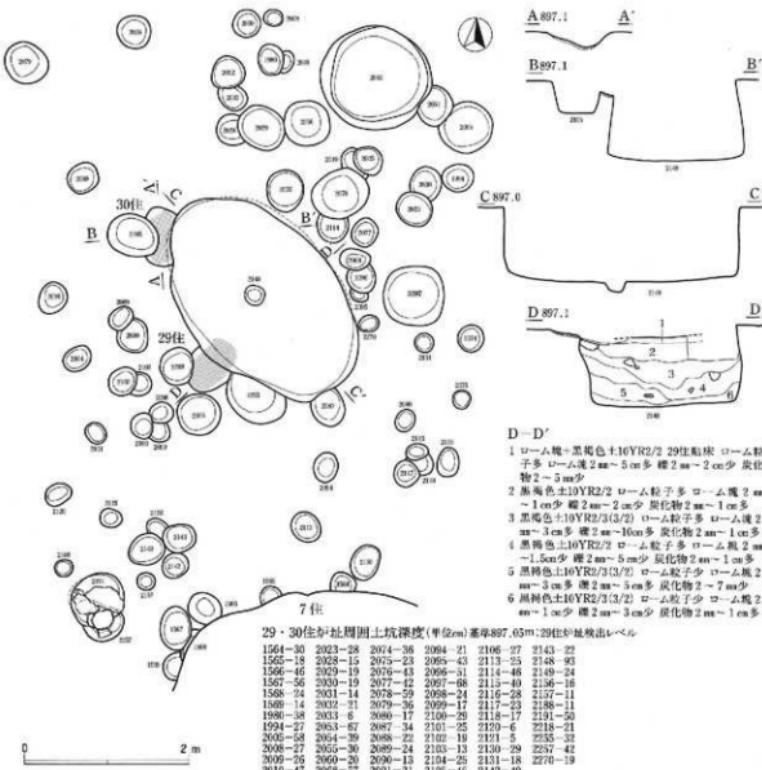
炉の掘方は円形または楕円形で、炉底は数cmの厚さで焼けている。

遺物 炉内から後期と思われる土器片1点が出土しているが、型式判定はできない。

時期 第29号住居址および第2148号土坑に切られることから、称名寺式後半以前の住居址と考えられる。

#### 第31号住居址（第22図）

遺構 ズ-10グリッドを中心とする。北側は第7号住居址、東側は第6号住居址、西側は第28号住居址と重複する。



第35図 第29・30号住居址、第2148号土坑 (1/60)

本址は表土剥ぎ作業時に炉石が検出され所在が明らかとなった住居址である。主柱穴と考えられる土坑の位置からみて、平面形は円形・隅丸方形・隅丸五角形のどれかと思われる。平面規模は主柱穴と考えられる土坑と炉の間隔からみて、直径4m以上と推測される。主軸方向は不明である。

床面付近まで水田造成による削平が及ぶ上に、住居址の掘り込みもローム漸移層と浅く、壁と周溝は検出されていない。

覆土の有無を確認し掘り下げていないため、検出した面が床面であるのか疑問である。硬い部分は検出されていない。

主柱穴は5基または6基と考えている。炉の南側から時計まわりに列挙すると、P1：第2144・2226号土坑、P2：第2145・2146号土坑、P3：第2129号土坑、P4：第1512号土坑、P5：第1508号土坑、P6：第1324号土坑である。以上が妥当ならば、P1とP2は地点を変えて柱が建て替えられたことを示している。第1324号土坑は第6号住居址の土層断面において、第6号住居址より古い土坑と考えられている（第21図D）。

- D')。

炉は石圓炉である。掘方の形状からみて方形と考えられる。焼土は壁の一部に残存する。厚さは数cmである。

遺物 P 4 と P 5 から中期後半? の土器片が 1 点ずつ出土した。

時期 本址を切る第 7 号住居址に井戸尻Ⅲ式から曾利 I 式の土器片が混在している。これに、炉の形態と主柱穴と考えられる土坑の配列を考え合わせ、井戸尻Ⅲ式から曾利 I 式の住居址と推測する。

#### 第32号住居址（第36図）

遺構 V-7・8 グリッドを中心とする。南側半分は調査区域外にある。

本址は炉が残存し、主柱穴も特定されたことから、以下のとおり住居址プランが推測される。平面形は円形・隅丸方形・隅丸五角形のどれかと考えられる。主軸は炉と主柱穴の位置関係からみて、炉と第2186号土坑を結ぶ線と考えられる。主軸長と副軸長は 5m 前後と推測され、主軸方向は N-45°-W を示す。

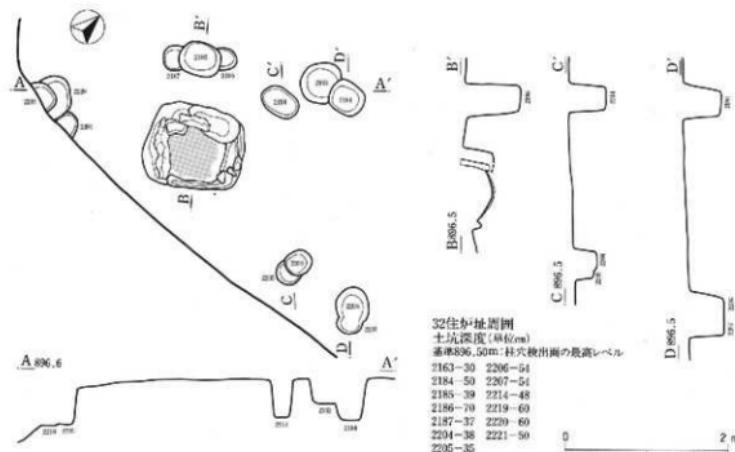
住居址はローム層を掘り込んでいるが、床面付近まで水田造成による削平が及んでいる。壁は残存せず、周溝も検出できていない。

覆土を確認し掘り下げていないため、的確に床面を検出できたとは言い難い。炉の周囲に硬い面が僅かに確認された。

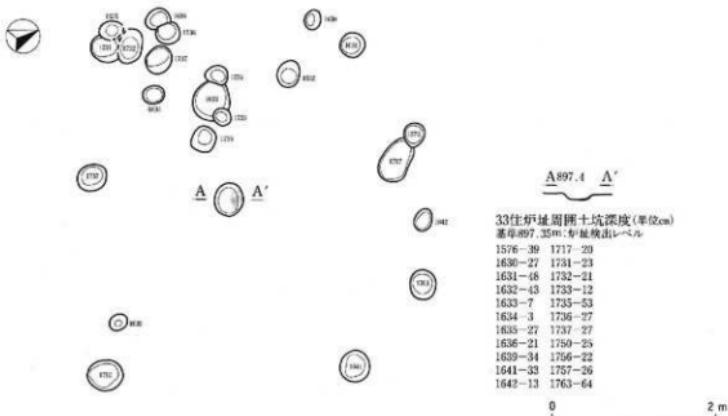
柱穴は 5 基と考えられる。炉の西から時計まわりに列挙すると、P 1 : 第2219・2220・2221号土坑、P 2 : 第2185・2186・2187号土坑、P 3 : 第2184・2214号土坑、P 4 : 第2204・2205・2206・2207号土坑である。すべての柱穴は、地点を変えて柱が建て替えられたことを示している。建て替え回数は 1 回または 2 回である。

炉は方形の石圓炉である。炉石の半分以上は残存していない。焼土は炉底全面に残存し、厚さは約 5 cm を測る。

遺物 第2186号土坑から曾利 II 式以降とみられる土器片が 1 点出土している。



第36図 第32号住居址 (1/60)



第37図 第33号住居址 (1/60)

時期 炉の形態と主柱穴の配列からみて、中期後半の住居址と考えられる。

#### 第33号住居址 (第37図)

遺構 コー10グリッドを中心とする。東側は第34号住居址と重複する可能性がある。

本址は炉が検出され所在が判明した住居址である。床面付近まで水田造成による削平が及ぶため、壁・床・周溝は検出できていない。平面形・規模・主軸方向など住居址のプランは判然としない。

本址に伴う柱穴は炉の周囲をめぐる土坑の中にあるのだろうが、規模や位置に規則性が見出せず抽出することができない。平面形は円形で、規模は直径5~5.5mほどとなろうか。

炉の掘方は梢円形で、炉底の一部が数cmの厚さで焼けている。

遺物 遺物の出土はない。

時期 繩文時代の住居址と考えられるが、時期は不明である。

#### 第34号住居址 (第38図)

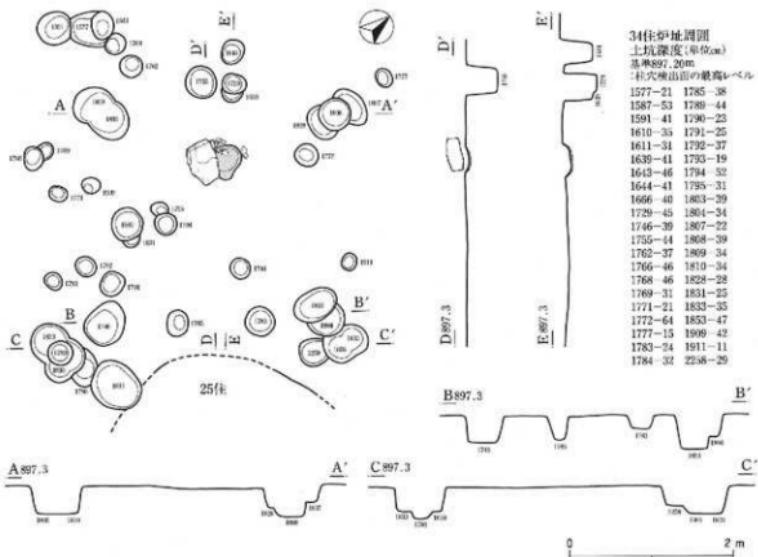
遺構 チー12グリッドを中心とする。南東側は第25号住居址と重複する。

本址は炉が検出され所在が判明した住居址である。ローム漸移層付近から掘り下げを始め、ローム層上面で焼土層が検出された。焼土層は掘方を伴い、その周囲に柱穴状の土坑がめぐることから住居址と認定した。

平面形は円形・隅丸方形・隅丸五角形のどれかと考えられる。出入口部は主柱穴と考えられる土坑と炉の位置からみて、第25号住居址との重複部に想定される。主軸は出入口部側の2基の柱穴を結んだ中点と、炉を結ぶ線と考える。主軸長と副軸長は5m前後と推測され、主軸方向はN-52°-Wを示す。

床面は炉底のレベルからみてローム漸移層付近にあったと推測される。

主柱穴は5基と考えられる。主柱穴は内外2重に組むことが可能で、同心円状の柱の建て替えと判断される。出入口部の南西をP1とし外側から時計回りに列挙すると、P1:第16101・1789・1833号土坑、P2:第1809号土坑、P3:第1644号土坑、P4:第1808号土坑、P5:第1666・1803号土坑である。内側は、P1:第1746号土坑、P2:第1810号土坑、P3:第1639・1729・1755号土坑、P4:第1828号土坑、P5:



第38図 第34号住居址 (1/60)

第1804・1853号土坑である。柱穴によっては数回にわたり、柱が建て替えられたことになる。

炉の上面から板状の礫と深鉢が出土した。礫は形状からみて炉石の可能性がある。炉底は約5cmの厚さで焼けている。

遺物 炉内から2個体の深鉢が出土した。どちらも胴部がくびれない器形である。1つは口縁部と胴部の一部を除き残存する。高さは16cm、口径は17cm、底径は7cmである。口縁部に横位隆帯を1条めぐらし、胴部を縦位の隆帯で区画する。口縁部と胴部に条線文を充填する。もう1つは口縁部から胴部中位が約1/4残存する。残存する高さは12cm、口径は約16cmである。地文は条線文である。口縁部に横位沈線を1条めぐらし、胴部に縦位の蛇行沈線を施す。

時期 炉内から出土した土器からみて、曾利IV式の住居址と考えられる。

## 2. 土坑

### (1) 墓坑と考えられる土坑

#### ① 垂飾を伴う土坑

5基の土坑から6点の垂飾が出土した。平面形と覆土からみて、いずれも墓坑と考えられる。内訳は第900号土坑と第1200号土坑から硬玉製が1点、第725号土坑から曹長岩製が1点、第1000号土坑から琥珀製が2点、第1100号土坑から琥珀製が1点である。なお、石質は肉眼鑑定による。

土坑の検出面は第1000号土坑がローム漸移層で、他はローム層である。

#### 第725号土坑（第30・39・44図）

遺構 キー18グリッドに位置する。第23号住居址内から検出された。墓坑と考えられる第722・1080・1121号土坑と重複するが、重複関係は不明である。

平面形は楕円形である。長軸長は95cmと推測され、短軸長は75cmである。長軸方向はN-78°-Eを示す。残存する壁の高さは55~75cmである。

垂飾は中央から北西寄りで出土した。底面からの高さは5cmである。

遺物 平面形は楕円形である。最大長は11.7cm、最大幅は3.9cm、最大厚は2.6cmで、重さは162gを測る。穴は片側穿孔で0.7~0.4cmである。

時期 垂飾の形状と大きさからみて、縄文時代中期後半から終末と推測される。

#### 第900号土坑（第39・44図）

遺構 キー19・20グリッドに位置する。第884号土坑ほかと重複するが、重複関係は不明である。

平面形は楕円形で、長軸長は130cm、短軸長は70cmと推測される。長軸方向はN-82°-Wを示す。

残存する壁の高さは20~30cmである。

垂飾は長軸線上の東端から出土した。底面からの高さは15cmである。

遺物 平面形は方形である。最大長は1.5cm、最大幅は1.3cm、最大厚は0.9cmで、重さは4.0gを測る。穴は片側穿孔で0.6~0.3cmである。

時期 縄文時代中期後半から終末と推測される。

#### 第1000号土坑（第39・44図）

遺構 ヤ・ズ-19グリッドに位置する。第2号住居址の壁体に関わる標とみられるその下から検出された。墓坑と考えられる第1118・1120号土坑と重複する。第1118号土坑を切り、第1120号土坑に切られる。

平面形は楕円形である。長軸長は90cm、短軸長は65cmである。長軸方向はN-40°-Eを示す。

残存する壁の高さは25~30cmである。

垂飾は長軸線上の北東寄りから並んで出土した。底面からの高さは10cmである。

覆土はA-A'のとおり分層された。出土層位は2層と3層の境付近である。3層は2層にくらべて黒みが強い。

遺物 1点は不整な楕円形で、ほぼ完存する。最大長は6.2cm、最大幅は3.0cm、最大厚は2.2cmで、重さは25.0gを測る。穴は両側から穿孔されたとみられ、径は0.8~0.5cmである。もう1点は破損し、1/2以上は残存すると考えられる。平面形は隅丸方形とみられる。最大長は3.9cm、最大幅は3.4cm、最大厚は2.0cmで、重さは12.8gを測る。穴の径は0.8~0.5cmである。脆弱であったため、樹脂を含浸している。

時期 縄文時代中期後半から終末と推測される。

#### 第1100号土坑（第39図）

遺構 オ・カ-19グリッドに位置する。第1号住居址と僅かに重複するとみられる。墓坑と考えられる第954・1229号土坑と重複し、第1229号土坑を切っている。

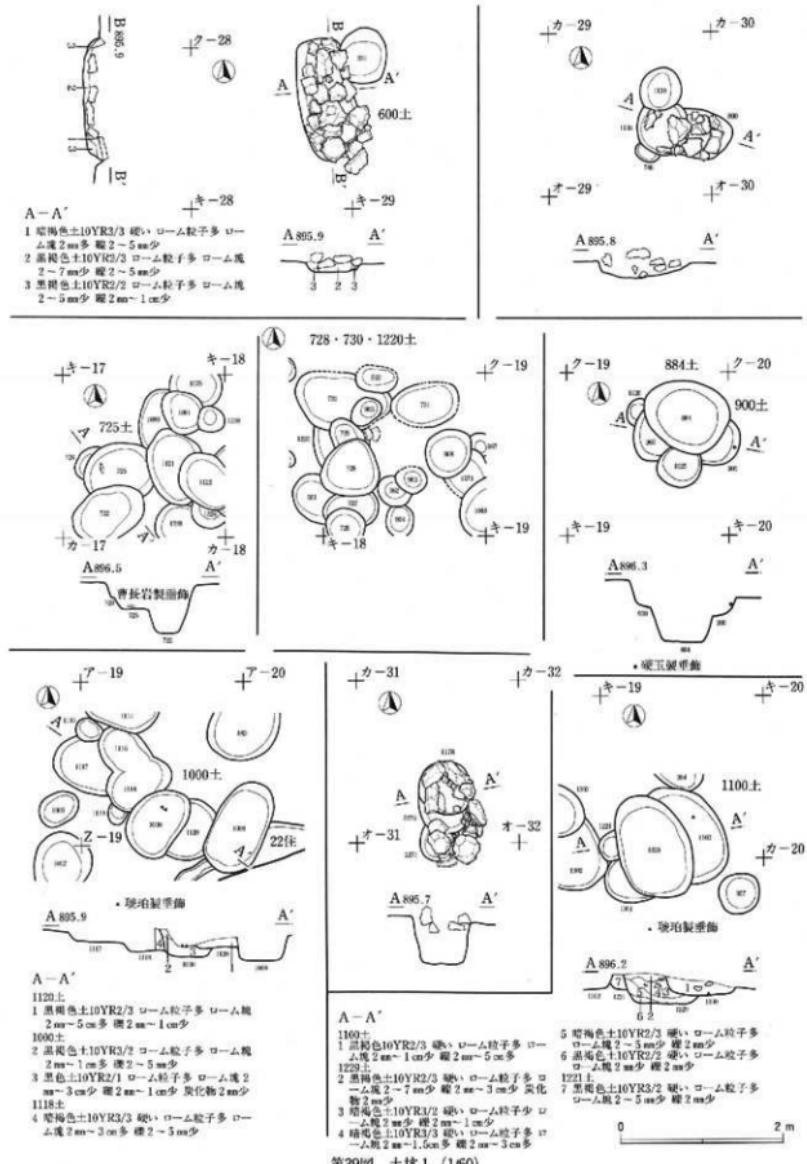
平面形は楕円形である。長軸長は130cm、短軸長は95cmである。長軸方向はN-33°-Wを示す。

残存する壁の高さは10~20cmである。

垂飾は中央から北東寄りで出土した。底面直上からの出土である。

覆土はA-A'のとおり分層された。

遺物 掘り下げ時に壊してしまい、形状は不明である。残存する最大長は2.2cm、残存する最大厚は0.9cm



第39図 土坑1 (160)

で、重さは1.4gを測る。穴は別方向から2本穿孔される。径は0.5cmと0.7cmほどである。

時期 繩文時代中期後半から終末と推測される。

#### 第1200号土坑（第30・44図）

遺構 カー18グリッドに位置する。第23号住居址の対ビットと考える第1199号土坑と重複する。また第1303号土坑ほかと重複する。第1199号土坑に切られ、第1303号土坑を切っている。

平面形は梢円形で、長軸長は110cmと推測され、短軸長は70cmである。長軸方向はN-34°-Wを示す。

残存する壁の高さは20~30cmである。

垂飾は中央付近から出土した。底面からの高さは10cmである。

覆土はE-E'のとおり分層された。覆土は硬く締まり、下層ほど黒みが強い。5層はローム粒子・塊と礫を多く含む。

遺物 平面形は梢円形である。最大長は4.6cm、最大幅は1.1cm、最大厚は0.9cmで、重さは13.5gを測る。穴は片側穿孔で0.6~0.5cmである。

時期 繩文時代中期後半から終末と推測される。

#### ②土器を伴う土坑

##### 第728・730・1220号土坑（第39図）

遺構 キー18グリッドに位置する。第23号住居址内にある3基の土坑のどれかに伴う土器として取り上げた。土器の下面レベルは第23号住居址の炉検出レベルより10~15cm低く、土器の時期は第23号住居址の構築時期より新しいと考えられたためである。

土器は深鉢で完存する。平面図に図化していないが、深鉢の東側には大きな地山礫があり、深鉢はこの礫に向て伏せられた状態（斜位）で出土している。出土状態と土器の形状・大きさからみて、いわゆる「妻被葬」に用いられた深鉢と考えられる。

深鉢が伏せられた土坑は、深鉢の下面レベルと土坑の深さからみると、第1220号土坑が最も適当と思われる。掘り込みはローム層まで達し、残存する壁の高さは37cmである。第1220号土坑は東壁が検出されていないが、地山礫の側面を土坑の壁に利用したことは容易に想像され、深鉢の位置とも符号する。これが妥当であるならば、長軸長は95cm以上となり、短軸長は85cm前後と推測される。長軸方向はN-83°-Eを示す。

遺物 頭部のくびれが弱い無文の深鉢である。高さは22.5cm、口径は10.5cm、底径は6cmである。口縁端部は内折し、指頭圧痕状に窪むところがある。内面に口縁に沿う浅い沈線がめぐり、貫通しない小孔が2箇所ある。底部に網代痕がある。

時期 出土した土器からみて、堀之内2式終末の土坑と考えられる。

#### 第1190号土坑（第40図）

遺構 ウー20グリッドで、第1号住居址の炉から南東約5mに位置する。黒色土層の堆積が厚くなる地点に構築される。

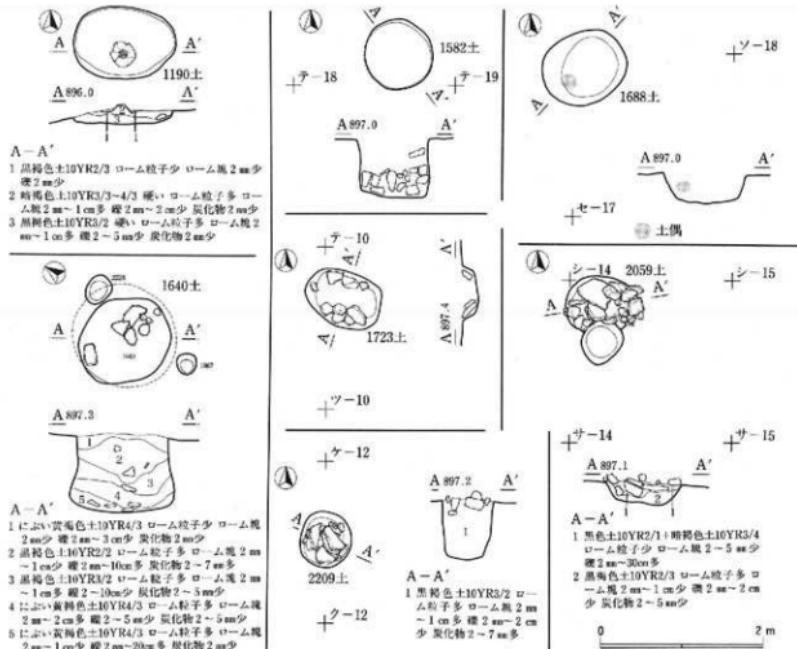
平面形は梢円形である。長軸長は125cm、副軸長は90cmである。長軸方向はN-89°-Wを示す。

土坑はローム層を掘り込んでいる。残存する壁の高さは10~20cmである。

土器は浅鉢である。中央から南寄りにあり、伏せられている。いわゆる「妻被葬」である。底面からの高さは約15cmである。

覆土はA-A'のとおり分層された。浅鉢下に堆積する2層と3層は硬く締まりがある。

遺物 内外面ともよく磨かれた浅鉢である。突起と口縁部の一部を欠損する。高さは9cm、口径は28cm、



第40図 土坑2 (1/60)

底径は10.5cmである。外面に横様はない。口縁部内面に小孔を囲む4単位の文様と1条の沈線が全周する。  
また脇部と底部の接点に1条の浅い沈線がめぐる。

時期 出土した土器からみて、堀之内式終末の土坑と考えられる。

### ③礫を伴う土坑

#### 第600号土坑（第39図）

遺構 キー28・29グリッドに位置する。調査区の南東に位置し、黒色土層の堆積が厚くなる地点に構築される。礫の検出面は黒色土層から黒褐色土層であるが、掘方の検出面はローム層である。第931号土坑と重複し、本土坑が切っている。

黒色土層中から角礫を主体とする礫集中が検出された。礫の大きさもまちまちで、規則性があるとは思えない状態であった。これら上面の礫を取り除きローム層まで掘り下げたところ、隅丸長方形を呈する礫のまとまりが検出された。掘方に沿って柱状礫がめぐり、礫より一回り大きな掘方が確認されたため、本土坑を石棺墓と考えた。

掘方の平面形は隅丸長方形である。長軸長は150cm、短軸長は70cmで、長軸方向はN-12°-Wを示す。

残存する壁の高さは15~20cmを測る。

壁に沿う礫の内側には、板状で厚みのある礫が散かれたかのように遺存する。底面に向かって傾くものがあるため、壁に積まれた礫が崩落したものと考えている。

覆土はA-A'のとおり分層された。上面の礫は断面図に固化していない。固化した下面の礫から10~20cm上にあり、礫間に黒みの強い黒褐色土が堆積していた。

遺物 上面の礫レベルから加曾利B1式の土器が出土し、下面の礫レベルから後期の粗製土器が出土している。加曾利B1式の土器は口縁部が内湾する半縁の深鉢である。口縁部から脇部中位で、約1/5が残存する。残存する高さは約6cm、口径は約25cmである。数条の沈線で横位文様帯を描き、沈線間に斜位の細沈線を充填する。横位文様帯の無文帯に「の」の字の単位文が施文される。粗製土器は口縁部の一部である。

時期 出土した土器からみて、加曾利B1式の土坑と考えられる。

#### 第1723号土坑（第40図）

遺構 ツ-9・10グリッドで、調査区の北コーナーに位置する。水田造成により削平されたローム層が遺構検出面である。

板状の礫が壁に立てかけられた状態で出土した。土坑の形状と規模を考え合わせるならば、石棺墓と言うこともできる。

平面形は梢円形である。長軸長は95cm、短軸長は65cmで、長軸方向はN-73°-Wを示す。

残存する壁の高さは20~30cmを測る。

礫は長辺（南壁と北壁）に集中し、短辺には僅か1つあるだけである。水田造成の際に短辺の礫だけが偶然に抜き取られた可能性もあるが、もともと礫は短辺に掲えられていなかったとみるのが妥当である。

遺物 遺物は出土していない。

時期 繩文時代の土坑と考えられるが、時期は不明である。

#### （2）貯蔵穴と考えられる土坑

##### 第1582号土坑（第40・44図）

遺構 テ-18グリッドに位置する。遺構検出面はローム漸移層である。

平面形は円形で、断面形は筒形を呈する。直径は約100cmである。

残存する壁の高さは65~70cmである。壁は直立する。

土坑の底面から約50cmの間に、拳大から人頭大ほどの礫がまとまって検出された。礫に積まれたもの、壁に立てかけられたものなどではなく、土坑廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

遺物 遺物は少量である。型式判定できる土器は数点で、朝顔形深鉢の脇部破片、石神類型の深鉢の脇部破片が出土している。

時期 出土した土器からみて、堀之内2式（終末？）の土坑と考えられる。

##### 第1640号土坑（第40図）

遺構 ソ-12グリッドに位置する。遺構検出面はローム層である。

平面形は円形で、断面形はフラスコ形を呈する。検出面での直径は110cm前後で、底径は120~130cm前後である。

残存する壁の高さは80~85cmである。

底面付近から板状の礫が出土した。底面に密着するもの、高い位置にあるものと、レベルはまちまちである。礫は土坑廃絶後に埋められたものと考えられる。

覆土はA-A'に示したとおり分層された。

遺物 土器の破片が20点あまり出土した。型式判定できる土器で最も新しいものは、加曾利B1式の土器である。内面文の発達した浅鉢の口縁部である。また、同時期とみられる深鉢の胴部下半から底部が出土している。

時期 出土した土器からみて、加曾利B1式の上坑と考えられる。

#### 第2148号土坑（第35図）

遺構 エ・オー9・10グリッドに位置する。第29・30号住居址と数基の土坑が重複している。第30号住居址を切り、第29号住居址に貼床される。遺構検出面はローム漸移層からローム層である。

平面形は楕円形で、断面形は筒形である。長軸長は280cm、短軸長は170cmで、長軸方向はN-48°-Wを示す。底面のほぼ中央に径25cm前後で、底面からの深さが12cmの小穴がある。

残存する壁の高さは100cm前後である。北壁と東壁では僅かに袋状を呈している。

覆土はA-A'に示したとおり分層された。第29号住居址で記したとおり、土坑は埋め戻されたと考えられる。

遺物 覆土全体から整理箱1箱分の土器片が出土している。復元された土器は1個体もない。型式判定できる土器の大半は称名寺式後半から堀之内1式初頭とみられる土器である。称名寺式後半の土器は沈線間に繩文を施すものが圧倒的に多い。沈線間に列点を施すものは稀であるが、沈線のみで文様を描くものも少なからずある。堀之内1式初頭とみられる土器には、線状の微隆起線1条または2条で文様を描くものがある。微隆起線上に円形刺突をもつものが多い。

時期 墓土出土の土器からみて、堀之内1式初頭以前の上坑と考えられる。

### （3）他の土坑

#### 第1688号土坑（第40・44図）

遺構 セ・ゾー16・17グリッドに位置する。水田の築境となる法面から検出された。遺構検出面はローム層である。

平面形は円形または楕円形である。長軸長は105cm、短軸長は90cmで、長軸方向はN-60°-Eを示す。

残存する壁の高さは約40cmである。

土偶は拳大前後の多量の礫とともに出土したが、出土状態は記録できていない。それは、土偶を裸と見間違えて取り上げてしまったためである。聞き取りによると、南東隅の長軸線上付近から、片脚が脚部から離れた状態で出土したようである。底面からの高さは15cm前後である。土偶の出土状態と残存状態からみて、礫とともに遺棄されたと考えられる。

遺物 上偶は頭部と両腕を欠損している。残存する高さは13cm、胸郭の最小幅は5.4cm、胸郭の最大厚は5.7cm、重さは597gを測る。つくりは中実であるが、径1cm前後の穴が頭部から股間に貫通する。胸郭に向けて頭部・両腕・両脚から同様の穴が開けられ、頭部と両脚の穴は胸郭の穴に連結する。両脚の穴には切り合いか認められる。乳房・臍・性器・臀が粘土貼付で表現される。文様は胸郭と脚部にあり、細沈線のみで描かれる。胸郭の文様は、半截竹管状の工具で描かれる。正面は平行沈線に渦巻文を組み合わせた袈裟がけで、背面は櫛がけである。脚部の文様はヘラ状工具で描かれる。脚部は内股を除き縦線の沈線が描かれ、爪先に相当する箇所にも沈線が描かれている。

時期 堀之内2式の土偶とみられることから、当該期の土坑とみられる。

### 3. 埋設土器

#### 第2号埋設土器（第19図）

遺構 Z-16グリッド位置する。第3号住居址の炉から約3m北東にある。遺構検出面は黒褐色土層から暗褐色土層である。

検出面で掘方は判然としなかったが、半截により掘方が確認されたため埋設土器と判断した。正位に埋設されている。

覆土はE-E'に示したとおり分層された。掘方埋土は黒色土である。掘方底面は暗褐色土層内にある。

遺物 深鉢の胴部下半から底部である。残存する高さは約10cm、残存部での最大径は約21cm、底径は11cmである。残存部に穿孔はない。

時期 脱土からみて、中期後半以降の土器と推測される。

#### 第3号埋設土器（第47図）

遺構 エ・オ-26・27グリッド位置する。第902号土坑内に埋設され、土器の北側は第16号住居址の南壁に埋されている。遺構検出面は暗褐色土層である。

第902号土坑内に埋設されていることもあり、検出面で掘方は判然としなかった。半截により、土坑内に掘方が確認されたため埋設土器と判断した。正位に埋設されている。

覆土はD-D'に示したとおり分層された。

遺物 深鉢の胴部下半から底部である。胴部の約1/4は第16号住居址に埋されている。残存する高さは約15cmで、残存部での最大径は約45cmである。微隆起線状の縦位隆帯2条で区画し、区画内に縦位の蛇行隆帯と「ハ」の字状文を充填する。胴部に穿孔はない。

時期 曽利V式の土器と推測される。

#### 第4号埋設土器（第46図）

遺構 イ-23・24グリッド位置する。黒色土層の残りが良い地点に構築される。遺構検出面は黒色土層から黒褐色土層である。

検出面で掘方は判然としなかったが、半截により掘方が確認されたため埋設土器と判断した。正位に埋設されている。

覆土はB-B'に示したとおり分層された。掘方底面は褐色土層内にある。

遺物 粗製の深鉢で、口縁部・胴部・底部の一部が欠損している。高さは25cm、口径は24.5cm、底径は9cmである。輪形はヨコナデまたはヘラケズリで輪積痕が明瞭に残る。底部に網代痕がある。残存部に穿孔はないと思われる。

時期 後期の土器と考えられる。

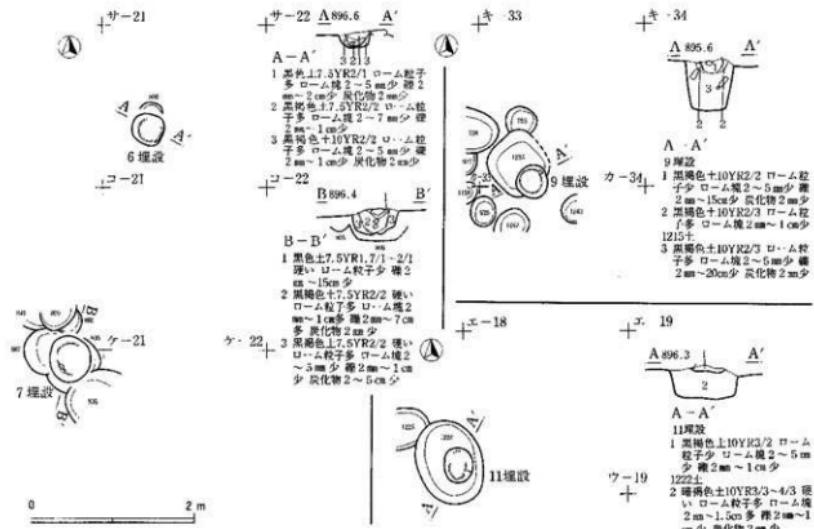
#### 第6号埋設土器（第41図）

遺構 ゴ-21グリッドに位置する。第808号土坑と重複し、土坑を切っている。遺構検出面はローム漸移層である。

検出面で掘方が確認されたため埋設土器とした。土器は正位に埋設されている。土器の上層に板状の疊があるが、第20号住居址に伴う敷石の可能性がある。

覆土はA-A'に示したとおり分層された。掘方底面はローム層にある。

遺物 深鉢（X字状把手付深鉢？）の胴部下半から底部である。残存する高さは約20cm、残存部での最大



第41圖 埋設土器 (1/60)

径は約30cm、底径は10cmである。低隆帯1条により胸部文様帶を区画し、区画内に条線文を矢羽根状に施す。残存部に穿孔はない。

時期 曾利IV式の土器と推測される。

### 第7号埋設土器（第41図）

遺構 ク・ケー-20グリッドに位置する。第805~807号土坑ほかと重複し、本址が土坑を切っている。遺構検出面はローム漸移層である。

半截により第806号土坑内に掘方が確認されたため埋設工具とした。正位に埋設されている。

覆土はA-A'に示したとおり分層された。2層はローム粒子・塊を多く含むため、人為的に埋められた上と考えられる。

遺物 深鉢の口縁部から胴部上半である。土器は脆弱で、口縁部の大半は小破片のため接合不可である。残存する高さは約20cm、口径は約45cmである。口縁部に横位の微隆起線で仕切られた幅4cmほどの無文帯がある。以下は微隆起線でU字・逆U字状に組み合わせて区画し、区画内に繩文を施文する。器面は摩滅が進み、文様を確認できない部分が多い。残存部に穿孔はない。

時期 曾利V式の土器と考えられる。

#### 第9号埋設土器(第41图)

遺構 オ・カ-33グリッドに位置する。第1215号上坑と重複し、土坑を切っている。遺構検出面はローム層である。

半裁により第1215号土坑内に掘方が確認されたため埋設土器とした。正位に埋設されている。

覆土はA-A'に示したとおり分層された。

遺物 広口壺形土器の胴部中位である。残存する高さは約20cm、残存部での最大径は約30cmである。低隆帯1条で胴部文様帯を区画し、区画内にヘラ状工具で「ハ」の字文を施す。残存部に穿孔はない。

時期 曽利V式の土器と考えられる。

#### 第11号埋設土器（第41図）

遺構 ウー17・18グリッドに位置する。第1222号土坑内にある。遺構検出面はローム漸移層である。

半截により第1222号土坑内に掘方が確認されたため埋設土器とした。正位に埋設されている。

覆土はA-A'に示したとおり分層された。

遺物 深鉢の口縁部から胴部中位である。残存する高さは約15cm、口径は約20cmである。4単位の波状口縁とみられ、1つは長い把手となる。文様は同一工具による沈線で施す。口縁部文様は波状口縁に沿う1条の沈線で、胴部文様は波状口縁に合わせて逆U字状に区画する。区画の内外に乱れた「ハ」の字文と单線文が施す。残存部に穿孔はない。

時期 曽利V式の土器と考えられる。

#### 第12号埋設土器（第43図）

遺構 エー32グリッドに位置する。第1070号土坑と重複し、土坑を切っている。遺構検出面は黒褐色土層で、エー32の配石とした礫群の東脇から検出された。

土器の遺存状態から埋設土器としたが、掘方が確認されていないために埋設土器とするのは適当でないかもしれません。遺存状態は逆位である。

土器の内部と周囲を覆う上は、骨片を大量に含む黒褐色土層である（1・1'層）。その範囲はエー32の配石を囲み広範囲に確認されている（波線）。土器と配石を半截したところ、1'層は約20cmの一定の厚みであることが確認され、平面分布にあわせて立ち上がるようであった。調査区域外にかかる部分が多く推測の域をでないが、1・1'層を覆うとする堅穴住居址や堅穴状造構の可能性もある。そうであるならば、第12号埋設土器は伏堀と考えられる。また、エー32の配石は、第12号埋設土器と時間差があることとなる。

覆土はA-A'に示したとおり分層された。1・1'層はローム層まで達し、ローム層との層境は明瞭である。

遺物 深鉢の口縁部から胴部上半である。胴部の欠損は割れ口から判断して人為的なものである。残存する高さは約16cm、口径は約34cmである。口縁部文様は断面が三角形の隆帯で楕円区画される。区画内に継続沈線を充填する。胴部は沈線で逆U字状に区画し、区画間に葉手状文を施す。区画内には綾糸状の沈線が充填される。残存部に穿孔はない。

時期 曽利IV式かV式の土器と考えられる。

#### 第14号埋設土器（第31図）

遺構 テー14・15グリッドに位置する。遺構検出面はローム漸移層からローム層である。

検出面で掘方が確認されたため埋設土器とした。正位に埋設されている。割れ口が新しいため、表土剥ぎ作業の際に削平したものと考えられる。

覆土はE-E'に示したとおり分層された。

遺物 深鉢の胴部下半から底部である。残存する高さは約14cm、残存部での最大径は約17cm、底径は6.5cmである。地文は縦文である。幅広で浅い継続沈線2条で胴部文様帯を8分割する。残存部に穿孔はない。

時期 曽利IV式の土器と考えられる。

#### 4. 焼土址

##### 第1号焼土址（第43図）

遺構 キー31グリッドに位置する。遺構検出面は黒色土層面である。

平面形は東西に長い不整形で、中心付近の焼土の厚みは8cmである。

遺物 焼土内から3点の土器片が出土している。時期が見える土器は1点で、堀之内2式以降とみられる口縁部である。口縁端部が内折し、口唇に刻みが施文される。また、後期とみられる粗製土器の口縁部が1点出土している。

時期 焼土内から出土した土器からみて、堀之内2式以降の焼土址と考えられる。

##### 第2号焼土址（第43図）

遺構 コー30グリッドに位置する。本址は第13号住居址と重複し、住居址内に位置する可能性が高い。遺構検出面は黒褐色土層面である。

平面形は不整形で、中心付近の焼土の厚みは4cmである。

遺物 焼土址の北に接し、後期とみられる粗製土器の底部が出土した。レベルは本址検出レベルとほぼ同じである。

時期 焼土址に接して出土した土器からみて、後期の焼土址と考えられる。

##### 第3号焼土址（第43図）

遺構 サー31グリッドに位置する。遺構検出面は黒褐色土層面である。

平面形は南北に長い不整形で、中心付近の焼土の厚みは7cmである。

遺物 焼土内から7点の土器片が出土している。型式判定できるものは1点もないが、後期とみられる精製土器と粗製土器が各2点ある。

時期 焼土内から出土した土器からみて、堀之内2式以降の焼土址と考えられる。

##### 第4号焼土址（第43図）

遺構 コー28グリッドに位置する。遺構検出面は黒褐色土層面である。

平面形は南北に長い楕円形で、中心付近の焼土の厚みは4cmである。

遺物 焼土内から7点の土器片が出土している。型式判定できるものは1点で、朝鮮形深鉢の口縁部である。外面に横位の刻隆帯を貼付している。

時期 焼土内から出土した土器からみて、堀之内2式以降の焼土址と考えられる。

##### 第5号焼土址（第43図）

遺構 カー35グリッドに位置する。第12号住居址と重複する。住居址の覆土上面で火が焚かれている。遺構検出面は黒色土層面である。

平面形は東西に長い楕円形で、中心付近の焼土の厚みは6cmである。

遺物 焼土内から遺物は出土していないが、焼土址の脇から曾利V式の土器が出土している。

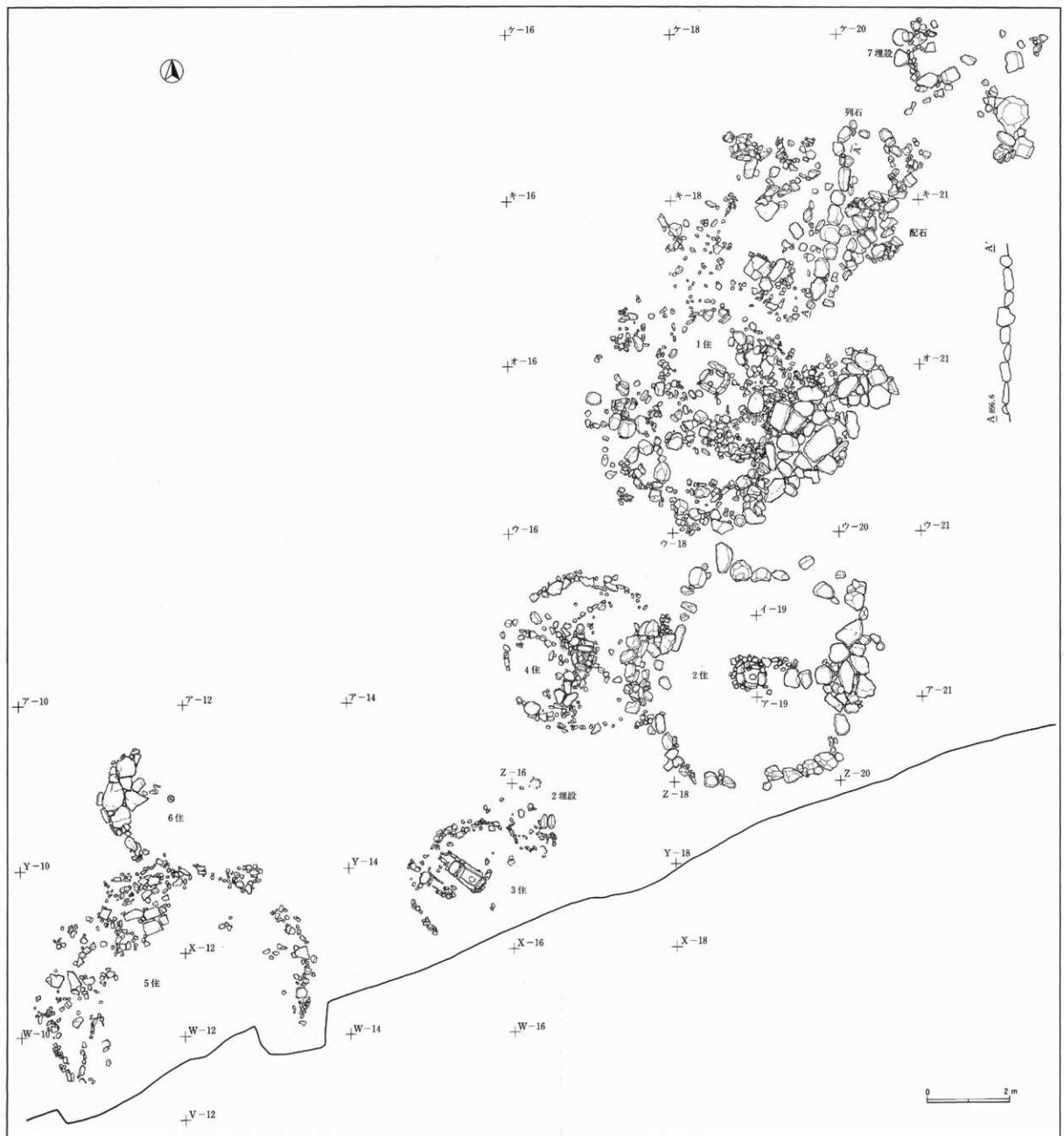
時期 第12号住居址の覆土上層にある焼土址であることから、曾利V式以降の焼土址と考えられる。

##### 第6号焼土址（第43図）

遺構 オー33・34グリッドに位置する。第12号住居址・第1074号土坑などと重複する。第12号住居址を切り、第1074号土坑に切られる。本址は調査区域外へ続いている。遺構検出面は黒色土層面である。

平面形は南北に長い楕円形で、中心付近の焼土の厚みは15cmである。

遺物 焼土内から遺物は出土していない。



第42図 綱文後期敷石住居址群と列石・配石 (180)

時期 第12号住居址を切る焼土塗のため、曾利V式以降の焼土塗と考えられる。

### 5. 列石・配石（第42図）

列石・配石の概要は第IV章で触れたとおりである。ここでは、第1号住居址の北にある列石と、東側に接する配石について記す。列石については第1号住居址の記述の中で、住居址に伴う可能性があることを示している。なお、配石とした砾は列石の上に積まれていた可能性もあるが、その根拠が見出せないため配石と呼称する。

遺構 列石と認定した砾は10個ほどある。大きさはひと抱えほどあり、厚みのあるものが多い。列石を横断する土層断面によると、砾の下面は暗褐色土層内にあることが確認された。したがって、砾は地面を掘り窪めて据えられたと考えられる。また、列石の西側と東側では、列石検出面の土色が異なっている。西側では暗褐色土で、東側では黒色土である。この堆積状態は、西側から東側へ緩傾斜する自然地形と合致するが、東側に接する配石の下面レベルは列石の下面レベルとほぼ同じであることから、列石の東側は面的に掘り下げられていたと考えたい。

配石は列石より一回り小さい砾からなる。列石と同様に、第1号住居址の出入口部まで配石されていた可能性がある。

遺物 列石・配石を覆う土、および検出面から土器片が出土している。型式判定できる土器の中に加曾利B1式の土器片が数点ある。

時期 第1号住居址に伴うとすれば、加曾利B1式後半から2式前半の列石・配石と考えられる。

### 6. 黒曜石集積（第43図）

遺構 サー31グリッドに位置する。僅かに第10号住居址と重複する。遺構検出面は黒褐色土層から暗褐色土層である。

黒曜石の集積と認識して記録し取り上げたものは8点である。すべて石核で、1点は両極剥離痕が認められる。出土レベル差は1cm内外である。周囲から原石と石核が多く出土しており、黒曜石の集積は広範囲に及んでいた可能性が高い。

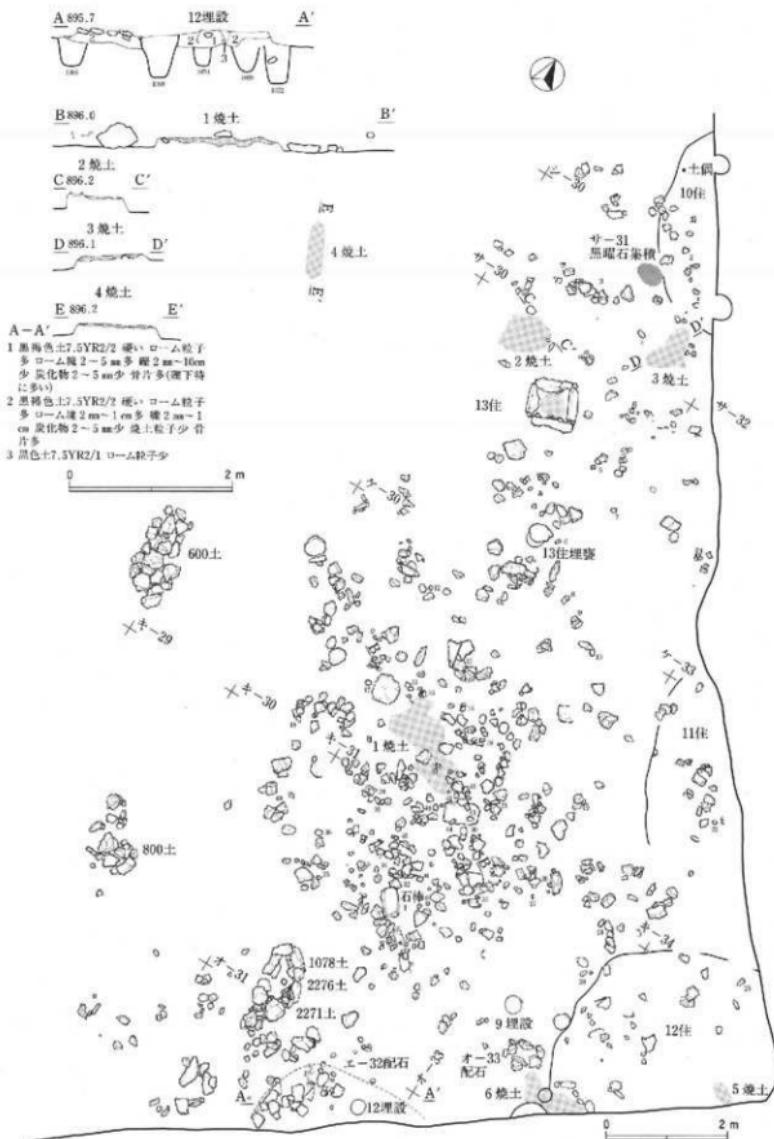
時期 不明である。

### 7. 黒（褐）色土層面検出の遺構（第43図）

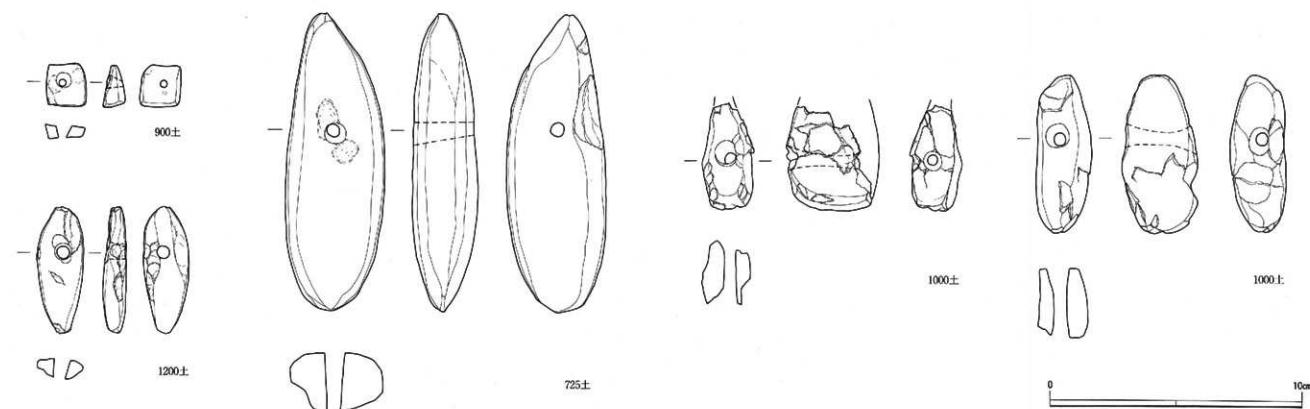
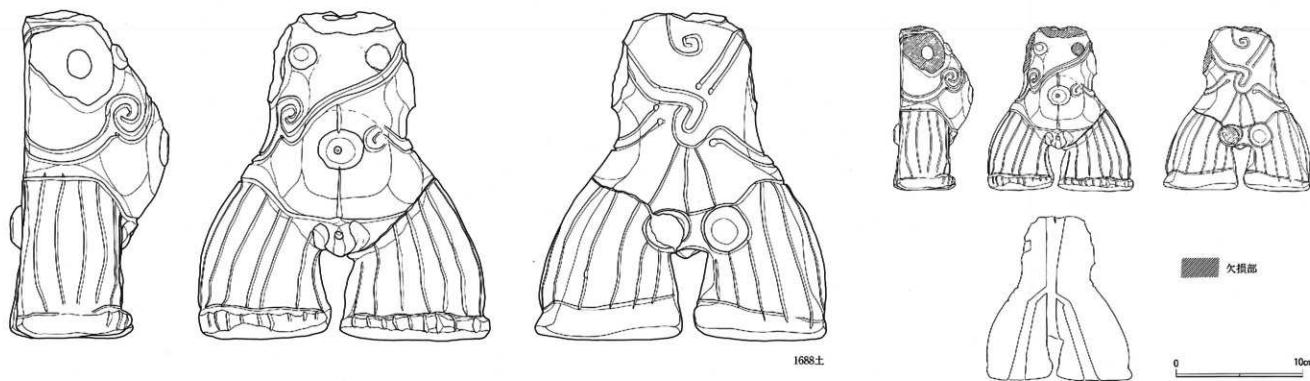
標高896.0m付近から南東コーナーにかけて黒（褐）色土層の堆積が厚く、遺物の遺存状態が良好である。水田造成時に高位の地山を削り、その上で低位が埋められたためである。南東コーナーでは約1mの埋土が確認された。縄文時代後期の敷石住居址（第1～4号住居址）や列石・配石などが良好な状態で検出されたのも、この埋土に覆われていたからである。

ここでは、調査区南東コーナー付近の黒（褐）色土層から検出された遺構と遺物について簡単に記述する。黒色土層の堆積が厚く、遺物の遺存状態が良好であるにも関わらず、後期の住居址（敷石住居址）は検出されていない。本遺跡に関わらず、後期の住居址は総じて地山への掘り込みが浅いが、埋設土器・配石・焼土塗の存在からみて、すべて削平されたとは考えられない。

検出された遺構は住居址を除き、石棺墓1基（第600号土坑）、埋設土器2基（第9・12号）、配石多数（エ-32、オ-33ほか）、焼土塗6箇所（第1～6号）、黒曜石集積1箇所である。遺物は土器と石器である。



第43図 調査区東側黒（緑）色土層面検出の遺構（1/80）



第44図 第725・900・1000・1200・1688号土坑出土遺物 (2/3)

以上の遺構と遺物は、住居址と多くの土坑（墓坑・柱穴など）の上層にある。配石と土器・石器の中には、住居址や土坑に伴うものが相当数あると考えられる。ただし、石器について言えば、全土坑からの石器の出土は考えにくく、第1号焼土址の周辺に石器が集中することは何らかの面があったことを示唆する。なお、図版中の小さな数字は石器である。器種は表2を参照されたい。

遺構と遺物が出土した地点は、縄文時代中期の住居址の内帯であり、後期の住居址の内帯でもある可能性が高い。配石や焼土址などの存在は、検出された面が縄文時代中期または後期の地表面であることを窺わせる。居住域の内帯の空間がどのように利用されていたのかを考える上で良好な資料である。

## 第2節 平安時代

### 1. 住居址

第14号住居址（第45図）

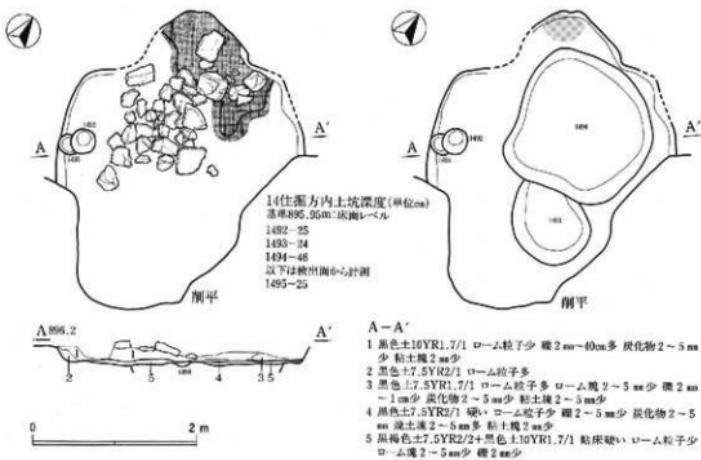
遺構 イー-21グリッドほかに位置する。調査区の南側に位置し、黒色土層の残りが良い地点に構築される。遺構検出面は暗褐色土層である。

本址はカマドに伴う粘土が検出され所在が判明した住居址である。その時点で東側と南側の一部を削平している。平面形は隅丸方形と考えられる。平面規模は東西長で3mを測る。カマドがある壁に直交する軸方向は、N-38°-Wを示す。

住居址の掘り込み（床面）はローム漸移層にある。残存する壁の高さは数cm～10cmを測る。

床面はほぼ平らに貼床（5層）されている。カマドの周囲と中央に硬い面が確認された。床面下から第1493号土坑と第1494号土坑が検出された。住居址内での位置と形状からみて、いわゆる床下土坑の可能性がある。ただし、覆土は黒褐色土で、埋め戻した土とは言い難いものである。

住居址内から検出された柱穴状の土坑は、第1492号土坑と第1495号土坑の2基である。位置からみて本址



第45図 第14号住居址（1/60）

に伴う柱穴の可能性があるが、対する壁から対になる土坑は検出されていない。

カマドは北壁の中央にあり、北へ約70cm張り出す。東西方向にカマドの構築材である粘土が遺存していた。その厚さは約10cmである。粘土に覆われる礫の中には被焼したものがあり、カマドの構築材は礫と粘土と考えられる。焼土は張り出しの先端に残存する。厚さは約5cmである。

住居址中央から北には、拳大から人頭大の礫が遺存していた。いずれも床面上5~20cmで、壁に向かいレベルが高くなる。住居址が埋まりかけた段階に遺棄されたものと判断される。

住居址の覆土はA-A'に示したとおり分層された。

遺物 出土した土器の内訳は、土師器壺1個体分（以下、個体分は省略）、須恵器壺1、土師器小型壺6、土師器甕2（1は「コ」の字甕）、須恵器瓶1である。

時期 9世紀後半の住居址と考えられる。

#### 第15号住居址（第46図）

遺構 アー24・25グリッドほかに位置する。調査区の南側に位置し、黒色土層の残りが良い地点に構築される。住居址の南半分は調査区域外にある。遺構検出面は黒褐色土層から暗褐色土層である。

平面形は隅丸方形と考えられる。平面規模は東西長で2.8mを測る。カマドがある壁に直交する軸方向は、N-69°-Eを示す。

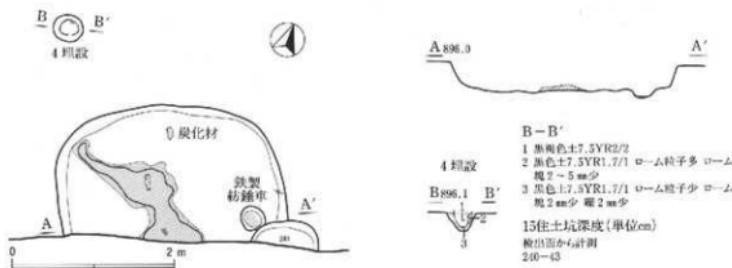
住居址はローム層を掘り込んでいる。残存する壁の高さは20~30cmを測る。

床面には地山礫が露出している。その状態からみて貼床されていた可能性があるが、貼床層は確認できない。住居址の中央から北西にかけて、床面上と床面上2~10cmに、焼土と炭化材が遺存していた。焼土の厚さは2~5cmを測る。焼土の一部は床面上にあるが、壁に向かい床面からのレベルが高くなる。黒色土の流入が始まり窪地化した住居址内で火が焚かれたものと考えられる。また、焼土の上から、拳大から40cm大の礫が多量に検出された。窪地化した住居址内に遺棄されたものと判断される。

カマドは東壁にあったと考えられる。東壁下の小穴底面が数cm焼けた跡を、カマドに伴う焼土（火床）と判断した。しかし、カマドの構築材となる粘土は残存していない。

遺物 出土した土器の内訳は、黒色土器壺2、軟質須恵器壺1、土師器小型甕3、土師器甕1である。カマドの北脇から鉄製の紡錘車が出土した。レベルは床面上15cmである。

時期 9世紀後半の住居址と考えられる。



第46図 第15号住居址、第4号埋設土器 (1/60)

### 第16号住居址（第47図）

遺構 オ・カ-26・27グリッドに位置する。調査区の南東に位置し、黒色土の残りが良い地点に構築される。第3号埋設土器と重複し、土器を切っている。

平面形は方形で、平面規模は東西長3.8m、南北長3.6mを測る。カマドがある壁に直交する軸方向は、N-2°-Wを示す。

住居址はローム層を掘り込んでいる。残存する壁の高さは10~20cmを測る。

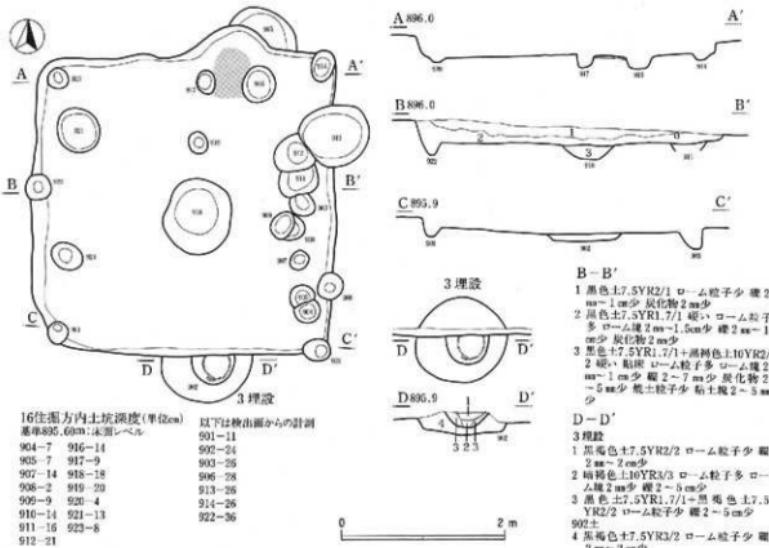
床面はほぼ平らであるが、地山に含まれる小礫が所々に露出している。第918・921・923号土坑は貼床された土坑で、床下土坑と考える。この土坑の東には、南北に連なる小土坑がある。住居址外に類似する規模の土坑がないため、本址に伴う土坑と考えられる。現場ではそれぞれに番号を付したが、南北に細長い床下土坑と捉えるべきかもしれない。

柱穴は東西の壁にかかる土坑と考えられる。覆土は黒色土で黒みが強い。南西コーナーから時計まわりに列挙すると、P 1：第901号土坑、P 2：第922号土坑、P 3：第920号土坑、P 4：第914号土坑、P 5：第906号土坑、P 6：第903号土坑である。

カマドは北壁の東寄りにあり、北へ約40cm張り出す。カマドから礫は検出されず、粘土だけが遺存していた。粘土の厚さは10~15cmである。焼土の厚さは約5cmを測る。焼土を挟み検出された第916号土坑と第917号土坑はカマドの補石を据えるための掘方と考えられる。

住居址の覆土はB-B'に示したとおり分層された。

遺物 出土した土器の内訳は、黒色土器壺2、軟質須恵器壺1、土師器甕4（1は底部に木葉痕あり）、須



第47図 第16号住居址・第3号埋設土器 (1/60)

恵器壺1である。

時期 9世紀後半の住居址と考えられる。

#### 第17号住居址（第48図）

遺構 ソ・タ-24・25グリッドほかに位置する。西側は第9号住居址と重複する。

本址はカマドの位置を変えて、つくり替えられた住居址である。平面形は方形で、平面規模は東西長4.6m、南北長4mを測る。カマドがある壁に直交する軸方向は、新しい住居址でN-59°-E、古い住居址でN-30°-Wを示す。

住居址はローム層を掘り込んでいる。残存する壁の高さは5~30cmを測る。

古い住居址の床面は東コーナーへ向かい傾斜する。全体的に硬い床面だが、カマドの周囲が特に硬い。古い住居址のカマドの南と北コーナーから、床下土坑が検出された。現場では土坑番号を付せず、床下土坑1~4としたため、この名称で報告する。新しい住居址では東コーナーから北コーナー（東壁沿い）にかけて、約10cmの貼床（7層）が検出された。貼床範囲は特に硬い。

柱穴は各壁のコーナーと、壁の中ほどに位置する土坑と考えられる。南コーナーから時計まわりに列挙すると、P1: 第250号土坑、P2: 第217号土坑、P3: 第209号土坑、P4: 第953号土坑、P5: 第195号土坑、P6: 第194号土坑、P7: 第199号土坑、P8: 第159号土坑、P9: 第187号土坑である。

カマドは2基検出された。新しいカマドは東壁の中央につくられる。焼土は厚さ約10cmを測る。焼土から北コーナーにかけて、板状礫を主体とする大小の礫が連なって検出された。礫に被然の痕跡があるもの、粘土が付着するものがあり、カマドに使われた礫と考えられる。古いカマドは北壁の中央につくられる。カマドのつくり替えに伴い取り壊されたとみるが、相当量の粘土が壁沿いに残存していた。粘土内から板状の礫と多量の土器が出土した。粘土下から焼土とカマドの掘方が検出された。焼土の厚さは数cmである。

住居址の覆土はA-A'に示したとおり分層された。4層は新しいカマドに関わる上とみている。

遺物 出土した土器の内訳は、土師器壺5、黒色土器壺5、須恵器壺3、土師器小型壺2、土師器中型壺1、土師器壺5、須恵器瓶1である。

時期 9世紀後半の住居址と考えられる。

#### 第18号住居址（第49図）

遺構 W-11・12グリッドほかに位置する。本址は第5号住居址内に構築されている。住居址内から小土坑が幾つか検出されているが、覆土からみて縄文時代の土坑と判断される。住居址の南半分は調査区域外にあり、中央に南北方向の擾乱が入る。

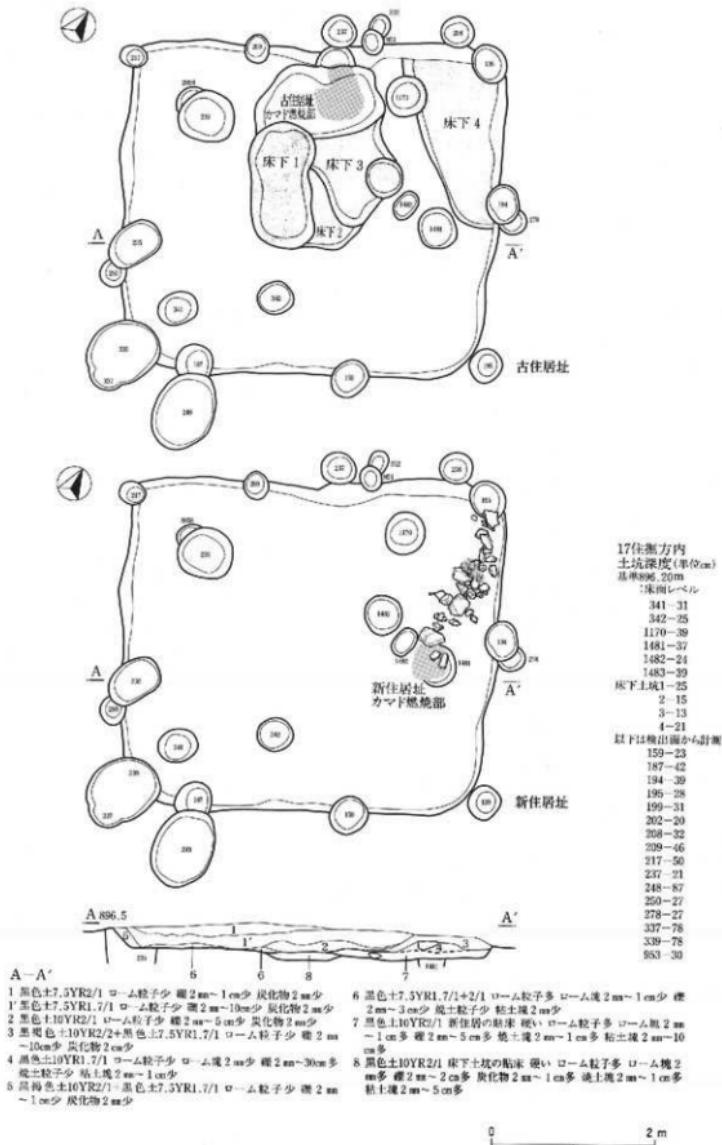
平面形は隅丸方形で、平面規模は東西長4mを測る。カマドがある壁に直交する軸方向は、N-5°-Wを示す。

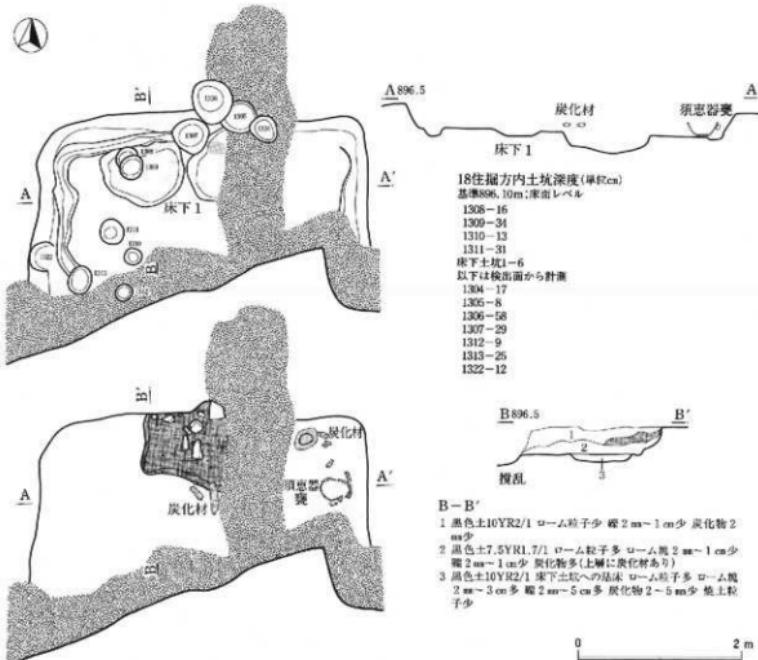
住居址はローム層を掘り込んでいる。残存する壁の高さは20~35cmを測る。壁下から断続する刷溝が検出されている。

床面の西側は地山礫の少ないローム層で、光沢のある硬い面となる。東側は地山礫を多量に含み荒れている。カマドの西脇に床下土坑が検出された。

本址に伴う柱穴とみられる土坑は検出されていない。

カマドは北壁のほぼ中央につくられ、1/2以上は搅乱で削除されている。構築材の粘土が床下土坑へ向かい流出している。粘土の厚さは10~15cmである。粘土の上面にある礫は、形状と出土レベルからみてカマドに伴う礫ではないと考える。焼土は掘方の北西に僅かに残存する。厚さは数cmである。





第49図 第18号住居址 (1/60)

東壁下の床面上直から須恵器甕が正位で出土した。胴部下半が残存する。割れ口からみて、意図的に割られたものと判断される。また、北東コーナーからカマドにかけて炭化材と焼土が検出された。レベルは床面上約15cmで、概ね1層と2層の境に位置している。住居址が15cmほど自然埋没、あるいは埋め戻された段階で、北東コーナーを中心に火が焚かれたと考えられる。須恵器甕の欠損部と炭化材・焼土の遺存レベルがほぼ同じであること、須恵器甕の位置と火が焚かれた範囲が重複することは、覆土中に面があったことを示唆している。

住居址の覆土はB-B'に示したとおり分層された。

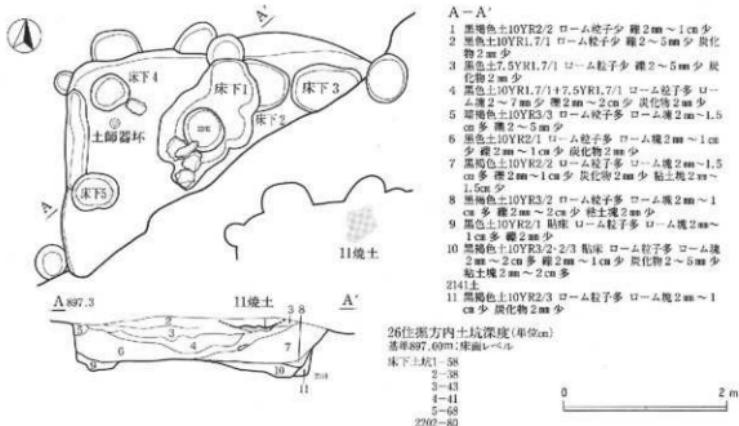
遺物 出土した土器の内訳は、黒色土器壺1、須恵器壺2、土師器小型甕1、土師器甕1、須恵器甕1、須恵器瓶1である。

時期 9世紀後半の住居址と考えられる。

#### 第26号住居址 (第50図)

遺構 ク・ケ-12、ケ-13グリッドに位置する。本址の覆土中に第11号焼土址がある。南側は第19号住居址と重複する。住居址は水田の筆境に当たる。東側から南側約1/2は、ローム層まで削平されている。

平面形は隅丸方形である。平面規模は東西長4mと考えられる。



第50図 第26号住居址・第11号焼土址 (1/60)

住居址はローム層を掘り込んでいる。残存する壁の高さは30~35cmを測る。西壁下から周溝が検出された。

床面は全体的に硬く、特に床下土坑の上が硬い。床下土坑は5基検出された。

柱穴と考えられる土坑は検出されていない。

カマドは検出されていない。他の住居址のカマドの位置からみて、西壁につくられていたと考えられる。

北西コーナー寄りの床面直上から、墨書のある黒色土器が逆位で出土した。出土状態からみて、意図的に伏せられたと考えられる。また、床下土坑1上の床面レベルから20cm大の甕が数個出土した。土器と何らかの関係があると思われる。

住居址の覆土はA-A'に示したとおり分層された。堆積状態と覆土の色調からみて自然埋没と考えられる。

第11号焼土址は住居址がある程度埋まった段階に、2・3層を掘り込んで火が焚かれた跡である。

遺物 出土した土器の内訳は、土師器坏1、黒色土器坏2（1は「入」の墨書きあり）、黒色土器高台付坏2、軟質須恵器坏1、土師器小型壺4（底部に木炭痕あり）、土師器壺2である。

時期 9世紀後半の住居址と考えられる。

## 2. 焼土址

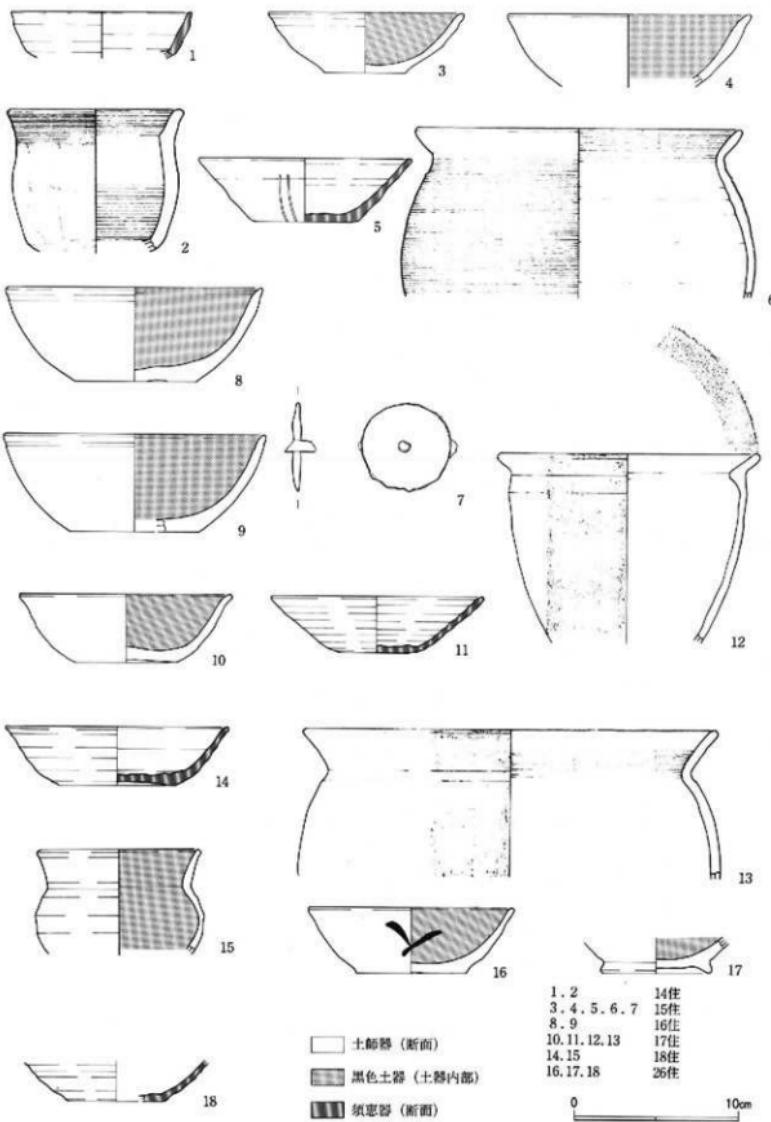
第11号焼土址 (第50図)

造構 キー13グリッドに位置する。第26号住居址の2・3層を掘り込んで火が焚かれている。

平面形は不整形で、中心付近の焼土の厚みは7cmである。床面からの焼土址検出面の高さは約45cmである。

遺物 焼土内から遺物は出土していない。

時期 9世紀後半以降の焼土址と考えられる。



第51図 第14・15・16・17・18・26号住居址出土遺物 (1/3)

## 第VI章 まとめ

大桜遺跡がある米沢地区北大塙は霧ヶ峰の南麓に位置する。霧ヶ峰山麓を北に背負う地形は、南北方向に主軸をもつ扇状地が東西に連なる袋状を呈する。扇状地の形成要因は、霧ヶ峰山塊の中腹にある湿原を源とする小河川による。近年刊行された当該地区的発掘調査報告書では、各扇状地に河川名を冠し、西から横河川扇状地、松沢川扇状地、藤原・前島川扇状地と呼称している。

それぞれの扇状地とその周辺には、縄文時代と平安時代を主な時代とする遺跡が数多く知られている。近年の発掘調査および遺物分布調査によると、扇状地の中央部から先端部には面積が広く継続性の高い拠点集落がつくられ、扇状地の頂部や扇状地に臨む山裾のテラスなどには面積が狭く存続期間も短い周辺集落と遺物散布地があり、これらの遺跡が有機的に結びつき扇状地単位で遺跡群が形成されたと考えられている。

大桜遺跡は横河川扇状地に立地する遺跡である。扇状地の規模と遺物の散布範囲から当扇状地の拠点集落であると古くから言われてきた。特に縄文時代では、黒曜石製の石器や剥片・碎片が多量に採集されることから、黒曜石の流通拠点となる一集落であると、遺跡の性格にまで言及してきた。本調査と試掘調査の結果、縄文時代と平安時代の多くの遺構と遺物が検出された(註1)。その内容は、当扇状地の拠点集落であることを強く示唆するものであった。先学の指摘が考古学的調査によって裏付けられたことは意義深いことである。

現在、遺跡の指定範囲は東を市道、西を横河川、南を集落によって区切っている。かつて行われた市道改良工事の際に多量の土器や石器が出土したとのことであり、本調査では横河川に臨む肩部から縄文時代の堅穴住居が検出された。このことから遺跡が東西に広がっていたことは明白である。また、試掘調査の成果からみて、遺跡指定範囲外の集落下にも遺構が埋もれている可能性があるように思われる。遺跡の全体面積は約15,000m<sup>2</sup>であるが、実態は20,000m<sup>2</sup>を超える遺跡であると推測される。

本調査の計画段階において、発掘調査区の全域に遺構は及ぶが、密度はそれ程高くないと予測していた。遺構がほとんど切り合うことなく確認された試掘調査の結果と、発掘調査地点が遺跡の北端に当たることからの判断であった。しかし、予測に反して、調査区全域から縄文時代と平安時代の遺構が密集して検出された結果となった。

本報告書ではすべての遺構を図示することができた。しかし、遺物の図化はほとんど成されておらず、縄文時代の遺物の一部と平安時代の上器しか図示できていない。遺構と併せて活用できるように、1日も早く遺物を資料化し提示したいと考えている。遺構の提示に主眼をおいた報告書であるため、縄文時代の集落について簡単に記しまとめとしたい。

大桜遺跡の縄文集落は環状集落または馬蹄形集落と言える形を示している。遺構の希薄な空間の外縁に墓坑が集中し、その周りに住居址がめぐるためである(註2)。この姿は集落形成当初から環状または馬蹄形を念頭におき、各遺構が地点を決めて構築されたと考えられる一方、各遺構が偶然同じ場所に繰り返して構築された結果であるとも考えられる。

ここでは、環状または馬蹄形を呈する大桜遺跡の縄文集落を、本調査と試掘調査で得られた遺構と遺物、遺跡が立地する地形などから概観し、その実体に触れてみる。まず、中期住居址と後期住居址の位置関係、中期と後期の墓坑の位置関係と時期をおさえ、両時期の住居址と墓坑の時空間の関係を明らかにすることから始める。

住居址を中期と後期に区分けし、その分布を概観すると両時期ともに弧状に配列し、中期住居址の内帯には後期住居址が分布することが判る。また、中期住居址の内帯からは墓坑とみられる梢円形の土坑が80基ほど検出され墓域を形成している。墓坑の分布も住居址と同じく弧状を呈している。しかし、墓坑の時期が細別されていないために、両時期の住居址との位置関係が判然としない。各墓坑の時期を特定する必要があるが、墓坑に限らず土坑の時期を特定することは、伴出遺物が少なく困難な場合が多い。

当遺跡では時期が特定または推測される遺物・葬法・施設が少ないながら確認されている。時期が推測される遺物は、副葬品と考えられる6点の垂飾である。先史的研究では縄文時代遺跡から出土する硬毛系の垂飾の場合、概ね5cm以上を「大珠」と呼称し、長野県内では中期後半から終末の遺構に伴うとする指摘がある。また、琥珀製の垂飾も硬毛系と同じ時期に多出するとの指摘がある。当遺跡で垂飾を作出した墓坑は住居址との切り合いも考慮し、中期後半から終末と推測している。第1190号土坑と第1220号土坑は「堺葬葬」のある墓坑である。この葬法は後期初頭から中葉に盛行すると考えられている。当遺跡では伴出した土器から壠之内2式の終末と考えられる。第600号土坑は石棺墓と考える墓坑で、この埋葬施設は後期中葉以降に盛行するとされている。当遺跡では伴出した土器からみて加賀利B1式の石棺墓と考えられる。

以上、少ないながら墓坑の時期が特定または推測された。これに墓坑との切り合い関係から推測される住居址の構築時期を重ねると、概ね、中期と推測される墓坑の上に後期住居址が構築され、後期の墓坑は後期住居址の内帯にあると言える。つまり、両時期の居住域と墓域は遺構の希薄な空間は共有するが、居住域と墓域のそれぞれの「環」は若干ずれていると考えられる(図3)。

遺構の希薄な空間は黒色土層からローム層まで人力で掘り下げている。遺物の出土は皆無に等しく、土器捨て場として利用された形跡は窺えないため、ここでは広場と考えておく。広場と目される、遺構の希薄な空間は、住居址の構築地点より一段低い窪みを呈す。第2回の木掘範囲の等高線から読みとれるように、この窪みは平坦面を東西に2分する浅い谷の基点に当たっている。

自然地形上の窪みを広場とし、外帯に墓域と居住域がつくられる遺跡は市内にも散見されるが、中期から後期に亘り、その状態が保たれていることは注目される。しかし、墓域と居住域を形成する個々の遺構に着目すると、遺構の種類や時期によって共通点と相違点が見受けられる。墓坑は長軸方向に着目する。両時期をとおし等高線に直交、または平行するものが多く規則性が窺える。住居址では出入口部の方向に着目する。中期住居址ではその方向に規則性はないが、後期住居址で出入口部が特定されたものは一様に広場の中心を向いている。以上の事象には、遺構を構築する人々の考え方(意図)が強く現れていると思われる。この中で、後期の出入口部(主軸)が等高線に対して直交し低い方向を向くことは注目される。このことは市内をはじめ、県内外の多くの後期遺跡でみられる事象である。当遺跡の場合、何に起因するものなのか、他遺跡の事例を踏まえて考察する必要がある。

本調査と試掘調査の成果から、未掘範囲を含めた大槻遺跡の縄文集落の形を推測してみたい。対象とする範囲は、10トレンチから18トレンチを入れた高い平坦面とする。これは縄文時代の住居址が高い平坦面に限り確認されているためである。低い平坦面に限無くトレンチが入っているとは言い難いが、縄文時代の居住域および墓域は高い平坦面にあったと現時点では判断される。

各トレンチの遺構と遺物の確認状況は以下のとおりである。縄文時代の住居址が確認されたトレンチは5本である。10トレンチは2軒、12トレンチは1軒で、15トレンチでは1軒で、17トレンチでは1軒、20トレンチでは1軒と推測される。試掘調査の性格上、確認された多くの住居址の時期は判然としないが、20トレンチの住居址から曾利Ⅲ式以降の土器が出土している。そして各トレンチから出土した土器の約半数は中期

後半以降のものであった。したがって、本査範囲には調査区で検出された時期の住居址が主体的に存在すると考えておきたい。住居址が確認されないトレンチは4本である。11トレンチでは形状から墓坑と考えられる土坑が幾つか確認され、14トレンチは数基の小土坑が確認された。遺構が確認されないものは13・18・19トレンチである（註4）。13トレンチは他のトレンチに比べて遺構検出面が深いことが確認された。

トレンチから得られた情報は、本調査の成果と矛盾するものではなく、地形ともうまく合致している。10・12・20トレンチの住居址は第5号住居址や第32号住居址から続くものであり、15・17トレンチの住居址は第11号住居址や第12号住居址から続くものと思われる。11トレンチの土坑は墓域の続きと考えられる。14トレンチの小土坑はいわゆる柱穴群と呼ばれるものに相当すると考えられ、13トレンチの状況からみると居住域の内巣と考えるのが妥当である。13トレンチは広場の一部、または集落への出入口部であることをも想像させる。

中期から後期にかけて、遺跡を取り巻く環境や社会に様々な変化があったものと推測されるが、当遺跡の縄文集落は約1000年間もの長期に亘り、自然の浅い谷を基軸に集落がつくれられてきたと考えられる。その外帯には墓域と居住域が形成される。それぞれの区域における個々の遺構の配置などは、構築する人々の何らかの考えに基づき決められていたと思われる。それらの遺構の集積として、集落は環状または馬蹄形を呈するものと考える。

#### （註1）

試掘調査で確認された平安時代の住居址は3軒で、時期は9世紀後半と考えられる。したがって、当遺跡の9世紀後半の住居址は9軒確認されたこととなる。

#### （註2）

遺構の希薄な空間は約150m<sup>2</sup>が調査された。検出された遺構は、唯一、第4号埋設土器である。また土器片の出土は約50点で、すべて小破片である。

#### （註3）

調査区の北コーナー（第25号住居址の北西）から、墓坑とみられる上坑や柱痕をもつ規模の大きな土坑が検出されており、本査範囲（北方向）に同様の遺構が続くことも考えられる。道路を境に遺構が突然途切れる事はないだろうが、調査区の北コーナー付近で平坦面の幅が急に狭まるため、この北側に何軒もの住居がつくられたいたとは考えにくい。

#### （註4）

18~20トレンチはは場整備事業の表土剥ぎに際し、表土の厚さを見るために立ち合ったもので、21トレンチは進入路の新設工事に際し立ち会っている。18・19トレンチは遺構検出面まで下げていないため遺構の有無は不明である。

表1 土坑深度表1

土坑番号	深度cm	上坑番号	深度cm	土坑番号	深度cm	上坑番号	深度cm	土坑番号	深度cm	上坑番号	深度cm	土坑番号	深度cm
19	31	108	44	157	47	246	19	362	20	480	43	589	13
21	46	109	18	158	40	247	43	363	20	482	23	590	20
35	18	110	15	160	27	249	35	369	32	483	16	591	14
39	18	111	40	161	13	258	32	370	36	485	52	592	35
40	16	112	56	162	14	263	40	371	35	486	21	593	14
41	29	113	15	163	26	269	37	372	32	487	50	595	17
42	30	114	22	164	36	277	13	373	27	488	11	596	33
43	15	115	12	165	31	279	24	382	12	489	35	597	31
44	10	116	47	166	29	280	25	383	41	490	57	598	21
45	26	117	11	167	20	281	30	384	33	491	39	599	31
46	13	118	17	168	32	282	12	386	20	492	21	600	20
47	23	119	43	169	24	283	29	387	19	498	33	601	14
48	15	120	45	170	70	284	19	388	24	499	52	602	22
49	27	121	10	171	25	285	9	389	19	500	38	603	23
50	47	125	17	172	19	286	19	390	22	509	11	604	21
51	39	126	23	173	33	287	21	391	15	511	75	605	28
52	30	127	105	174	36	288	52	392	5	512	25	606	32
53	26	128	26	175	18	289	22	398	40	513	7	607	14
54	17	129	28	176	15	290	23	399	26	514	29	608	28
55	31	130	25	177	50	293	14	400	23	515	20	609	16
56	42	131	29	178	19	296	21	410	11	516	9	610	15
57	16	132	24	179	13	313	13	417	25	517	64	611	24
58	26	133	14	180	57	314	32	427	18	518	32	612	17
59	30	134	14	181	66	315	17	428	36	519	13	613	24
60	31	135	30	186	9	316	12	429	23	520	15	614	19
61	13	136	17	188	28	318	22	441	18	521	20	615	10
62	45	137	26	189	28	319	33	454	7	522	25	621	28
64	11	138	17	190	16	320	15	455	15	523	29	622	32
65	34	139	21	191	13	321	24	457	10	525	10	623	22
70	29	141	15	192	12	322	36	458	8	526	40	624	17
74	8	142	20	193	17	323	19	459	20	527	55	625	8
75	15	143	19	200	22	325	29	460	52	528	36	626	47
87	90	144	37	201	28	326	14	461	30	533	22	627	29
88	48	145	20	203	21	328	6	462	14	577	14	628	13
89	11	146	19	204	16	329	24	463	23	578	18	630	15
90	90	147	49	205	26	332	15	464	26	579	21	631	31
91	17	148	15	206	27	333	13	465	6	580	22	632	76
92	17	149	15	207	51	335	19	466	22	581	19	633	17
93	13	150	17	219	8	338	28	467	47	582	34	634	21
94	23	151	26	220	34	345	27	468	8	583	8	635	18
95	11	152	21	221	27	351	19	471	28	584	21	636	22
96	23	153	15	233	7	357	30	476	52	585	14	637	21
97	20	154	12	241	28	358	48	477	54	586	16	638	75
106	96	155	18	244	25	360	48	478	46	587	18	639	20
107	31	156	62	245	16	361	20	479	51	588	16	640	16

表1 土坑深度表2

土坑番号	深度单位cm														
641	27	689	26	784	46	851	43	932	64	1006	18	1055	21		
642	59	690	16	786	28	852	62	933	22	1007	41	1056	7		
643	12	691	29	787	22	853	22	934	30	1009	51	1057	13		
644	18	692	33	788	13	854	48	954	29	1010	18	1058	15		
645	36	693	20	789	7	855	24	955	18	1011	18	1059	19		
646	28	694	20	790	31	856	30	956	11	1012	23	1060	50		
647	37	695	46	791	37	857	38	957	19	1013	36	1061	26		
648	42	696	40	792	16	858	21	965	9	1014	33	1062	14		
649	35	697	60	793	34	859	50	969	16	1016	29	1063	41		
650	17	698	71	794	15	860	26	970	70	1017	30	1064	25		
651	23	699	13	795	8	863	31	971	29	1018	10	1065	28		
652	15	700	66	796	9	866	72	972	18	1019	16	1066	20		
653	68	701	8	797	8	867	41	973	30	1020	12	1067	65		
654	28	702	25	798	20	868	32	974	29	1021	18	1068	39		
655	19	703	26	799	18	877	62	975	39	1022	8	1069	35		
656	21	704	25	800	16	878	26	976	39	1023	70	1070	22		
657	11	705	17	802	72	879	24	977	14	1024	75	1071	12		
658	25	706	32	803	54	880	26	978	37	1025	34	1072	48		
659	30	707	14	804	49	881	11	979	20	1026	11	1074	51		
660	39	708	51	805	20	882	15	980	35	1027	46	1075	41		
661	13	709	28	806	25	883	12	981	26	1028	28	1076	34		
662	35	710	22	807	30	884	68	982	40	1029	14	1077	37		
663	23	711	46	809	50	885	19	983	18	1030	11	1078	60		
664	30	712	25	810	18	886	2	984	8	1031	19	1084	35		
665	31	713	20	811	15	887	23	985	35	1032	19	1085	18		
666	12	714	35	812	26	888	10	986	27	1033	8	1086	29		
667	18	715	47	813	29	889	10	987	72	1034	19	1088	78		
668	14	716	12	814	23	890	19	988	33	1035	9	1089	21		
669	12	717	19	815	15	891	33	989	21	1037	22	1090	42		
670	18	718	47	816	27	892	26	990	15	1038	13	1091	23		
671	11	719	20	817	9	893	25	991	33	1039	16	1092	45		
672	20	720	30	818	12	895	14	992	18	1040	6	1093	19		
673	10	756	18	819	11	896	8	993	34	1041	34	1094	20		
674	15	757	18	820	20	897	5	994	25	1042	11	1095	38		
675	21	758	56	821	22	898	6	995	35	1043	8	1096	18		
679	31	759	29	822	41	899	18	996	27	1044	70	1097	34		
680	24	760	41	823	55	900	25	997	15	1045	7	1098	13		
681	18	761	33	824	47	924	54	998	25	1046	11	1099	10		
682	47	763	58	825	14	925	42	999	13	1047	39	1100	21		
683	44	764	51	827	31	926	15	1000	27	1048	35	1101	27		
684	18	765	66	828	27	927	31	1001	31	1050	22	1102	17		
685	24	766	62	838	33	928	28	1002	37	1051	15	1103	35		
686	38	781	46	841	15	929	36	1003	29	1052	37	1104	24		
687	31	782	17	842	15	930	37	1004	20	1053	37	1105	12		
688	11	783	7	850	28	931	28	1005	32	1054	25	1110	15		

表1 土坑深度表3

土 坑 番 号	深 度 单 位.cm												
1112	17	1159	40	1211	20	1264	36	1584	23	1651	37	1701	19
1113	22	1160	28	1213	12	1265	24	1585	25	1652	20	1702	54
1114	18	1161	18	1214	12	1266	32	1586	29	1653	27	1703	40
1115	24	1162	20	1215	43	1267	11	1588	50	1654	60	1704	16
1116	21	1163	12	1216	6	1268	11	1589	26	1655	10	1705	30
1117	8	1165	22	1218	6	1269	25	1593	94	1656	19	1706	21
1118	18	1166	34	1219	16	1270	39	1594	71	1657	10	1707	17
1119	17	1167	28	1221	11	1278	47	1595	47	1658	16	1708	13
1120	18	1168	19	1222	35	1302	24	1596	57	1659	15	1709	不
1123	25	1169	13	1223	77	1303	33	1597	22	1660	17	1710	80
1124	37	1171	95	1224	72	1372	37	1598	38	1664	10	1711	84
1125	44	1172	18	1225	29	1379	34	1599	27	1665	13	1712	78
1126	22	1173	14	1229	21	1381	16	1600	72	1667	36	1713	66
1127	42	1174	21	1230	20	1431	72	1601	19	1668	21	1714	28
1128	40	1175	72	1231	32	1445	36	1602	8	1670	22	1715	30
1129	24	1176	12	1232	35	1447	10	1603	70	1671	84	1716	20
1130	28	1177	14	1234	48	1459	6	1604	12	1672	38	1718	11
1131	23	1178	30	1235	17	1460	8	1605	58	1673	10	1719	15
1132	27	1179	23	1236	18	1461	52	1606	30	1674	47	1720	18
1133	21	1180	20	1237	17	1475	17	1607	22	1675	37	1721	14
1134	30	1184	46	1238	44	1484	18	1608	4	1676	30	1722	16
1135	42	1185	10	1239	19	1485	18	1609	3	1677	18	1723	16
1136	28	1186	74	1240	42	1486	24	1612	25	1678	19	1724	12
1137	19	1187	27	1241	10	1487	11	1613	31	1679	12	1725	4
1138	35	1188	48	1242	22	1488	21	1614	42	1680	12	1726	11
1139	53	1189	40	1243	34	1489	9	1615	25	1681	28	1727	28
1140	32	1190	11	1244	26	1496	41	1616	16	1682	25	1728	21
1141	28	1191	65	1245	12	1497	36	1617	12	1683	18	1730	64
1142	22	1192	30	1246	39	1498	19	1618	6	1684	14	1734	11
1143	55	1193	57	1247	26	1499	16	1619	35	1685	7	1739	24
1144	30	1194	49	1248	12	1501	7	1620	10	1686	35	1740	15
1145	106	1195	4	1249	11	1504	69	1622	14	1687	33	1742	109
1146	20	1196	22	1250	23	1505	70	1623	2	1688	37	1743	111
1147	14	1197	40	1251	27	1506	61	1624	16	1689	19	1744	36
1148	17	1198	55	1252	37	1530	40	1625	12	1690	9	1745	17
1149	26	1201	22	1253	14	1539	17	1626	21	1691	31	1747	28
1150	17	1202	24	1254	10	1563	18	1627	21	1692	34	1748	10
1151	18	1203	55	1255	27	1574	20	1628	28	1693	23	1749	20
1152	37	1204	18	1256	25	1575	18	1629	15	1694	9	1751	36
1153	31	1205	42	1257	25	1578	11	1637	25	1695	20	1752	15
1154	18	1206	14	1259	27	1579	24	1638	8	1696	57	1753	47
1155	25	1207	47	1260	33	1580	12	1640	92	1697	21	1754	24
1156	40	1208	24	1261	21	1581	19	1645	12	1698	43	1758	5
1157	25	1209	60	1262	19	1582	50	1646	9	1699	58	1759	22
1158	36	1210	60	1263	15	1583	23	1650	23	1700	49	1760	24

表1 土坑深度表4

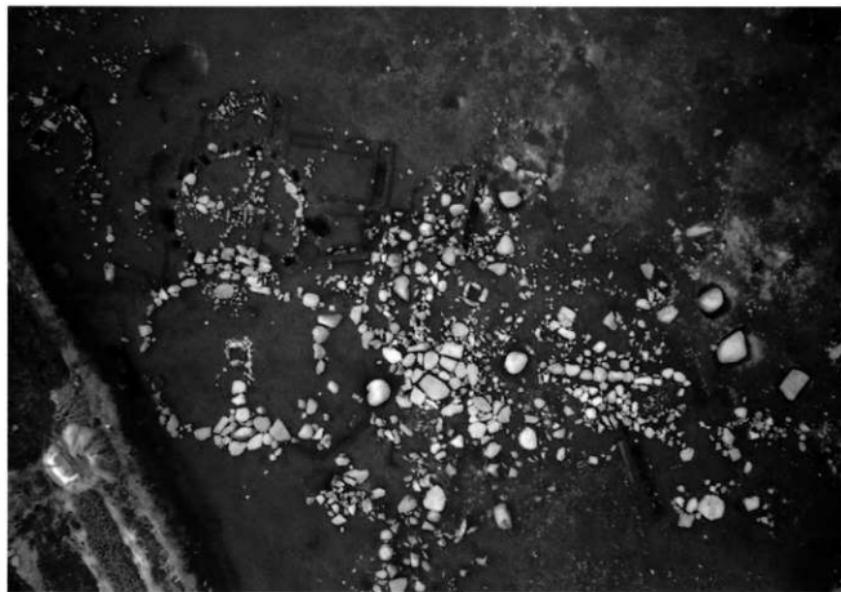
上坑 番号	深 度 单 位 cm	上坑 番号	深 度 单 位 cm	土坑 番号	深 度 单 位 cm	上坑 番号	深 度 单 位 cm	上坑 番号	深 度 单 位 cm	土坑 番号	深 度 单 位 cm	土坑 番号	深 度 单 位 cm
1761	30	1834	55	1880	16	1928	17	1973	101	2035	40	2136	18
1764	32	1835	18	1881	22	1929	24	1974	67	2036	20	2150	54
1765	11	1836	19	1882	30	1930	16	1975	27	2037	47	2151	18
1767	34	1837	39	1883	16	1931	13	1976	11	2038	18	2153	34
1770	20	1838	29	1884	30	1932	16	1977	31	2040	10	2154	31
1773	22	1839	60	1885	24	1933	12	1978	34	2041	16	2155	5
1774	22	1840	54	1886	40	1934	32	1979	47	2042	11	2160	20
1775	4	1841	19	1887	18	1935	34	1981	20	2043	13	2164	35
1776	11	1842	36	1888	41	1936	15	1982	15	2044	14	2167	45
1779	26	1843	43	1889	8	1937	23	1983	14	2045	16	2168	38
1780	28	1844	40	1890	19	1938	36	1984	28	2046	13	2171	15
1781	67	1845	20	1891	70	1939	27	1985	58	2047	46	2172	8
1782	42	1846	50	1892	46	1940	20	1986	36	2048	10	2173	16
1786	9	1847	21	1893	24	1941	22	1987	36	2049	21	2182	20
1787	26	1848	59	1894	28	1942	43	1988	28	2050	3	2183	33
1788	88	1849	42	1895	37	1943	29	1989	11	2051	32	2197	23
1796	11	1850	16	1896	66	1944	70	1990	15	2052	51	2198	11
1797	19	1851	29	1897	30	1945	36	1991	8	2057	12	2201	67
1798	16	1852	90	1898	35	1946	23	1992	11	2059	33	2215	36
1799	30	1854	21	1899	8	1947	16	1993	18	2061	28	2216	8
1800	10	1855	74	1900	38	1948	13	1995	16	2062	23	2222	35
1801	24	1856	27	1901	12	1949	18	1996	46	2063	16	2223	28
1802	52	1857	65	1902	90	1950	68	1997	5	2064	14	2227	17
1805	27	1858	36	1903	13	1951	38	1998	16	2065	25	2228	17
1806	34	1859	36	1904	14	1952	39	1999	15	2066	24	2230	14
1811	51	1860	18	1905	17	1953	30	2000	29	2067	18	2231	56
1812	15	1861	30	1906	20	1954	57	2002	22	2069	2	2233	35
1813	55	1862	23	1907	24	1955	27	2003	31	2070	47	2239	21
1814	27	1863	68	1908	21	1956	29	2004	32	2071	15	2246	38
1815	51	1864	23	1910	70	1957	26	2007	56	2072	14	2247	27
1816	32	1865	11	1912	81	1958	36	2011	42	2073	11	2248	17
1817	29	1866	51	1913	31	1959	24	2012	36	2081	86	2249	28
1818	43	1867	20	1914	19	1960	16	2013	18	2082	30	2262	3
1819	79	1868	12	1915	23	1961	18	2014	16	2083	13	2263	7
1820	22	1869	21	1916	21	1962	14	2015	25	2084	11	2264	25
1821	32	1870	79	1917	14	1963	15	2016	19	2085	13	2265	57
1822	16	1871	32	1918	35	1964	12	2017	13	2086	48	2268	28
1823	34	1872	20	1919	16	1965	30	2018	32	2093	31	2269	52
1824	32	1873	34	1920	16	1966	28	2019	21	2107	6	2271	26
1825	34	1874	3	1922	82	1967	18	2020	19	2108	24	2272	16
1826	26	1875	30	1923	9	1968	12	2022	66	2110	17	2273	19
1827	36	1876	53	1924	23	1969	27	2024	49	2112	4	2274	25
1829	18	1877	18	1925	18	1970	17	2025	53	2119	54	2275	22
1830	45	1878	25	1926	20	1971	34	2026	19	2125	8	2276	52
1832	26	1879	12	1927	18	1972	95	2034	29	2127	41		

表2 大桜遺跡調査区東側黒（櫛）色十層面出土の石器組成表

# 図 版



大桜遺跡 平成11年度調査区全景（上空から）



大桜遺跡石住居址群（上空から）

図版 2



第1号住居址（南東から）



第1号住居址炉址（南東から）



第2号住居址検山状態（東から）



第2号住居址（東から）



第2号住居址出入口部敷石（東から）



第2号住居址裏壁部積石（東から）



第2号住居址炉址（東から）



第2号住居址炉址半截（北から）



第3号住居址（北東から）



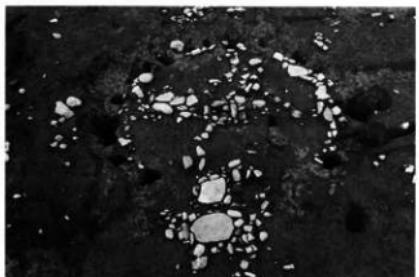
第3号住居址炉址と周囲の敷石（北東から）



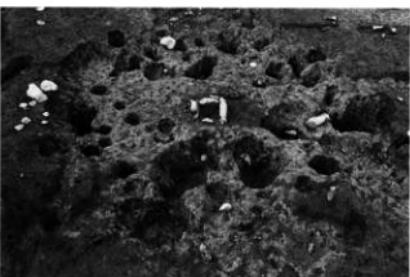
第3号住居址掘方（北東から）



第4号住居址上面棲候出状態（東から）



第4号住居址（東から）



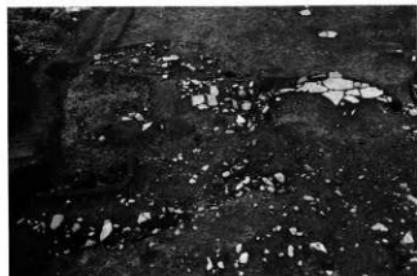
第4号住居址掘方（東から）



第4号住居址新旧の炉址（東から）



第4号住居址新炉址半裁（南から）



第5・6号住居址（東から）



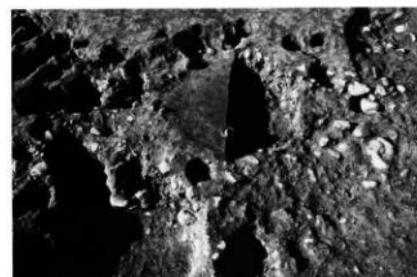
第5号住居址掘方（東から）



第6号住居址（東から）



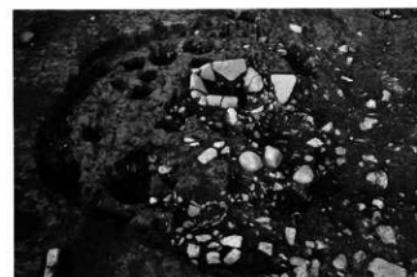
第6号住居址敷石（南東から）



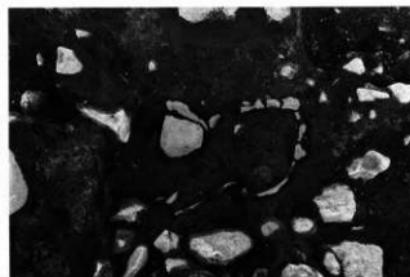
第6号住居址掘方（東から）



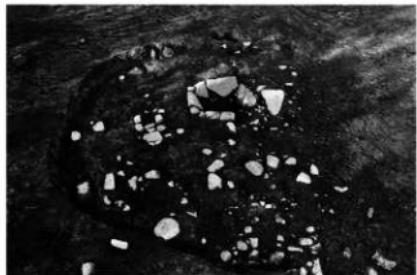
第6号住居址炉址半截（北から）



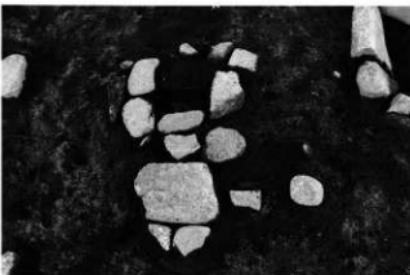
第7号住居址（南から）



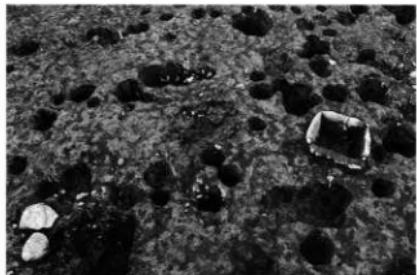
第7号住居址出入口部横位一括土器出土状態（南から）



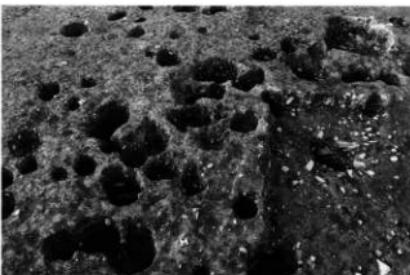
第7号住居址土器・礫出土状態（南から）



第7号住居址内配石（南から）



第8号住居址（南東から）



第9号住居址（南東から）



第10号住居址（南から）



第10号住居址内土偶出土状態（南から）



第11号住居址（南から）

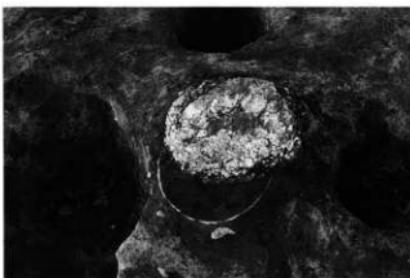


第12号住居址（南から）

図版 6



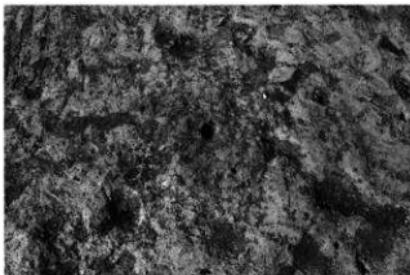
第13号住居址（南から）



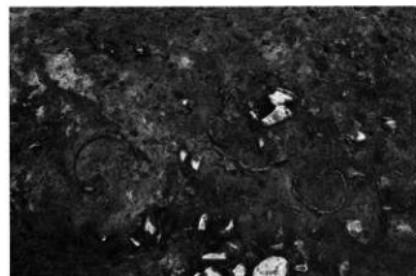
第13号住居址埋甕と蓋石（南から）



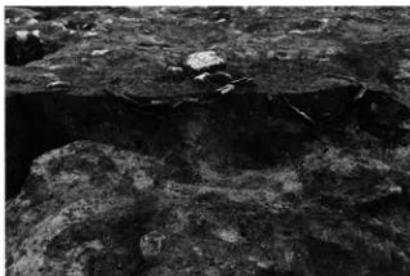
第13号住居址埋甕半截（南東から）



第19号住居址炉址（南東から）



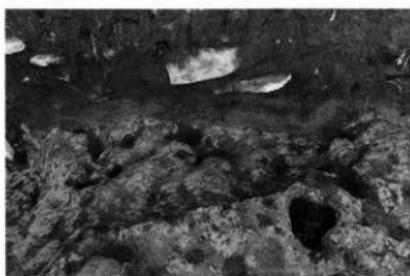
第20号住居址炉址（南東から）



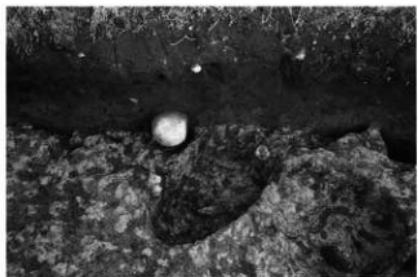
第20号住居址炉址（No.2・3）半截（西から）



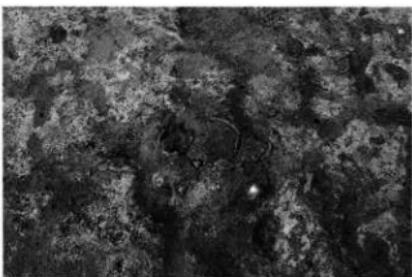
第20号住居址炉址（No.1）半截（南から）



第21号住居址（北西から）



第22号住居址（北から）



第23号住居址炉址（南東から）



第23号住居址炉址半截（南東から）



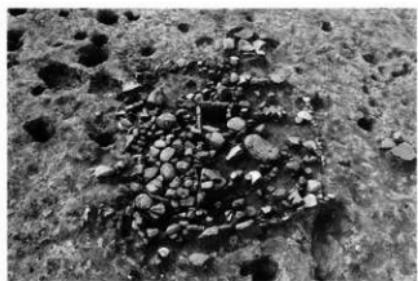
第24号住居址（北から）



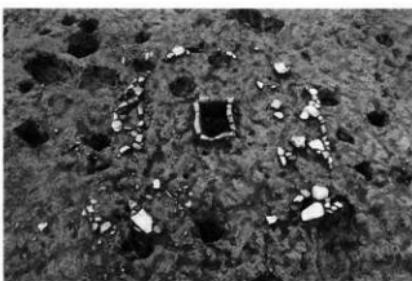
第24号住居址炉址（北から）



第24号住居址内一括土器出土状態（西から）



第25号住居址検出状態（南東から）



第25号住居址（南東から）

図版 8



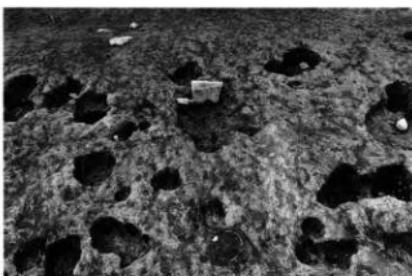
第25号住居址炉址（南東から）



第27号住居址（南東から）



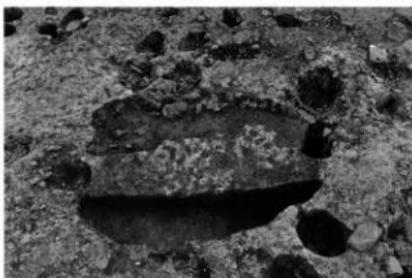
第27号住居址埋甕半截（南から）



第28号住居址（東から）



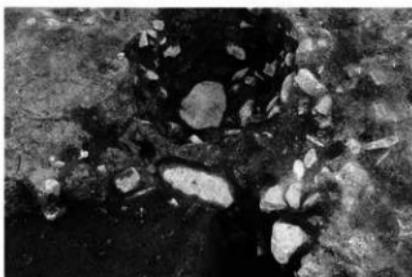
第28号住居址埋甕半截（南東から）



第29・30号住居址（北東から）



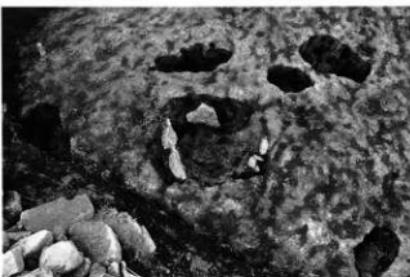
第29号住居址炉址（北東から）



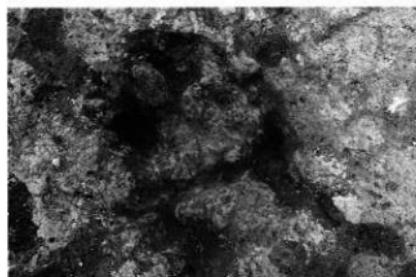
第30号住居址炉址（北東から）



第31号住居址（東から）



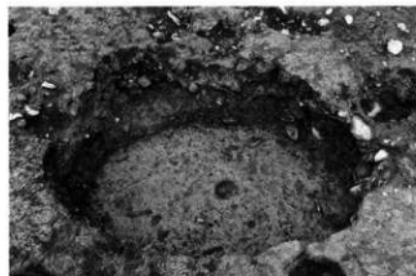
第32号住居址（南東から）



第33号住居址炉址（南から）



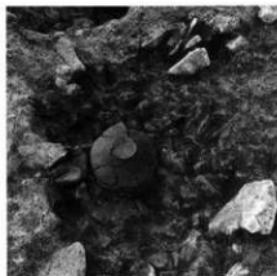
第34号住居址炉址換出状態（南東から）



第2148号土坑（北東から）



第2148号土坑（北東から）



第1190号土坑（東から）



第1190号土坑半截（北から）

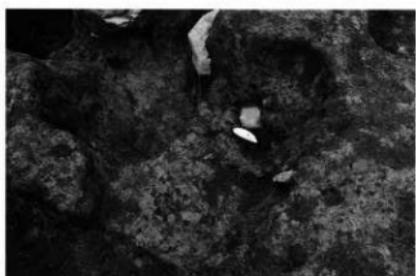
図版 10



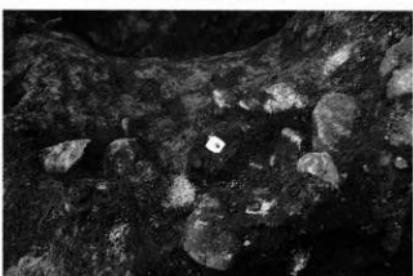
第728・730・1220号土坑のいすれかに伴う土器の出土状態（西から）



第1688号土坑上偶出土状態再現（東から）



第725号土坑曹長岩製垂飾出土状態（北東から）



第900号土坑硬玉製垂飾出土状態（北西から）



第1200号土坑硬玉製垂飾出土状態（南から）



第1000号土坑琥珀製垂飾出土状態（北東から）



第1100号土坑琥珀製垂飾出土状態（南から）



第600号土坑検出状態（北から）



第600号土坑検出状態（東から）



第600号土坑（北から）



第800号土坑



第1078・2271・2276号土坑に伴う配石（南から）



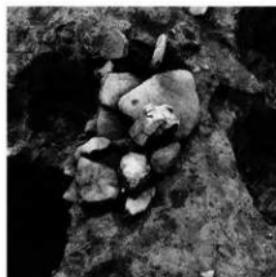
第1135号土坑上面配石（南から）



第1582号土坑縹出土状態（東から）



第1609号土坑縹出土状態（東から）



第2059号土坑上面配石（東から）

図版 12



第2号埋設土器半截（南から）



第3号埋設土器半截（北から）



第4号埋設土器半截（南から）



第6号埋設土器半截（北から）



第7号埋設土器半截（東から）



第9号埋設土器半截（北西から）



第11号埋設土器半截（南東から）



第12号埋設土器（南から）



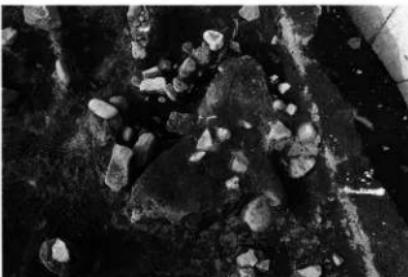
第14号埋設土器掘方半截（南東から）



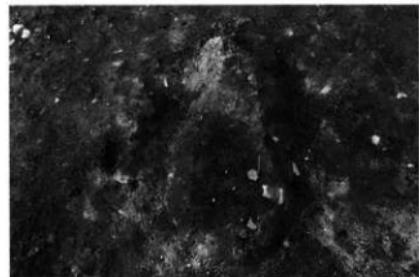
第1号焼土址（南東から）



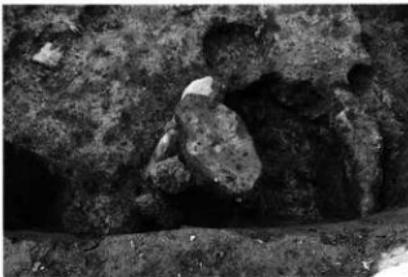
第2号焼土址（南から）



第3号焼土址（南から）



第4号焼土址（南東から）



第5号焼土址（南から）



第6号焼土址（南から）



列石検出状態（南から）

図版 14



列石（南から）



列石と列石に接する配石（東から）



オ-33グリッドの配石（南から）



イ-28・29グリッドの配石（南から）



タ-15グリッドの配石（南から）



チ-13グリッドの配石（南から）



調査区東側黒(緑)色上面遺物検出状態（南西から）



エ-32グリッドの配石と第12号埋設上器（南東から）



カ-31・32グリッドの石棒出土状態（南東から）



サ-31グリッドの黒曜石集積（南から）



第14号住居址発掘状態（南東から）



第14号住居址（南東から）



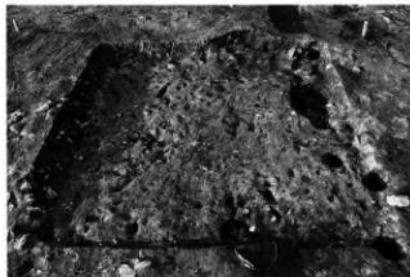
第15号住居址発出土状態（南から）



第15号住居址焼土・炭化材検出状態（南から）



第15号住居址鉄製紡車出土状態（南西から）



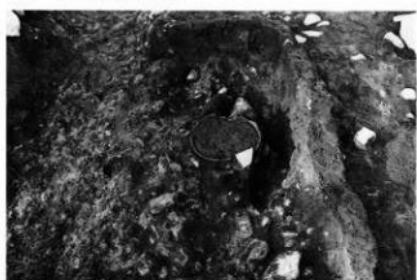
第16号住居址（南から）



第17号住居址（南東から）



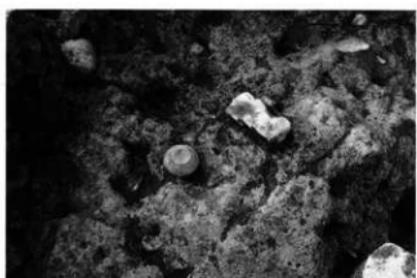
第18号住居址（南から）



第18号住居址須恵器甕出土状態（南から）



第25号住居址（南から）



第26号住居址土師器甕出土状態（南から）



第26号住居址内の第10号焼土址（南から）



第1・2号住居址付近での作業風景（北東から）



調査区東側遺構検出状態（南西から）

## 報告書抄録

ふりがな	おおざくらいせき							
書名	大桜遺跡							
副書名	平成11・12年度県営は場整備事業米沢地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小池岳史							
編集機関	茅野市教育委員会							
所在地	〒391-8501 長野県茅野市塚原二丁目6番地1号 Tel 0266-72-2101							
発行年月日	西暦2001年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド		北緯 °°'	東經 °°'	調査期間	調査面積	調査原因
大 桜	茅野市米沢 5799-2番地 他	市町村 20214	遺跡番号 39	36度 01分 53秒	138度 10分 53秒	11年度 20000723 ↓ 20010113 12年度 20010626 ↓ 20010906	1,900m <sup>2</sup>	県営は場整備事業米沢地区に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項	
大 桜	集落跡	縄文時代中期後半 ～後期中葉 平安時代		竪穴住居34軒	縄文時代中期後半～後期 中葉の土器・石器 平安時代の土器			

### 大 桜 遺 跡

—平成11・12年度県営は場整備事業米沢地区  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成13年3月19日 印刷  
平成13年3月22日 発行

編集 長野県茅野市塚原二丁目6番1号  
発行 茅野市教育委員会

印刷 長野県茅野市塚原二丁目12番30号  
永明社印刷所



大桜遺跡遺構全体図 (1/200)

